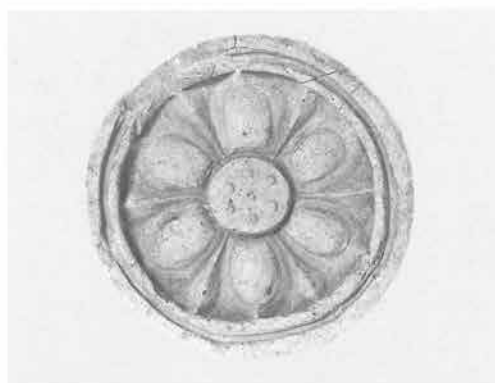


平成8年度

へボノ木遺跡

久留米市文化財調査報告書 第125集



1997

久留米市教育委員会

序

久留米市は、古代より耳納連山や筑後川の自然の恩恵を受け、豊饒な筑紫平野に抱かれて、今日に至る発展をしてきました。

筑後国府跡やへボノ木遺跡など、久留米市内には奈良時代から平安時代の遺跡が数多く存在し、これまでの調査によって多くの資料が蓄積され、当時の生活の状況を垣間見ることができます。このような遺産は、私たちの祖先が残してくれたものであり、私たちの子孫へのメッセージでもあります。今に生を受けた私たちの行うことは、過去を正しく将来に伝えることと言えましょう。

本書は、先人の足跡を記録したものです。決して満足できるものではありませんが、学校教育や生涯学習の資料として活用され、学術研究の一助となれば幸いに存じます。

発刊に当たり、各地権者をはじめ、調査地周辺の方々、また、関係各位のご理解とご協力を頂いたことに厚くお礼申し上げます。

平成9年3月31日

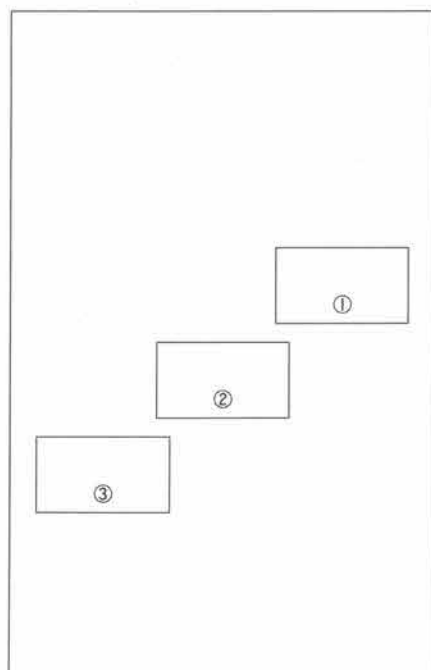
久留米市教育委員会
教育長 桑野善吾

例 言

1. 本書は、久留米市教育委員会が国・県費の補助を受けて、平成8年度に発掘調査を実施した久留米市東合川3丁目に所在するへボノ木遺跡の報告書である。
2. 発掘調査は、文化部文化財保護課の園井正隆（第59・60次）と、富永直樹（第61次）が担当した。
3. 本書に掲載した図面の作成および写真撮影は、各調査担当者が行い、製図は、米澤美詠子（非常勤職員）と副枝叶恵・龍 直美が行った。
4. 遺構実測図は、国土調査法第Ⅱ座標系を基に作成しており、図面の方位は、すべて座標北を示す。
5. 本書に使用した遺構略表記は、それぞれ次のとおりである。
 SA……柵列 SB……掘立柱建物 SD……溝・溝状遺構 SK……土坑
 SI……竪穴住居 SP……柱穴・ピット SX……その他の遺構
6. 調査に関わる遺物・記録類は、久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。
7. 本書に掲載したへボノ木遺跡の調査番号は下記のとおりである。
 第59次調査…… 199611
 第60次調査…… 199613
 第61次調査…… 199618
8. 本文中の遺物実測図番号と写真図版の番号は同一にし、本市文化財保護課における遺物登録番号との対比は、遺物観察表の中に記している。ただし、遺物登録番号は、遺跡調査番号を省略している。
9. 本書の執筆は富永・園井が担当し、編集は園井が行った。

本書に掲載した遺物観察表は、下の凡例に基づく。

1. 口径・底径・器高の数値の単位はcmである。また、（ ）の数値は現存値を示す。
2. 陶磁器の色調は、釉色である。
3. 調整の内、回転ナデはロクロ回転によるナデ、横ナデは内底に見られるロクロ静止状態時のナデを指す。回転ケズリはロクロ回転によるヘラケズリ、ヘラケズリは甕・鍋の内面に認められるケズリ、手持ちケズリは手持ちの不定方向ヘラケズリを示す。
4. 登録番号は、久留米市教育委員会文化財保護課が定める出土遺物の登録番号である。



[表紙写真]

- ①第59次調査出土軒丸瓦
- ②第60次調査現地説明会風景
- ③第61次調査発掘作業風景

登録番号

1	9	9	6	1	1	0	0	0	2	3
↑						↑				
調査番号						遺物番号				

(例)

本文目次

I はじめに	1
1. 位置と環境	1
2. 調査について	1
II 第59次調査	2
1. 調査の概要	2
2. 遺構と遺物の概要	3
3. 小結	13
III 第60次調査	15
1. 調査の概要	15
2. 遺構と遺物の概要	16
3. 小結	35
IV 第61次調査	37
1. 調査の概要	37
2. 遺構と遺物の概要	38
3. 小結	49
V まとめ	51
報告書抄録	

挿図目次

第1図 ヘボノ木遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)	第21図 S K33出土遺物実測図 (1/3)
第2図 表土剥ぎ風景 (南西から)	第22図 S K33出土遺物
第3図 発掘作業風景 (西から)	第23図 S K36実測図 (1/30)
第4図 第59次調査区全景 (北上空から)	第24図 S K36 (南から)
第5図 第59次調査区遺構配置図 (1/150)	第25図 S K39出土遺物実測図 (1/3)
第6図 S B 1 (北から)	第26図 S K39出土遺物
第7図 S B 1 実測図 (1/80)	第27図 削器実測図 (1/2)
第8図 S B 1 出土遺物	第28図 S D31出土遺物
第9図 S B 1 P12出土状態実測図 (1/30)	第29図 S D32出土遺物実測図 (1/3)
第10図 S B 1 出土遺物実測図 (1/3)	第30図 S D32出土遺物
第11図 S B 2 (西上空から)	第31図 包含層出土遺物実測図① (1/3)
第12図 S B 2 実測図 (1/80)	第32図 包含層出土遺物
第13図 S B13実測図 (1/80)	第33図 包含層出土遺物実測図② (1/4・1/2)
第14図 S B13 (東上空から)	第34図 東地区主要遺構配置模式図 (1/600)
第15図 S B30実測図 (1/80)	第35図 第60次調査東半調査区全景 (東上空から)
第16図 S B35実測図 (1/80)	第36図 第60次調査西半調査区全景 (東上空から)
第17図 S B35 (北から)	第37図 第60次調査区遺構配置図 (1/200)
第18図 S B35 P2出土遺物	第38図 S I 221紡錘車出土状態 (東から)
第19図 S K33 (西から)	第39図 S I 221・222・223実測図 (1/60)
第20図 S K33実測図 (1/30)	第40図 S I 221・222・223 (南上空から)

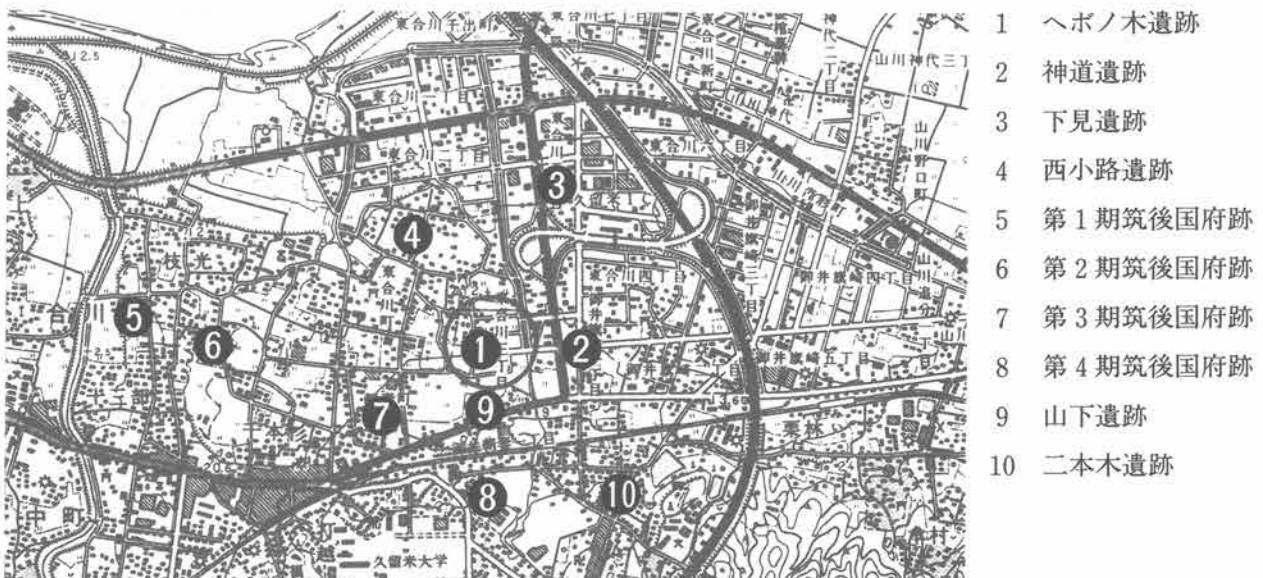
第41図	S I 224・225・226 (南上空から)	第91図	S I 20カマド半載状況 (南東から)
第42図	S I 224・225・226実測図 (1/60)	第92図	S I 20カマド完掘全景 (北から)
第43図	S I 227・278実測図 (1/60)	第93図	S I 20出土遺物実測図 (1/4)
第44図	S I 227・278・228・229 (南上空から)	第94図	S I 20出土遺物
第45図	S I 228・229実測図 (1/60)	第95図	S A10実測図 (1/80)
第46図	竪穴住居出土遺物実測図 (1/4)	第96図	S B2408 (南上空から)
第47図	竪穴住居出土遺物	第97図	S B2408実測図 (1/80)
第48図	S B13 (南から)	第98図	S B2408 P10・P9・P8掘形 (北から)
第49図	S B13実測図 (1/80)	第99図	S B2408 P10・P9・P8掘形土層図(1/40)・断面(北から)
第50図	S B96実測図 (1/80)	第100図	S B2408出土遺物実測図 (1/4)
第51図	S B96 (南から)	第101図	S B2408出土遺物
第52図	S B103・111 (南上空から)	第102図	S K 3 (東から)
第53図	S B103実測図 (1/80)	第103図	S K 3 (1/60)・出土遺物実測図 (1/3)
第54図	S B111実測図 (1/80)	第104図	S K30実測図 (1/60)
第55図	S B105実測図 (1/80)	第105図	S K30 (南上空から)
第56図	S B105 (東上空から)	第106図	S K30 (東から)
第57図	S B142実測図 (1/80)	第107図	S K30出土遺物実測図 (1/4)
第58図	S B142・143・155 (南上空から)	第108図	S K30出土遺物
第59図	S B143実測図 (1/80)	第109図	S X 2 土層断面状況 (南から)
第60図	S B155実測図 (1/80)	第110図	S X 2 実測図 (1/30)
第61図	掘立柱建物柱穴出土遺物実測図 (1/4)	第111図	S X 2 (北から)
第62図	掘立柱建物柱穴出土遺物	第112図	S X 2 (東から)
第63図	S D1125実測図 (1/40)	第113図	S X 2 遺物出土状況 (北から)
第64図	S D1125 (北から)	第114図	S X 2 出土遺物実測図 (1/4)
第65図	S D1125出土遺物	第115図	S X 2 出土遺物
第66図	S D1125出土遺物実測図 (1/4)	第116図	S P 1 (西から)
第67図	S K135実測図 (1/40)	第117図	S P50 (北から)
第68図	S K135土層実測図 (1/30)	第118図	柱穴・ピット群・包含層出土遺物実測図 (1/4)
第69図	S K135 (西から)	第119図	柱穴・ピット群・包含層出土遺物
第70図	S K190実測図 (1/40)	第120図	第61次調査区下層遺構配置図 (1/150)・下層全景 (南東から)
第71図	S K190遺物出土状態 (南から)	第121図	S X15 (北西から)
第72図	S K190出土遺物実測図 (1/4)	第122図	S X15縄文土器出土状況 (北から)
第73図	S K190出土遺物	第123図	S K59 (東から)
第74図	S K230実測図 (1/40)	第124図	S X60 (西から)
第75図	S K230土層実測図 (1/60)	第125図	S X60木炭出土状況 (北から)
第76図	S K230 (南から)	第126図	S X60木炭出土状況 (東から)
第77図	S K230遺物出土状態 (北から)	第127図	S X60土層図(1/40)・土層状況 (南から)
第78図	S K230出土遺物実測図 (1/4)	第128図	S K61 (東から)
第79図	S K230出土遺物①	第129図	第61次調査出土縄文土器実測図 (1/4)
第80図	S K230出土遺物②	第130図	第61次調査出土縄文土器
第81図	その他の遺構出土遺物	第131図	第61・63次調査区遺構配置図 (1/200)
第82図	北地区主要遺構配置模式図 (1/600)	第132図	南地区主要遺構配置模式図 (1/600)
第83図	第61次調査区上層全景 (北上空から)	第133図	へボノ木遺跡主要遺構配置模式図 (1/1,000)
第84図	調査風景集成	第134図	へボノ木遺跡発掘調査地域図 (1/2,000)
第85図	第61次調査区上層遺構配置図 (1/200)		
第86図	S I 20実測図 (1/60)		
第87図	S I 20床面検出状況 (北上空から)		
第88図	S I 20完掘全景 (北から)		
第89図	S I 20完掘全景 (東から)		
第90図	S I 20カマド検出状況 (北から)		

I はじめに

1. 位置と環境

へボノ木遺跡は、久留米市街地東部の東合川三丁目一帯に広がる遺跡である。遺跡周辺は、北東に存する九州自動車道久留米インターチェンジと国道210号線・322号線をベースに、商業・住宅地としての土地開発が著しい地区である。一方、遺跡内は専用住宅・共同住宅・畑・水田が渾然と存在する。昭和53年に着工された久留米都市計画事業東部土地区画整理事業を機に、従来の河川・道路・土地区画等は一新され、旧地名の東合川町大字足穂字上・下へボノ木と言われた時の面影は、既に土に覆われている。

本遺跡は、耳納連山の西端に位置する高良山より派生した扇状地の低位段丘に広がる。この段丘上には小河川が北流し、筑後川に合流する。遺跡の東側に中谷川、西側に井田川があり、両河川によって挟まれた部分にへボノ木遺跡は存在する。また、周辺には、同様な地形の上に立地する遺跡が多く分布し、縄文時代から江戸時代の遺構・遺物が出土している。



第1図 へボノ木遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)

2. 調査について

平成8年度に実施した調査は、第59～64次の6地点である。本書では、第59～61次の3地点の調査報告を行い、他の次数の成果報告は、それぞれ受託事業の報告書に収録されている。今年度の3地点は、中央地区を除いた、東地区（59次）・北地区（60次）・南地区（61次）と異なった地区の調査となった。

第1表 平成8年度へボノ木遺跡発掘調査一覧表

次数	調査地地番	調査面積	調査期間	調査原因	収録文献
59	久留米市東合川三丁目15番7	270㎡	1996. 7. 8～ 8. 7	専用住宅	第125集
60	久留米市東合川三丁目9番10～12	650㎡	1996. 8. 1～10.23	専用住宅	第125集
61	久留米市東合川三丁目19番1	200㎡	1996. 8.19～ 9.11	専用住宅	第125集
62	久留米市東合川三丁目20番1,195番2	1,000㎡	1996. 8. 7～10.15	共同住宅	第121集
63	久留米市東合川三丁目19番1	300㎡	1996. 9.11～10.15	共同住宅	第122集
64	久留米市東合川三丁目14番4・5	317㎡	1996.11.27～12.25	事務所	

※収録文献は「久留米市文化財調査報告書」のシリーズ番号を付した。

II 第59次調査

1. 調査の概要

第59次調査地は、ヘボノ木遺跡の南東部に位置し、倉庫群が検出されている東地区の範囲に含まれる。東地区の倉庫群は、過去に行った第7・13・33・36次の4回の調査で、合計13棟の掘立柱建物の倉庫が検出されている。

本調査に先行して試掘調査を行った結果、遺構検出面は西から東へ向かって標高を下げていることが判明した。これは調査区の東隣を北流する中谷川へ向かう段落ちであろうか。

今回の調査には二つの課題を持たせた。一つは、第13次調査で検出した倉庫群列がさらに南へ延び、本次調査区で総柱建物が検出されるかということ。もう一つは、第22次調査の掘立柱建物に関連する建物が検出されるかということである。

本調査における調査区の設定については、試掘調査の結果を参考にし、かつ、専用住宅建設に係る位置図に基づいて、調査に課した目的の遂行のため、調査トレンチをL字形に設定した。面積は約270㎡で、開発対象地の面積1,073㎡の1/4程度である。表土から遺構検出面まで深く、排土の量を考慮しても妥当な面積であったと考える。

調査は平成8年7月8日から8月7日までを、現地における発掘調査作業にあてた。

発掘作業は、調査中に接近した台風の影響も大したことなく、期間を通して好天に恵まれ、順調な進捗であったが、好天が幸いして酷暑の中の作業に、期間の後半では作業員に疲労が感じられた。

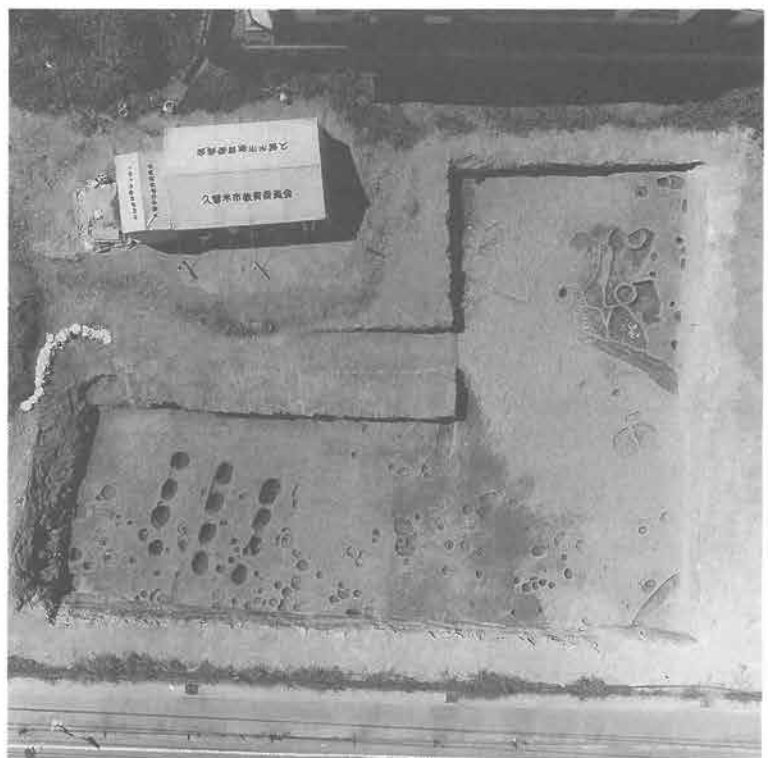
重機を用いて表土剥ぎを行った後、土層観察および遺構検出へと移った。また、調査トレンチの位置図や、基準の座標はトータルステーションを使用して能率化を図った。遺構の発掘と平行して個別遺構の実測を行い、遺構配置図の作成・エlevationへと調査を進めていった。



第2図 表土剥ぎ風景（南西から）



第3図 発掘作業風景（西から）



第4図 第59次調査区全景（北上空から）

2. 遺構と遺物の概要

遺構検出の際、調査区西側では茶褐色土の地山にピットの掘り込みが認められた。しかし、調査区の中央では礫を含む地山を掘り込んだ遺構が検出され、東側は黄褐色土の地山面で柱穴埋土を確認した。検出面は西から東へ向かって標高を下げ、かつ、地山の相違を認めた。

本調査地は、区画整理事業以降に約1 m程の客土がなされ、表土から遺構検出面までの深さは1.2～2 mであった。

遺構の検出状況は、調査区の北西端と西端に集中した様相を示す。



第5図 第59次調査区遺構配置図 (1/150)

調査の結果、掘立柱建物5棟、土坑6基、溝2条、その他ピットを検出した。また、遺物は奈良・平安時代の土師器蓋・坏・小皿・皿・碗・高坏・鉢・甕、須恵器蓋・坏・鉢・壺・甕、軒丸瓦・平瓦・丸瓦が主に出土した。これらの遺物の他、黒耀石製の石鏃・削器・剥片、サヌカイトの剥片、白磁・青磁碗片、近世陶磁器片など、パンコンテナに詰めると8箱分を数える。

以下、個別の遺構・それに伴う遺物について記すことにする。なお、選別した遺物の内、実測に耐え得るものは図化し、それ以外の遺物は観察表による紹介で留めたい。

掘立柱建物

SB1 (第6～10図)

調査区の北東隅で検出した。梁間2間(3.6m)×桁行3間(3.6m)の南北棟総柱の掘立柱建物である。計画方位はN-15°40'-Eを示す。

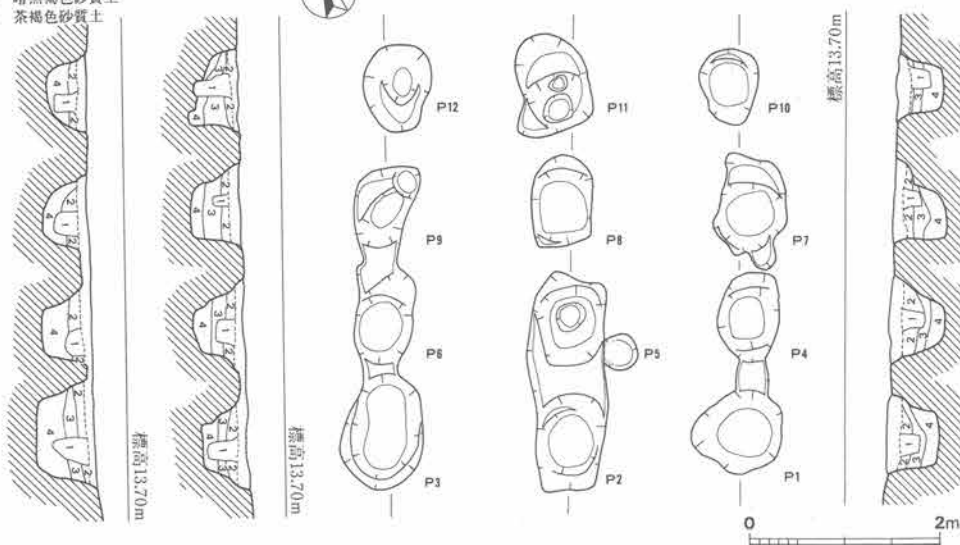
柱間寸法は梁間は6尺(1.8m)等間、桁行は4尺(1.2m)等間である。柱掘形は長辺80～100cm・短辺65～80cmの略長方形を呈し、現存する深さは検出面より50～60cmを測る。

P1-P4、P2-P5、P3-P6-P9の柱掘形は、10cm程掘り下げたところで、その形状を確認したが、上面においては布掘

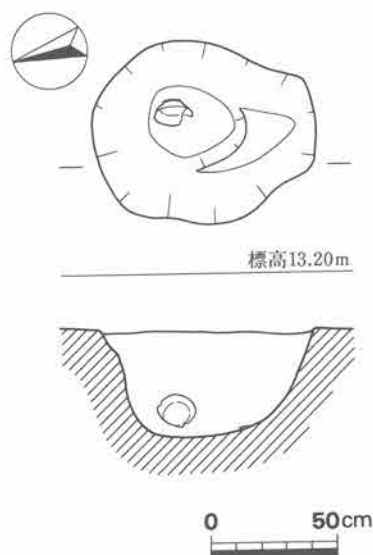
りの様相を示していた。それぞれの柱穴に柱痕跡が見られた。その径は15～20cmを測る。

P10とP12の埋土から土師器の坏が出土している。特に、建物の北西隅に当たるP12から出土した坏は横立状態であった。

- 1 灰黒色砂質土
- 2 黒褐色砂質土
- 3 暗黒褐色砂質土
- 4 茶褐色砂質土



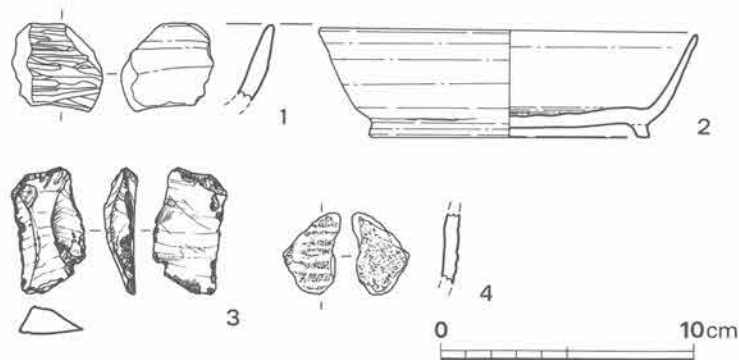
第7図 SB1 実測図 (1/80)



第9図 SB1 P12出土状態実測図 (1/30)



第8図 SB1 出土遺物



第10図 SB1 出土遺物実測図 (1/3)

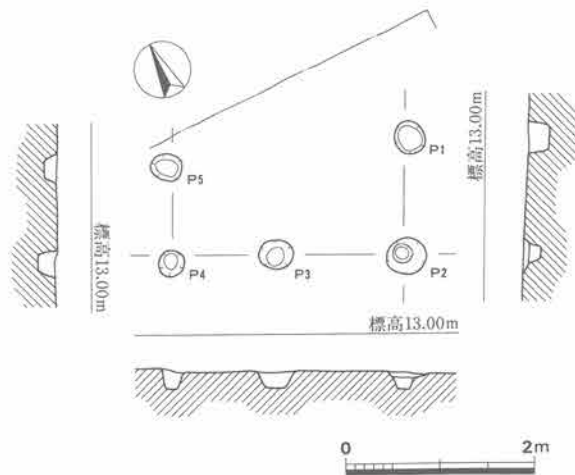
SB2 (第11・12図)

SB1の北東側で検出した掘立柱建物である。

調査区外に延びるため、その規模は不明であるが、計画方位をN-26°30'-Eにとる南北棟の建物と考えられる。梁間2間(2.45m)×桁行1間(1.2m)分を検出した。



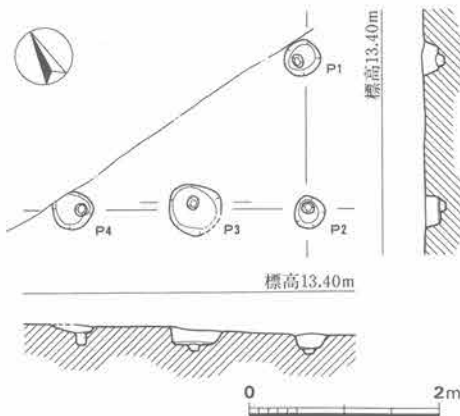
柱間は梁間P2-P 第11図 SB2 (西上空から)



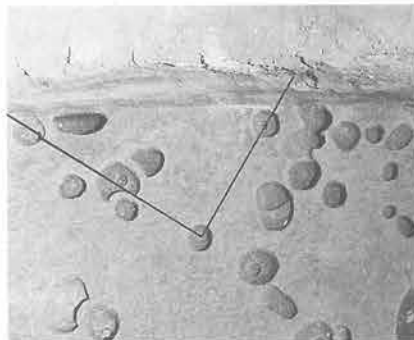
第12図 SB2実測図 (1/80)

3が4.5尺(1.35m)、P3-P4が4尺(1.2m)で、現存深さは13~22cmである。

柱掘形は径27~42cmの円形を呈する。柱痕跡および遺物の出土は認められなかった。



第13図 SB13実測図 (1/80)



第14図 SB13 (東上空から)

間は桁行P2-P3-P4は4尺(1.2m)等間である。現存深さは21~25cmを測る。

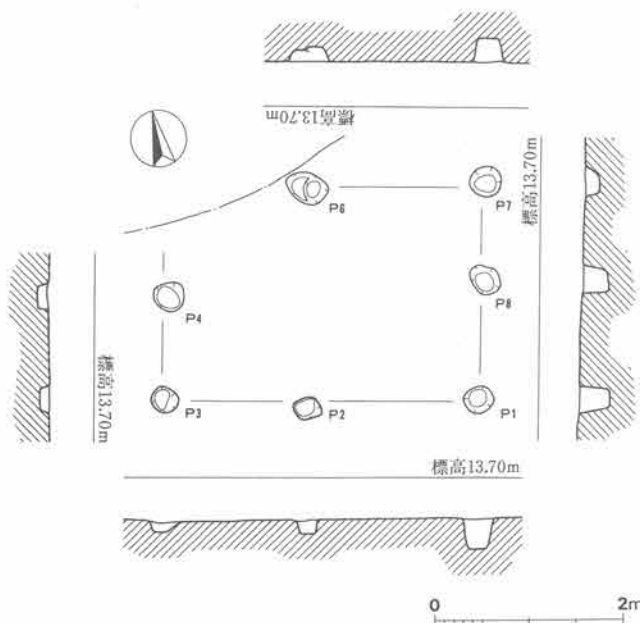
柱掘形は円形で径35~55cm、径約10cmの柱痕跡をそれぞれの柱穴で検出した。遺物は出土していない。

SB30 (第15図)

調査区の北西隅で検出した。梁間2間(2.25m)×桁行2間(3.35m)の規模を有する東西棟の建物である。計画方位はN-12°30'-Eを示す。P5は調査区外に存在すると思われる。

柱間は、梁間P3-P4・P7-P8が3.5尺(1.05m)、P8-P1が4尺(1.2m)で、桁行はP1-P2・P6-P7が6尺(1.8m)、P2-P3が5尺(1.55m)を測る。

柱掘形は25~45cmの径を持つ円形を呈する。遺物はヘラ切り離しの底部を持つ土師器坏や



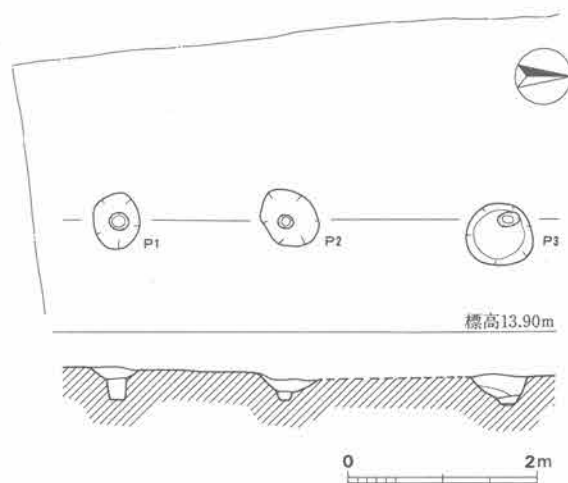
第15図 SB30実測図 (1/80)

甕が出土しているが、磨滅が著しい。

SB35（第16～18図）

調査区の南西において、S K42を切った状態で検出された。南北に2間(4.1m)分を確認した。東西棟の建物と考えられる。資料不足のため、計画方位の明示は避けた。

柱間寸法は、P1-P2が6尺(1.75m)でP2-P3が8尺(2.35m)である。



第16図 SB35実測図 (1/80)



第17図 SB35（北から）

柱掘形は円形を呈し、径48～71cmである。また、P1～P3の径15～20cmの柱痕跡を検出することができた。

P2の埋土から縄文土器底部片が出土したが、その他の遺物は出土していない。



第18図 SB35 P2出土遺物 (1/3)

土 坑

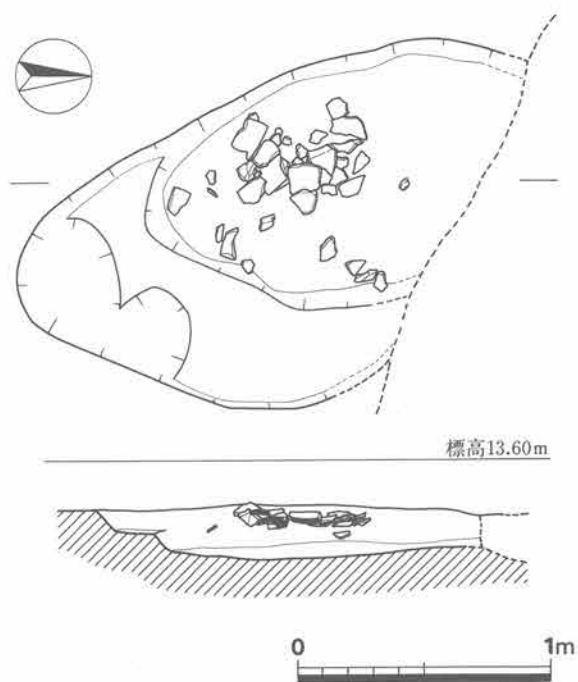
SK33（第19～22図）

調査区の南西部で検出した。土坑の北側部分をS K32に切られている。平面形は不整形を呈する。長軸の現存値は1.95m、短軸は1.25m、現存する深さは22cmを測る。壁面は緩やかな立ち上がりを呈しており、南側平面には平坦な面を持った段がつく。底面の状態は若干の起伏が見られる。

遺物は、今回の調査における出土量の4割程度を占める。その内訳は、単弁素弁五弁・単弁重弁六弁軒丸瓦をはじめ、平瓦・丸瓦、土師器高坏・

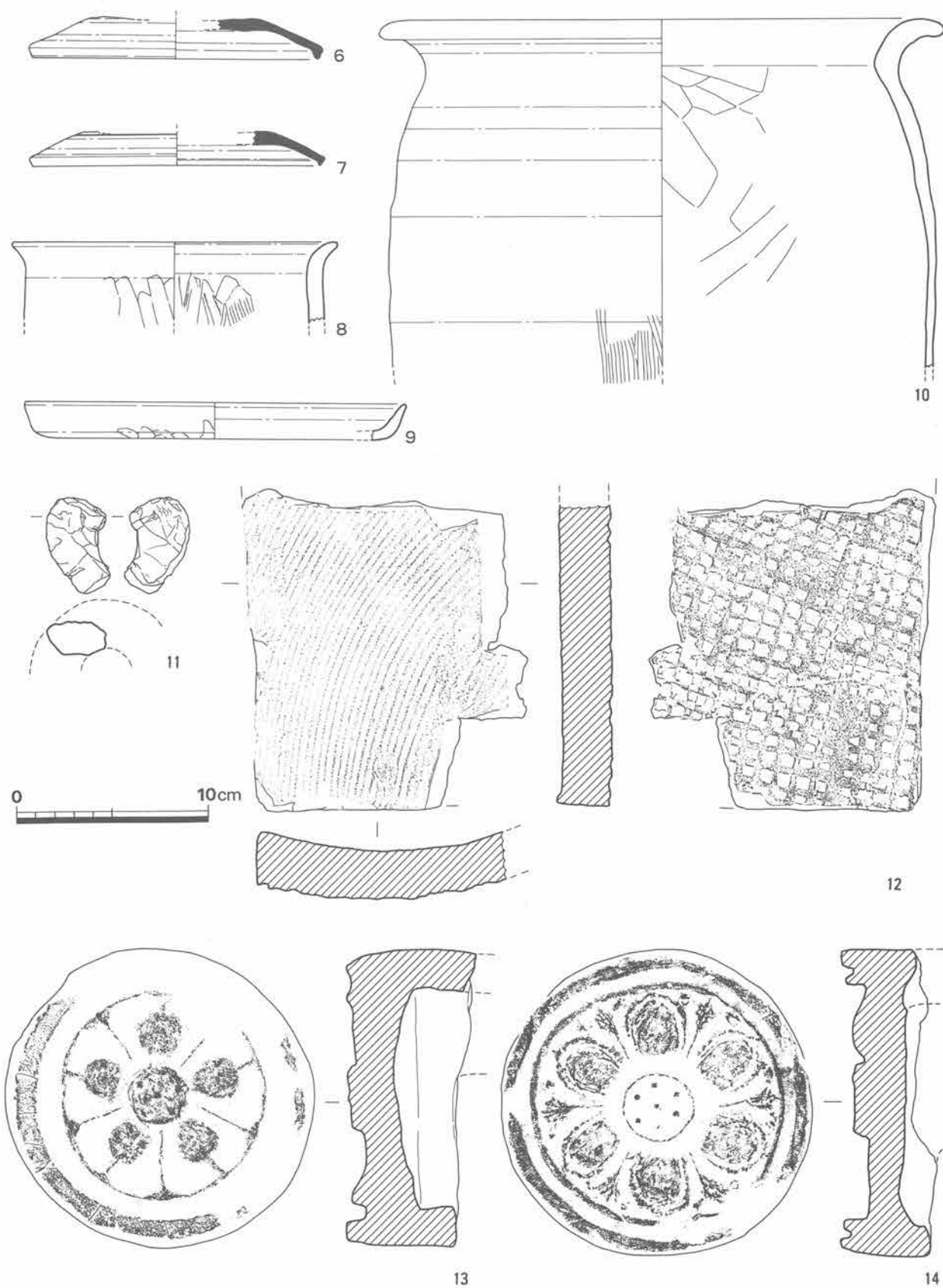


第19図 SK33（西から）

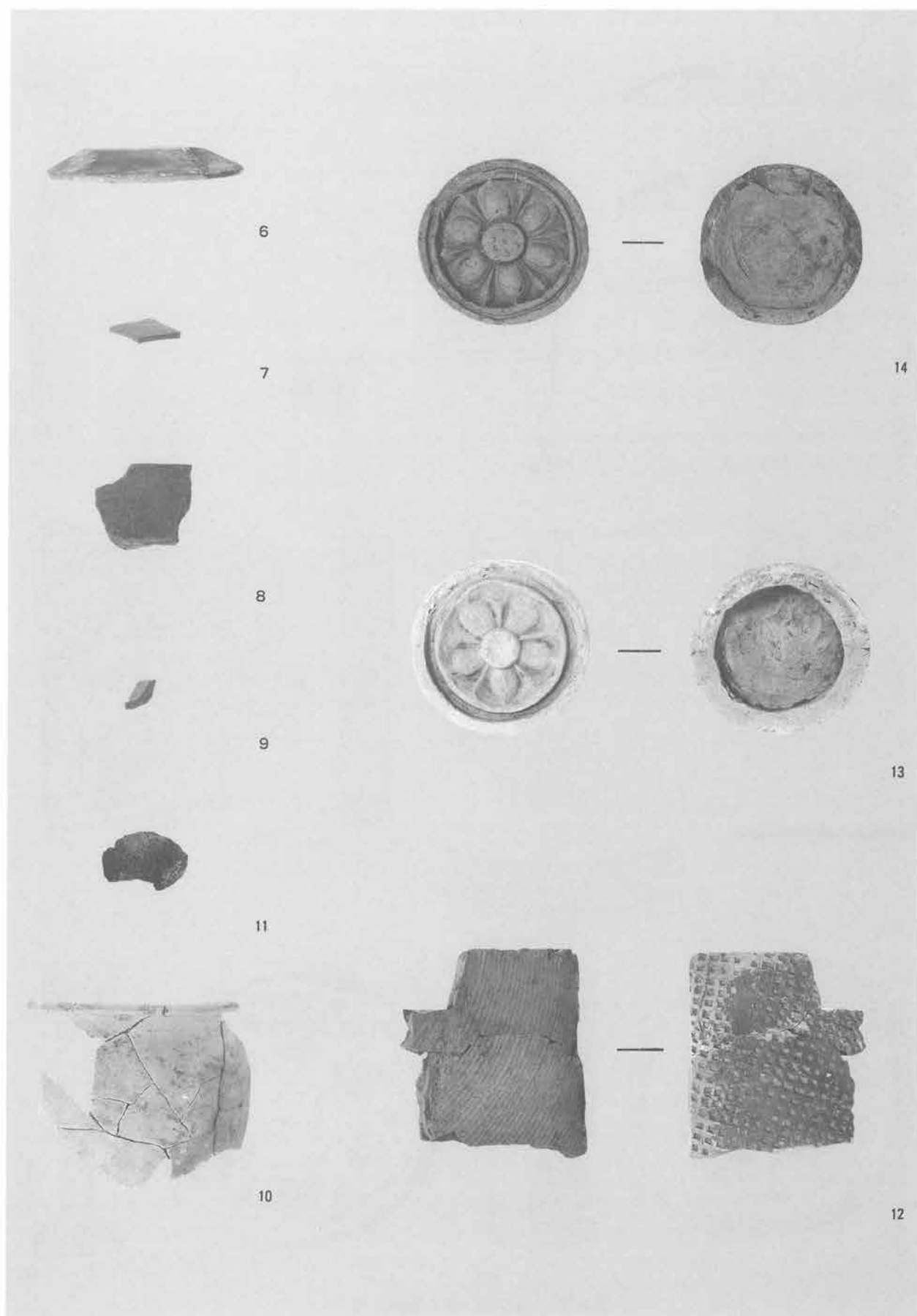


第20図 SK33実測図 (1/30)

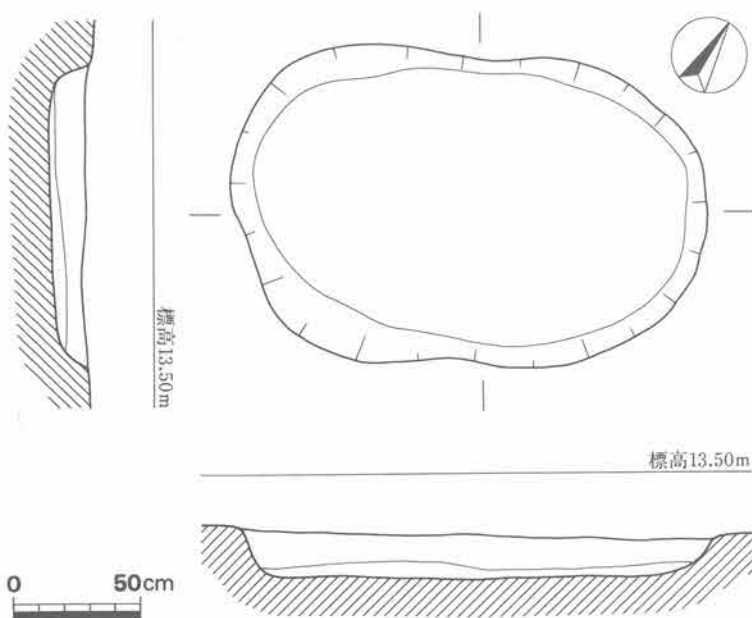
盤・甕、須恵器蓋、ふいご羽口などが一括に投げこまれた状態で出土した。



第21図 SK33出土遺物実測図 (1/3)



第22図 S K 33出土遺物



第23図 SK36実測図 (1/30)

SK36 (第23・24図)

調査区の西端で検出した土坑である。隅丸長方形の形状を呈し、長軸1.89m、短軸1.21mを測る。長軸は南西-北東方向を示す。現存する深さは18cmである。緩やかに立ち上がる壁面を有し、坑底面は



第24図 SK36 (南から)

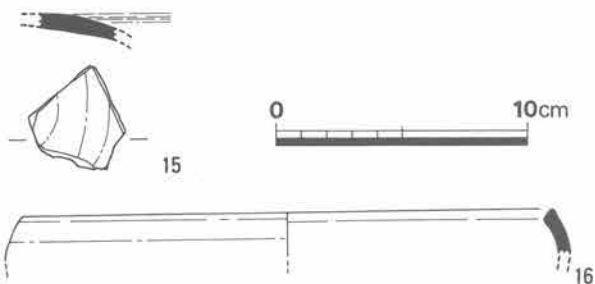
ほぼ平坦である。埋土の観察を行ったが、茶褐色土を1層認めたのみである。

遺物は、土師器の細片が1点出土したにすぎない。

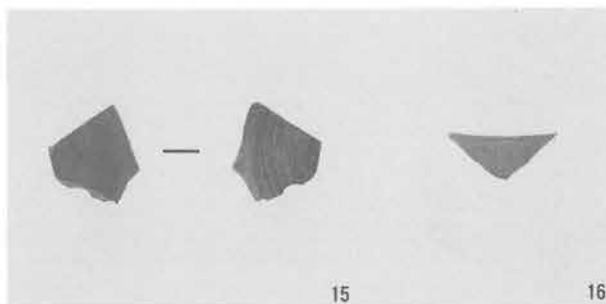
SK39 (第25・26図)

調査区南側の東寄りで検出した。南端をピットに切られており、現存する長軸は80cm、短軸は55cmを測る。平面形は隅丸長方形を呈すると思われる。南西から北側にかけて平坦な段を有する。現存深さは21cmで、最深部はピット底面の深さとかわらない。

出土した遺物は、土師器蓋・甕、須恵器蓋・坏・鉄鉢である。須恵器の蓋は硯に転用したものである。



第25図 SK39出土遺物実測図 (1/3)



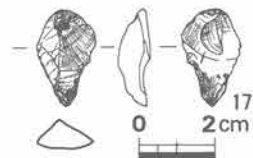
第26図 SK39出土遺物

溝

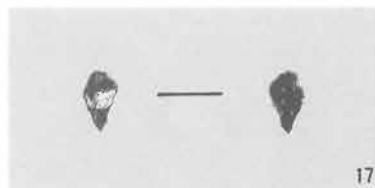
SD31 (第27・28図)

調査区の北西隅で検出した。南西-北東の方向に走行する溝である。検出長2.5mで、溝幅40~60cm、現存深さ17~22cmを測る。断面形状はU字形を呈し、溝底は北方向に下がっている。

遺物は黒曜石製の削器と土師器甕片がある。

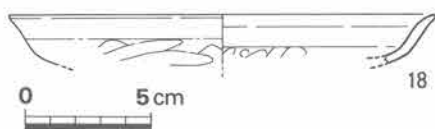


第27図 削器実測図 (1/2)



第28図 SD31出土遺物

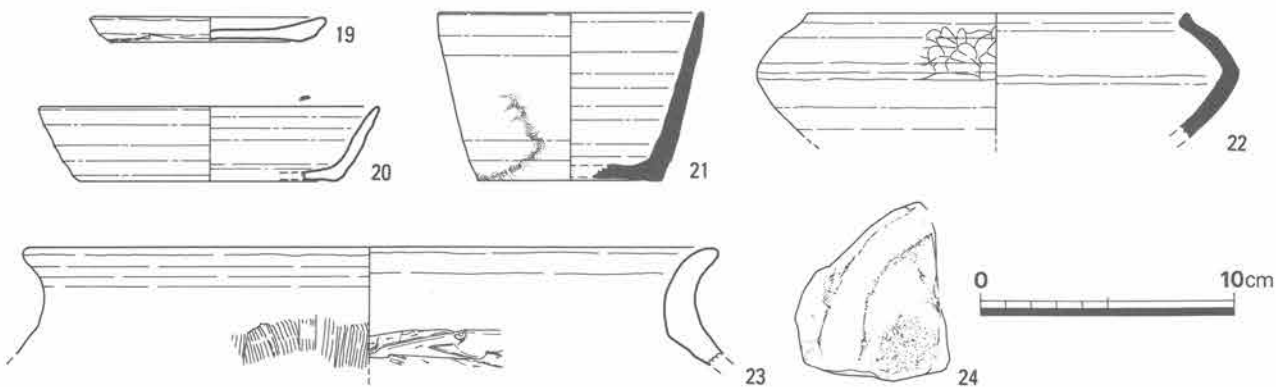
この溝は、第13次調査東区で
検出されたS D1343に続く溝
と考えられる。S D1343は総
柱建物S B1420・1422を切っ
ている。走向方位は座標北か
ら東へ約30度振れる。旧状に



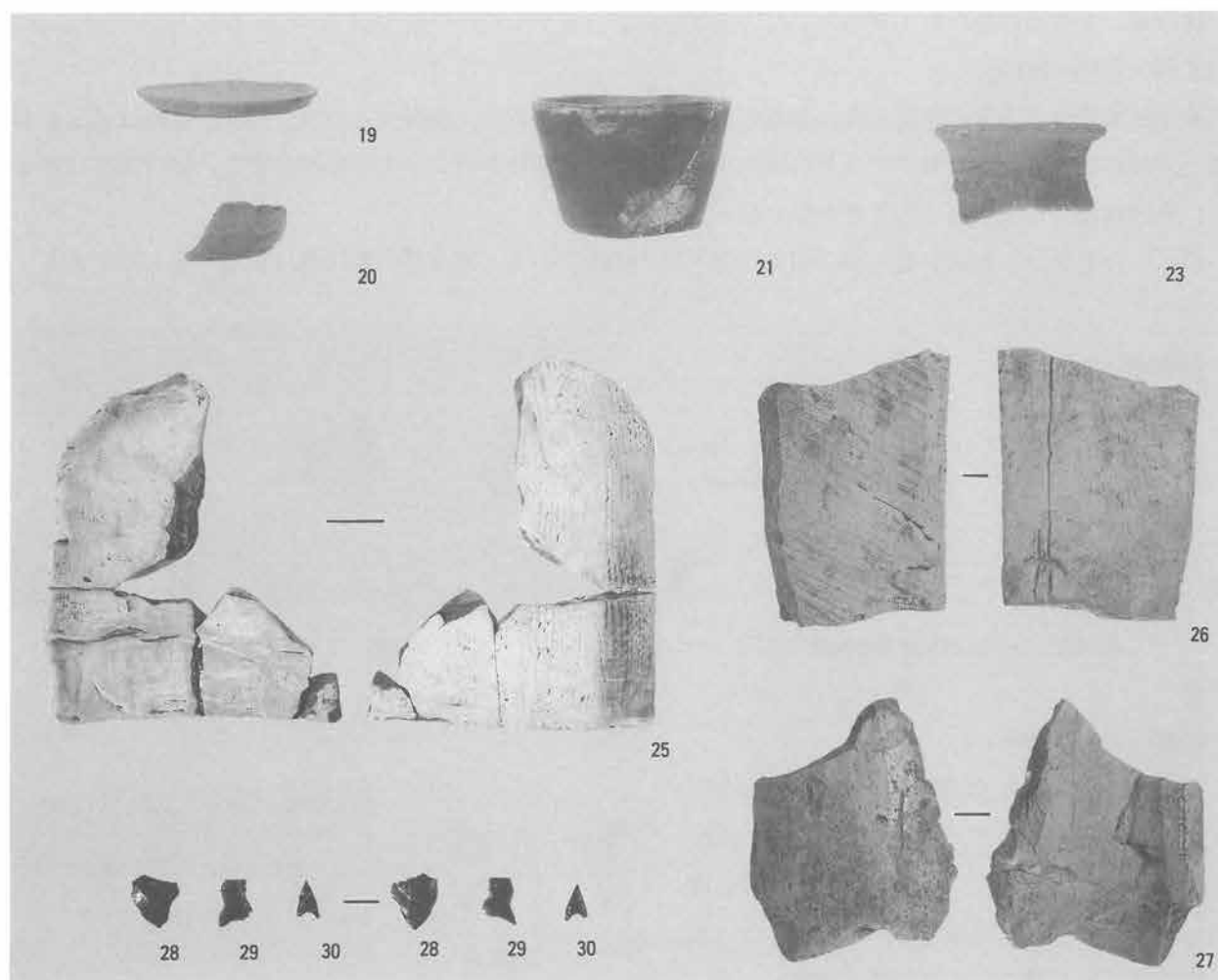
第29図 S D32出土遺物実測図 (1/3)



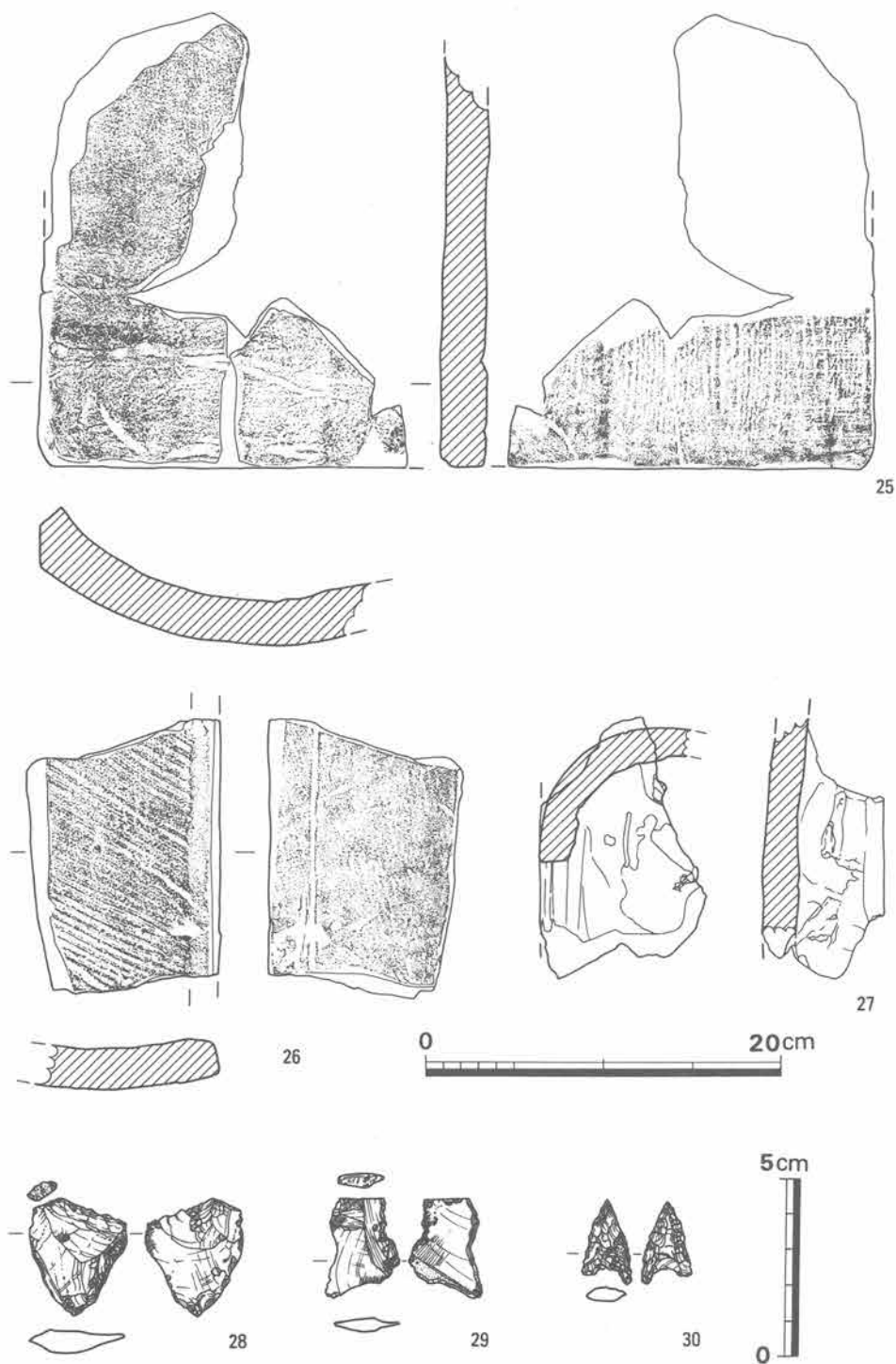
第30図 S D32出土遺物



第31図 包含層出土遺物実測図① (1/3)



第32図 包含層出土遺物



第33図 包含層出土遺物実測図② (1/4・1/2)

おける畦畔の方位は約9度東へ振れていたことから考えると、畦畔の側溝とは判断しがたい。

SD32 (第29・30図)

調査区西側を南東-北西方向に走行する溝である。黒灰色の埋土を有する。調査区の壁面を観察すると、表土から50cmの深さにその掘り込み上面が認められた。検出幅20~80cmで東へ移行するほど狭くまり、かつ、底面は深くなり、37cmの比高差が見られる。

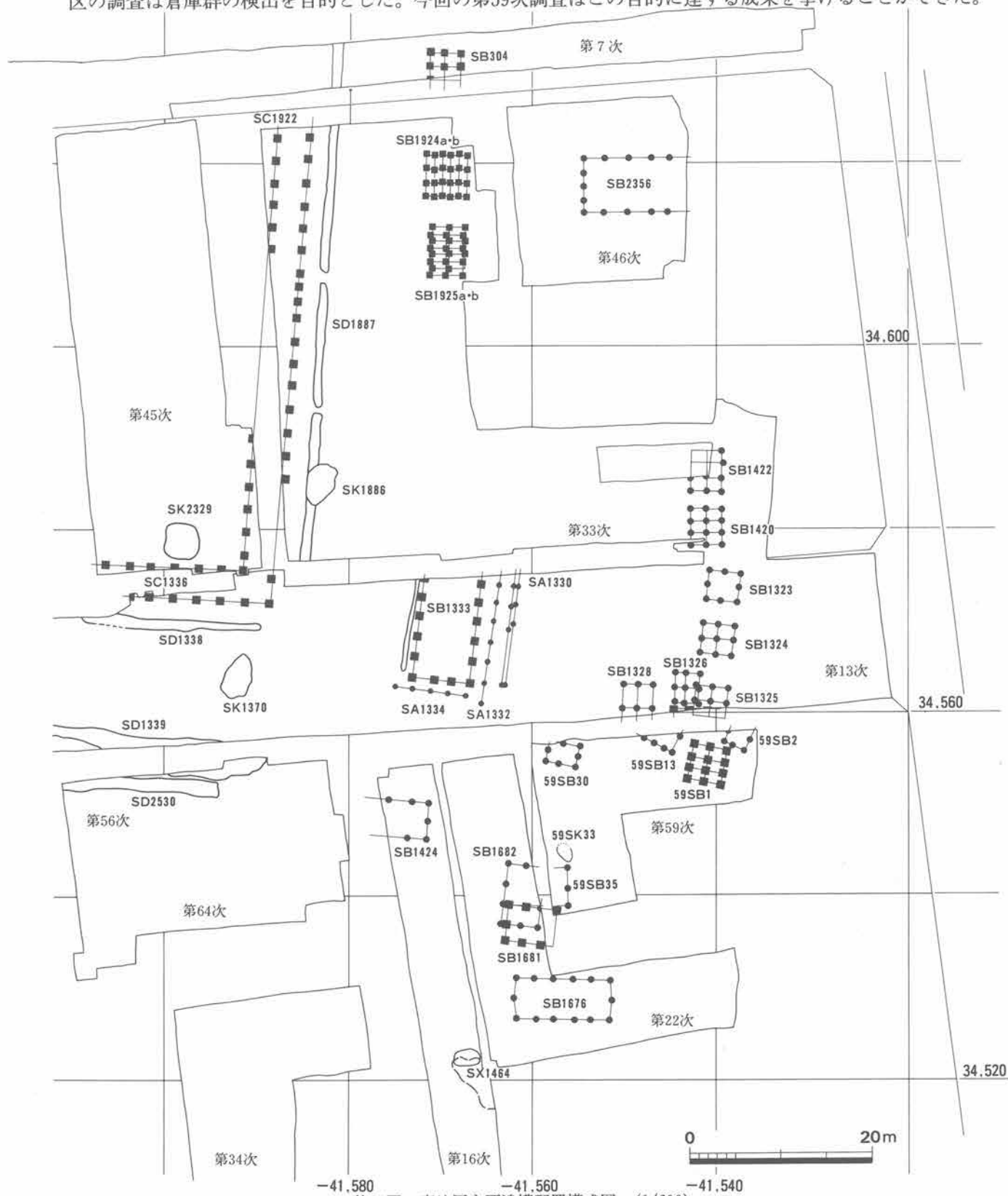
出土遺物は、手持ちヘラケズリの土師器皿・甕、青磁、白磁、染付碗片などがあり、遺物の時期にかなりの時間差が見られる。近世に掘削された溝と考えられる。

第2表 遺物観察表

遺物No	出土遺構	材 質	器種	法 量			色 調		調 整		胎 土	焼 成	備 考	登録番号
				口 径 (長)	底 径 (幅)	器 高 (厚)	外面	内面	外面	内面				
第10図 1	SB1 P10掘形	土師器	坏			(3.0)	茶褐色	橙褐色	回転ナデ ミガキ	回転ナデ	精良	良好	赤色顔料塗布	199611 00001
第10図 2	" P12	"	"	15.0	11.2	4.3	橙褐色	淡橙褐色	回転ナデ	回転ナデ	微～砂粒 赤色粒子	"	高台付 回転ヘラケズリ底	199611 00002
第10図 3	" P10掘形	黒曜石	削器	5.08	2.59	1.08								199611 00025
第10図 4	" P5掘形	縄文土器	鉢				黄褐色 灰黒色	赤褐色	ナデ 条痕文	ナデ	微～砂粒	良好		199611 00024
第18図 5	S B35 P2掘形	"	"			(3.2)	茶褐色	茶灰褐色	ナデ	ナデ	角閃石・長石・石英 微～石粒	"		199611 00027
第21図 6	S K33	須恵器	蓋	15.4		(2.2)	淡～ 暗灰色	淡～ 青灰色	回転ケズリ 回転ナデ	回転ナデ	微～砂粒	"		199611 00006
第21図 7	"	"	"	15.5		(1.8)	黒灰色	明灰色	回転ケズリ 回転ナデ	回転ナデ	"	"		199611 00007
第21図 8	"	土師器	甕	17.1		(4.3)	明赤灰褐色	茶褐色	回転ナデ ナデ	回転ナデ 縦ヘラケズリ	微～石粒	"	口縁部資料	199611 00004
第21図 9	"	"	盤	20.0	18.8	(1.9)	茶灰褐色	茶灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	精良	"		199611 00005
第21図 10	"	"	甕	29.4		(18.3)	橙褐色	淡茶灰褐色	回転ナデ 鮮毛目後ナデ	回転ナデ ヘラケズリ	1～5mm大石英片 多量の細～石粒	"		199611 00010
第21図 11	"	"	羽口	(3.4)	(3.1)	(2.0)	暗黄灰色	暗黄灰褐色	ナデ 指頭押え		微～石粒	"		199611 00009
第21図 12	"	瓦	平瓦	(15.7)	(14.9)	2.5	黄灰色	淡～ 黄灰色	布目痕 ケズリ	正格子 タタキ	精良	やや 良好	側辺外縁面取り	199611 00008
第21図 13	"	"	軒丸瓦	15.5			明黄褐色	明黄褐色	ナデ	ナデ	細～石粒	良好	単弁素弁五弁	199611 00019
第21図 14	"	"	"	16.1			黄灰色	黄灰色	ナデ	ナデ	微～石粒	"	単弁重弁六弁	199611 00020
第25図 15	S K39	須恵器	蓋			(1.1)	暗赤灰褐色	暗赤灰褐色	回転ケズリ 回転ナデ	回転ナデ	微～細砂粒	やや 良好	転用碗	199611 00012
第25図 16	"	"	鉢	21.3		(1.8)	明灰色	明灰色	回転ナデ	回転ナデ	精良	良好	鉄鉢形	199611 00011
第27図 17	S D31	黒曜石	削器	2.54	1.49	0.71								199611 00026
第29図 18	S D32	土師器	皿	17.0		(2.0)	橙褐色	橙褐色			微～砂粒 赤色粒子	良好		199611 00003
第31図 19	包含層	"	皿	9.4	7.6	1.0	茶褐色	茶褐色	回転ナデ	回転ナデ 横ナデ	精良 赤色粒子	"	ヘラ切り底	199611 00016
第31図 20	"	"	坏	13.6	10.0	3.0	橙褐色	橙褐色	回転ナデ 回転ケズリ	回転ナデ	微～砂粒	"	回転ヘラケズリ底	199611 00023
第31図 21	"	須恵器	碗	10.6	7.3	6.7	暗灰褐色	赤灰褐色	回転ナデ 回転ケズリ	回転ナデ	微～砂粒 黒色粒子	"	回転ヘラケズリ底	199611 00018
第31図 22	"	"	鉢	15.2		(5.0)	濃黄灰色	濃黄灰色	回転ナデ	回転ナデ	微～石粒	"		199611 00013
第31図 23	"	土師器	甕	27.4		(4.7)	橙褐色	濃橙褐色	回転ナデ 縦刷毛目	回転ナデ ヘラケズリ	微～石粒	"		199611 00017
第31図 24	"	瓦	軒丸瓦	(6.9)	(6.0)		淡褐色	淡褐色	ナデ	ナデ	微～石粒	"	単弁素弁五弁	199611 00015
第33図 25	"	"	平瓦	(24.4)	(18.6)		黄灰色	黄灰色	布目痕	縄目タタキ	長石粒	"		199611 00021
第33図 26	"	"	"	(14.5)	(11.0)		黄灰褐色	黄灰褐色	布目痕 ケズリ	縄目タタキ ナデ	微～砂粒	"	側辺外縁面取り	199611 00022
第33図 27	"	"	丸瓦	(13.5)	(9.3)		明茶褐色	明茶褐色	ヘラケズリ ナデ消し	布目痕	微～砂粒	"	側辺内縁面取り 行基瓦	199611 00014
第33図 28	"	黒曜石	削器	3.22	2.75	1.00								199611 00028
第33図 29	"	"	"	(2.70)	2.21	0.41								199611 00029
第33図 30	"	"	石鏃	2.33	(1.37)	0.42								199611 00030

3. 小 結

ヘボノ木遺跡を4地区に分け、それぞれの地区の性格を追求しながらこれまで調査を行ってきた。東地区の調査は倉庫群の検出を目的とした。今回の第59次調査はこの目的に達する成果を挙げることができた。



第34図 東地区主要遺構配置模式図 (1/600)

検出した遺構・遺物について、若干まとめておきたい。

倉庫としての機能を持つ総柱建物は、東地区では13棟を検出しており、今回のS B 1を含めると14棟になる。第34図に示したように、分布状況は2ブロックに分かれ、座標を用いると $X=34,608\sim 34,632$ 、 $Y=-41,566\sim 41,572$ の約144㎡の範囲に5棟(N群)、また、 $X=34,552\sim 34,590$ 、 $Y=-41,538\sim 41,550$ の約456㎡に9棟(S群)が存在する。

N群は3間×2間の南北棟建物で占められる。計画方位も座標北から僅かに1度ほど東に傾き、柱筋もほとんど揃えている。柱掘形は方形ないし、略方形を呈する。S B 1924と1925については建て替えを行っており、それぞれ同一地点で建物の重複が見られる。ヘボノ木遺跡で検出した総柱建物の分類表(註1)ではA-1、A-2の範疇に入る建物である。

S群は2間×2間と3間×2間の南北棟である。計画方位は東へ1度30分(2棟)、2度(2棟)、7度(4棟)に加え、15度40分(1棟)と均一さを欠いている。柱掘形は円形が大半で、今回検出したものが略長方形を呈している。S B 1325はS B 1326より後出すると報告されている(註2)他は、建物の先後関係は明らかではない。分類表ではB-1、B-2が主流となる。しかし、柱掘形に注目すると、S B 1の南半は柱掘形に布掘り状の痕跡が窺え、個々の掘形が略長方形を呈することはA-1に分類することができる。

倉庫は2棟から3棟を単位として建てられている。これらは分布・計画方位・柱掘形の状態から3か所の単位的倉庫を認めることができる。単位における計画方位の基準は厳守していると考えられる。一方、単位からはずれた第13次調査の南端には建物群がひしめくが、第59次調査ではその延長となる柱掘形は検出されていない。単位を前提として建てられた倉庫と、計画方位を無視して建てられた単独倉庫の性格が同様であるか否か、判断し得る資料はない。

これらの単位的倉庫群が、中央地区の建物に関連する施設であったことは相違ないであろう。中央地区の大規模な建物が2度の建て替えを行っていることと、3か所の単位的倉庫との関連性については、慎重な検討を要する。

次に、S K 33出土遺物では8世紀代の土師器・須恵器に伴って多くの瓦が出土している。平瓦には約2寸方形の叩き板を用いた正格子と、幅3.5～4.2cmの縄の巻き目が偏った叩き板を用いた縄目の2種がある。正格子瓦は凹面の布目を幅広の刷毛目状工具で削り取った痕跡が認められる。また、縄目瓦の凹面にはきめ細かな織りの布目が残る。丸瓦は表面をヘラで丁寧に削り、赤色顔料の痕跡が看取される。従来の調査で出土した瓦とは異なった調整を有する瓦である。

また、軒丸瓦の瓦当が2種出土した。単弁素弁五弁はヘボノ木遺跡で主流となる瓦である。もうひとつの単弁重弁六弁は過去に報告された例がない。片岡宏二氏の指摘により、上岩田遺跡、井上廃寺出土の軒丸瓦と比較観察したところ、3か所の範傷が一致したため、同範であると認めた。両遺跡とも7世紀第3・4四半期創建の寺院跡と考えられ、上岩田遺跡の寺院で葺かれた瓦を井上廃寺創建時に再利用したのではないかと片岡氏は推定している。ヘボノ木遺跡に移入された時期は上岩田の寺院が廃絶した後、かつ、井上廃寺の創建までになろう。または、井上廃寺の第Ⅱ期の瓦に変わる時期が推定される。7世紀第3四半期から8世紀初頭までの時期に軒丸瓦を持って来る必要があるのか。新たな課題を提起した軒丸瓦である。

文末ではあるが、貴重なご指摘・ご教示をいただいた小郡市教育委員会片岡宏二氏に感謝します。

(註1) 総柱建物分類表は「ヘボノ木遺跡」『久留米市史第12巻 資料編 考古』1994 P 634～636に掲載

A-1…方形掘形・3間×2間

B-1…円形掘形・3間×2間

A-2…布掘を伴う方形掘形・3間×2間

B-2…円形掘形・2間×2間

(註2) 「東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書 第4集」『久留米市文化財調査報告書 第43集』1985 久留米市教育委員会

III 第60次調査

1. 調査の概要

本調査地点は東合川三丁目9番10～12に所在する。ヘボノ木遺跡の北東部に位置し、ヘボノ木遺跡の北地区に含まれる。開発内容は専用住宅建築である。

北地区は、南面と西面の一部を二重の溝で囲まれ、その中で13棟程の掘立柱建物を検出している。居館的色彩が強い地区であると推定されてきた。また、掘立柱建物が造営される以前には、竪穴住居群が存在したことも確認している。さらに、第11次調査に際して本調査地点にトレンチを設けて確認調査を実施した結果、溝の存在を推測し得る資料を報告している。

これらの調査成果を踏まえ、今回の調査における主眼は、掘立柱建物と竪穴住居の広がり、南面から西面に折れる二重の溝が北面にも存在するかを確認すること、この2点に絞った。

調査区の設定については、北地区の北限を確認できる可能性を重要視して、開発対象地全域を調査対象地とした。調査は対象地を東西に2分して、東半区から実施し、次に西半区へと展開していった。

調査総面積は650㎡となり、平成8年8月1日から10月23日までを現地における調査期間にあてた。

調査期間中の10月5日に、埋蔵文化財の啓発活動の一環として現地説明会を開催し、多数の参加を得た。以下、検出遺構について説明を加えるが、出土遺物については観察表を以て説明に代えたい。また、掲載した遺物実測図は、実測に耐え得る遺物を揚げ、流れ込んだ遺物も一括に掲載している。



第35図 第60次調査東半調査区全景（東上空から）



第36図 第60次調査西半調査区全景（東上空から）



第37図 第60次調査区遺構配置図 (1/200)

2. 遺構と遺物の概要

竪穴住居

本調査区で10軒の竪穴住居を検出した。竪穴住居は中央から西側にかけて分布し、いずれも2～3軒が重複した状態であった。それぞれに土層観察ベルトを設定したが、すでに削平を受けて層序を把握し得る資料とならなかった。

S I 221 (第38～40図)

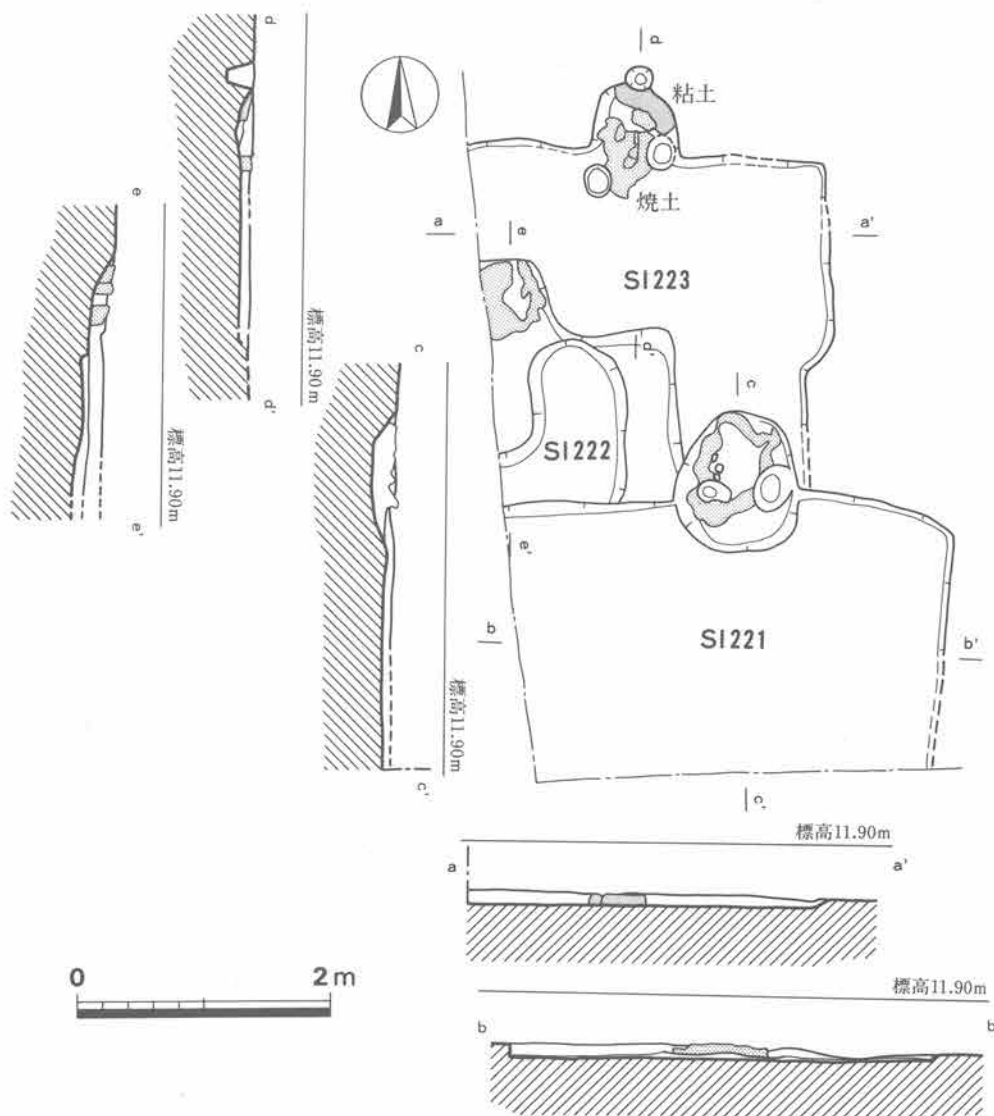
調査区の南西隅で検出した。プランの全容は認められなかったが、北東コーナー部と南北215cm・東西345cm分を検出した。残存する壁高は33cmで、埋土は茶褐色砂質土が全面に認められた。床面は平坦である。北壁にカマドが設けられ、焼土の広がりには110cm×100cmの範囲を示す。土師器の甕片が焼土内から出土した。また、床面直上で滑石製の円筒状紡錘車出土した。埋土から8世紀前～中頃の土師器碗・皿を主に、8世紀後半の須恵器蓋が出土した。

S I 222 (第39・40図)

S I 221に南半を切られた状態で検出した。残存する規模は、壁高14cmで、南北130cm・東西165cm分である。カマドは北壁に付され、残存状態は芳しくない。焼土の外周に黄灰色の粘土が巡る。焼土は焚口から50cm



第38図 S I 221紡錘車出土状態
(東から)



第39図 S I 221・222・223実測図 (1/60)



第40図 S I 221・222・223
(南上空から)

ほど南まで炭を伴って広がる。埋土から8世紀後半の須恵器蓋が出土したが、土師器は8世紀前～中頃の手持ちヘラケズリの皿・坏が出土している。

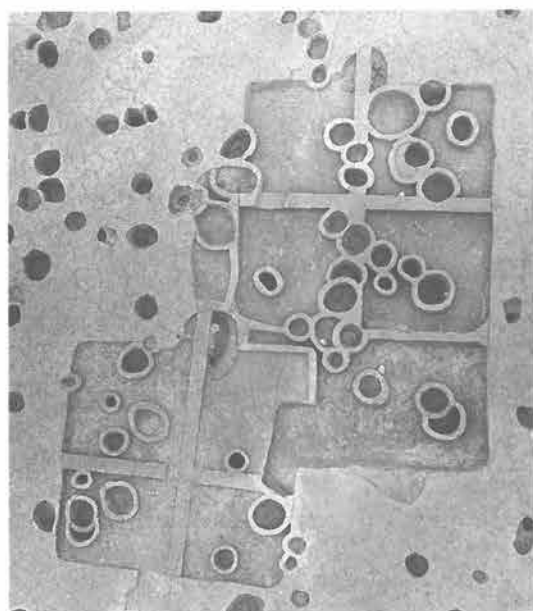
S I 223 (第39・40図)

S I 221と222にプランの南半を切られている。残存規模は280cm×270cmで、壁高は7cmであった。北壁面に焼土を確認した。焼土の外

周には黄灰色粘土帯が巡る。床面では硬化面は全く認められず、黄褐色の地山まで茶褐色土に覆われていた。埋土から出土した遺物は、土師器の甕4片と細片が8片だけで、時期の判断は困難である。

S I 224 (第41・42図)

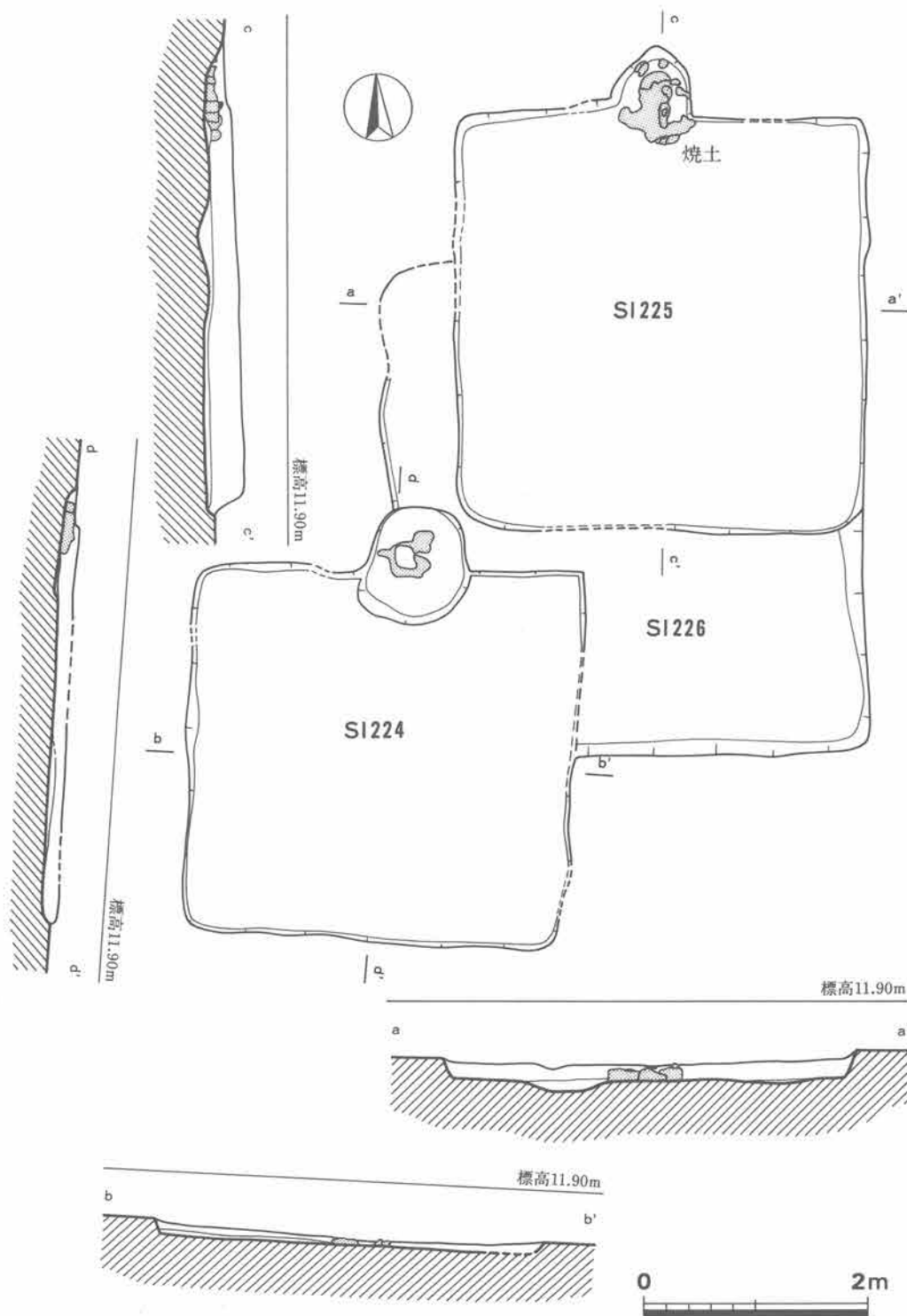
調査区の中央西寄りで検出した。S I 223の北東隣に位置する。S D 220に切られているが、略方形のプランを確認した。規模は336cm×334cmで、残存壁高は12cmである。主軸は座標北から約6度東に傾く。カマドは北壁に設けるが、焼土の残りも良くない。東壁の中央を第11次調査時の確認トレンチによって削られている。床面は硬化面を持つ。柱穴は確認できなかった。埋土からは土師器甕・甑・鉢・坏に加え、縄文時代中期の鉢片が出土した。



第41図 S I 224・225・226 (南上空から)

S I 225 (第41・42図)

S I 224の北東隣で検出した略方形のプランを呈する竪穴住居である。規模は373cm×361cmで南北辺が若干長く、残存壁高は約17cmである。主軸は2度30分ほど東に傾く。カマドは北壁に付設され、焼土は底面付近に僅かに残る。カマドの掘形は南北に80cm、東西に65cm、深さ22cmを測る。床面における柱穴は認められなかった。埋土から出土した遺物は、土師器杯・椀・甕・鉢、須恵器蓋、縄文土器片・黒耀石剥片で、



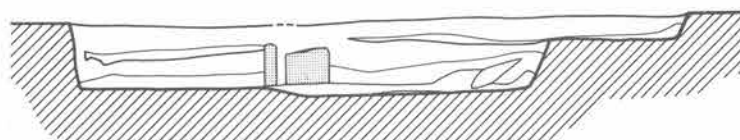
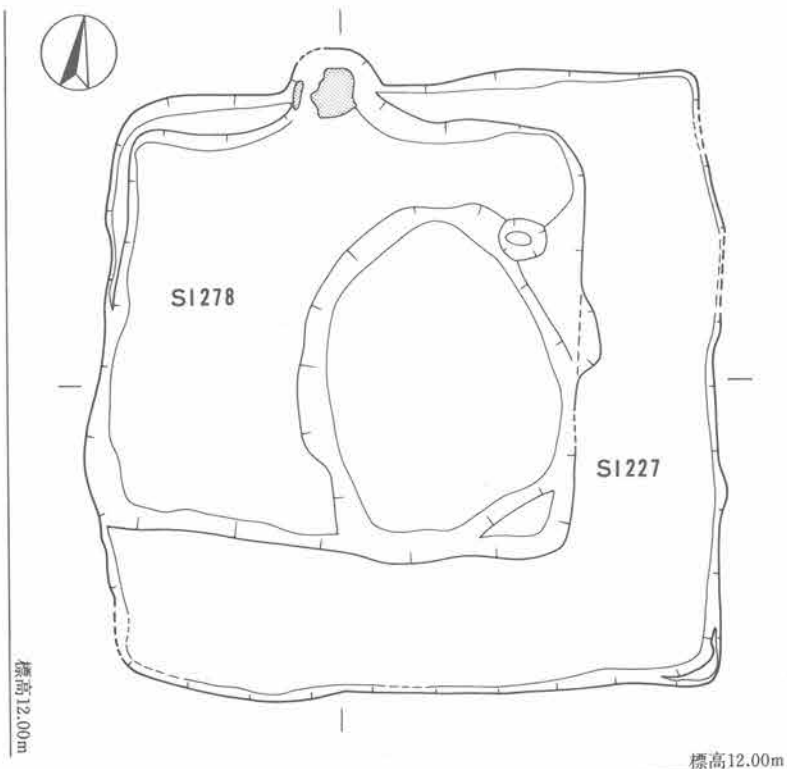
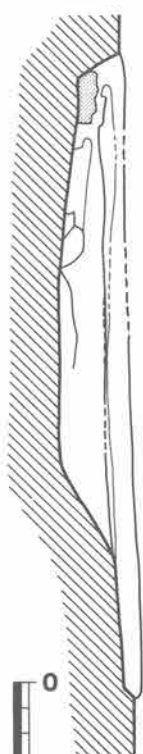
第42図 S I 224・225・226実測図 (1/60)

土師器の細片を含めると8世紀前半～中頃のものが多く見られる。

S I 226

(第41・42図)

S I 224・225に切られている。東壁はS I 225の東壁の線に一致し、南壁も平行な状況を呈するため、主軸方位も同一と考えられる。推定される規模は、南北430cm、東西410cmで北側にカマドを持ったプランであろう。床面で検出したピット内から7世紀後半の土師器の坏が出土しており、この住居の上限を与えることができよう。



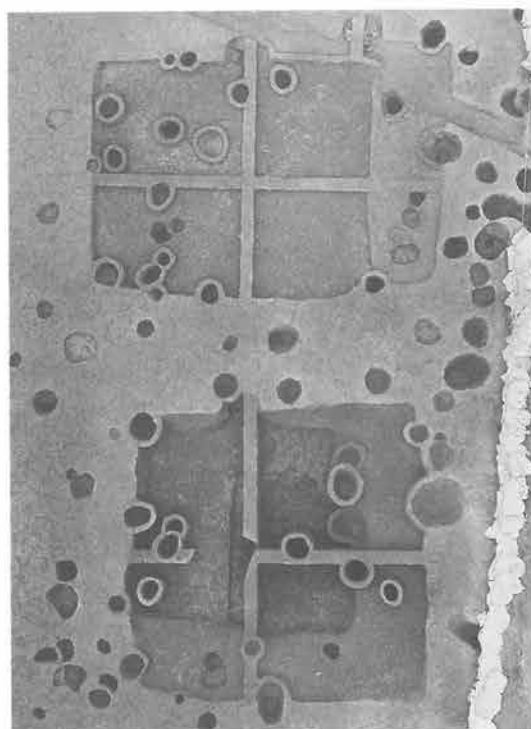
第43図 S I 227・278実測図 (1/60)

S I 227 (第43・44図)

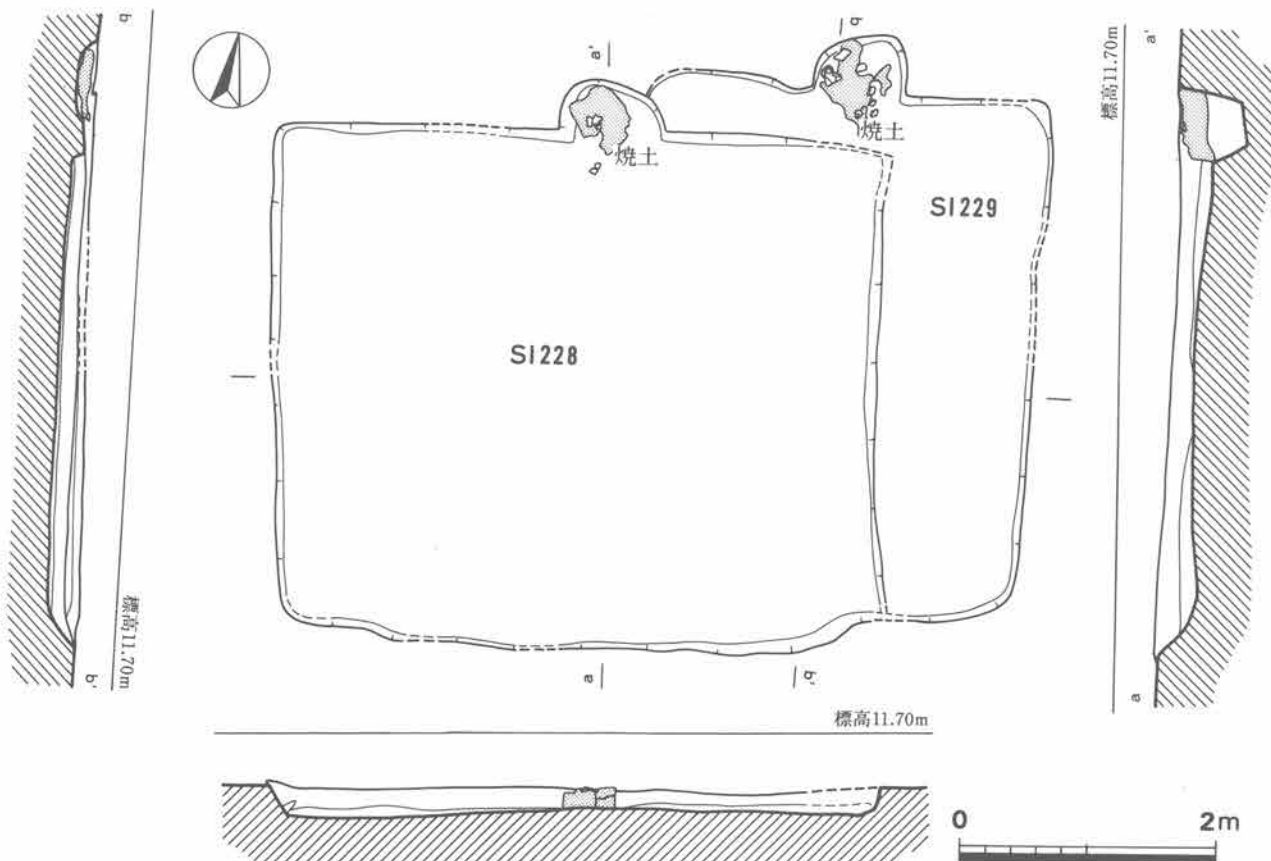
調査区のほぼ中央に位置する竪穴住居である。プランは480cm×475cmの隅丸方形を呈する。残存壁高は約17cmと浅い。過去の調査に伴う確認トレンチを、住居掘形の南西部で認めたが、南壁は辛うじて残っていた。埋土は炭化物が混入した黒褐色土で充たされる。カマドの掘形は北壁で認めたが、検出面において焼土は確認されなかった。検出面から15cmの深さで焼土を認めた。埋土からの遺物は他の竪穴住居と比較できないほど多く出土した。土師器蓋・坏・碗・皿・鉢・甕、須恵器蓋・坏・壺・甕、粘土塊、黒耀石剥片、近世磁器片などである。8世紀前半の遺物が主に出土している。

S I 278 (第43・44図)

S I 227の北西部で床面に達した際に、地山を方形に掘り込んだ痕跡を検出した。埋土は小礫が混入した黒褐色土で、



第44図 S I 227・278・228・229 (南上空から)



第45図 S I 228・229実測図 (1/60)

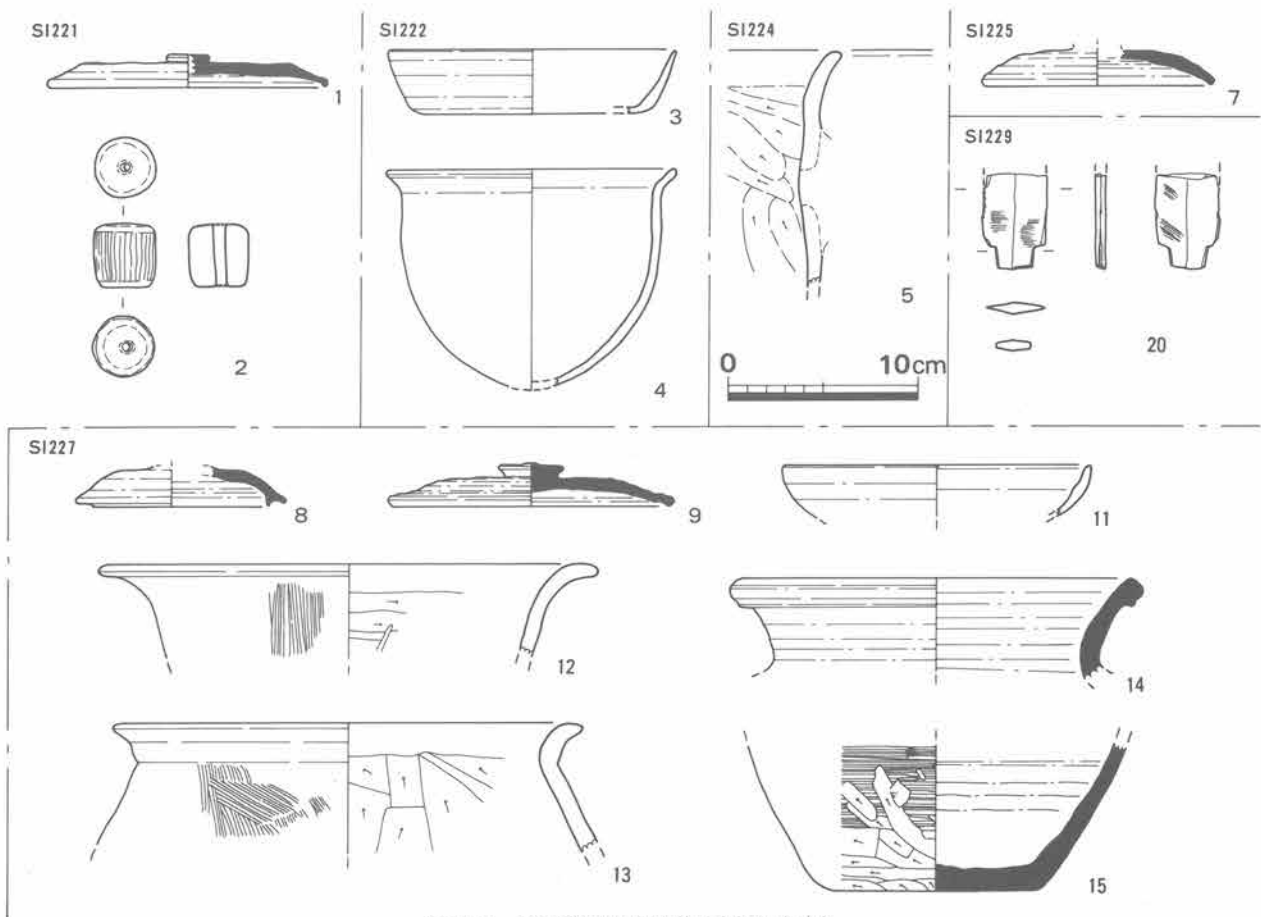
その規模は340cm×360cm、壁高は約36cmを測る。カマドの位置はS I 227と同一で、北壁のほぼ中央になる。東側の床面には、長軸250cm・短軸210cmの楕円形状に、深さ約10cmの掘形を検出した。底面はさほど起伏はない。埋土内の遺物は土師器坏・皿・甕、須恵器蓋・甕である。7世紀後半～8世紀前半の所産と思われる。S I 227に先行すると考えられる。

S I 228 (第44・45図)

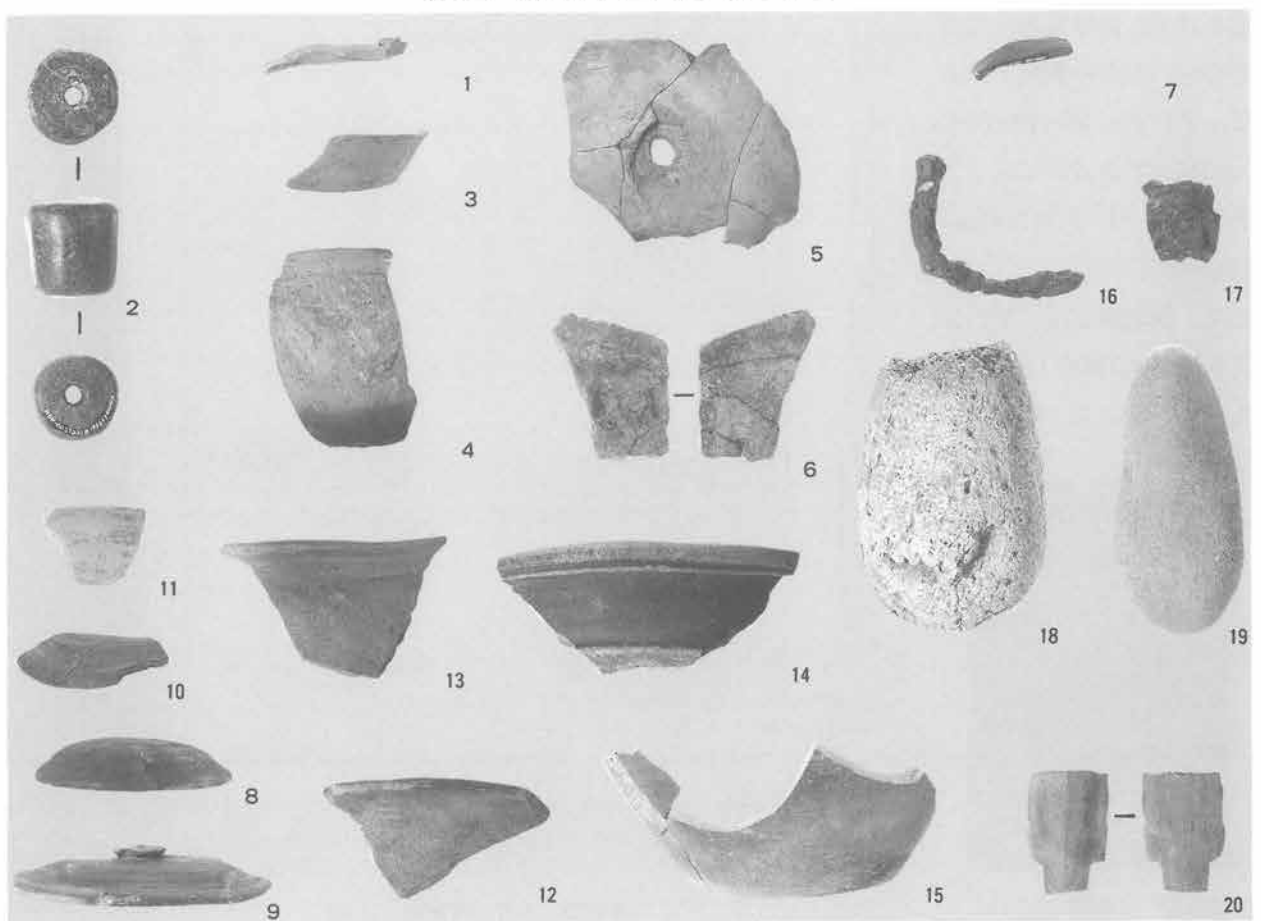
調査区の中央北寄りで検出した。S I 227・278に北隣する位置に当たる。隅丸略方形のプランを呈し、規模は南北410cm、東西435cmで、残存する壁高は16cmを測る。カマドを北壁に設け、その掘形は南北60cm、東西80cmである。検出面で焼土の広がりを確認したが、精査すると黄灰色粘土帯が僅かに残存しているのを確認した。床面は黄色の地山に茶褐色土が混じって硬化面を呈する。しかし、柱穴は検出できなかった。埋土より出土した遺物は、土師器坏・碗・皿・甕、須恵器蓋・坏・壺・甕、粘土塊、黒耀石剥片である。坏・皿の底部に、手持ちヘラケズリの痕跡が多く見られ、8世紀前半に比定されよう。

S I 229 (第44・45図)

S I 228に西半を切られた状態で検出した。残存する壁は北・東壁と南壁の一部である。南壁を延長すると、S I 228の南壁のラインと凡そ合致する。推定される規模は410cm×330cmの南北を主軸とする隅丸長方形のプランを呈するものと考えられる。カマドは北壁面に設けられ、掘形は直径70cmの略円形を呈する。焼土は焚口付近に僅かに残る。土師器の甕片が焼土に混じって出土している。埋土を取り除くと、地山に炭化物が混入した黄褐色粘質土を床面としている。暗黒褐色の埋土からは、土師器皿・甕、須恵器甕、石剣、黒耀石などが僅かに出土している。



第46図 竪穴住居出土遺物実測図 (1/4)



第47図 竪穴住居出土遺物

掘立柱建物

今回の調査では8棟の掘立柱建物を検出することができた。しかし、竪穴住居の埋土の範囲の中で、柱穴を検出することが極めて困難な状態であり、掘立柱建物を確認し得なかった部分があることは否めない北地区における掘立柱建物群の配置、および規模等を考慮しながら検出作業に入った。

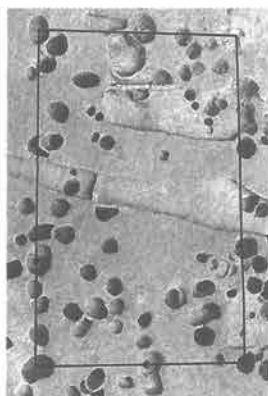
SB13 (第48・49図)

調査区の東側北寄りで検出した南北棟の掘立柱建物である。建物の計画方位は座標北から2度東へ傾いている。桁行は7m・梁間4.4mを測る。柱間は3間×2間を示し、その間隔は210~245cmである。南・北側柱の柱間隔は共に210・225cmで合わせているが、西・東側柱は規則的な柱間隔ではない。柱掘形は略方形や円形を呈し、40~75cmの大きさで、深さは20~44cmを測る。P2・4・10の底面で15~18cmの柱痕跡を検出した。

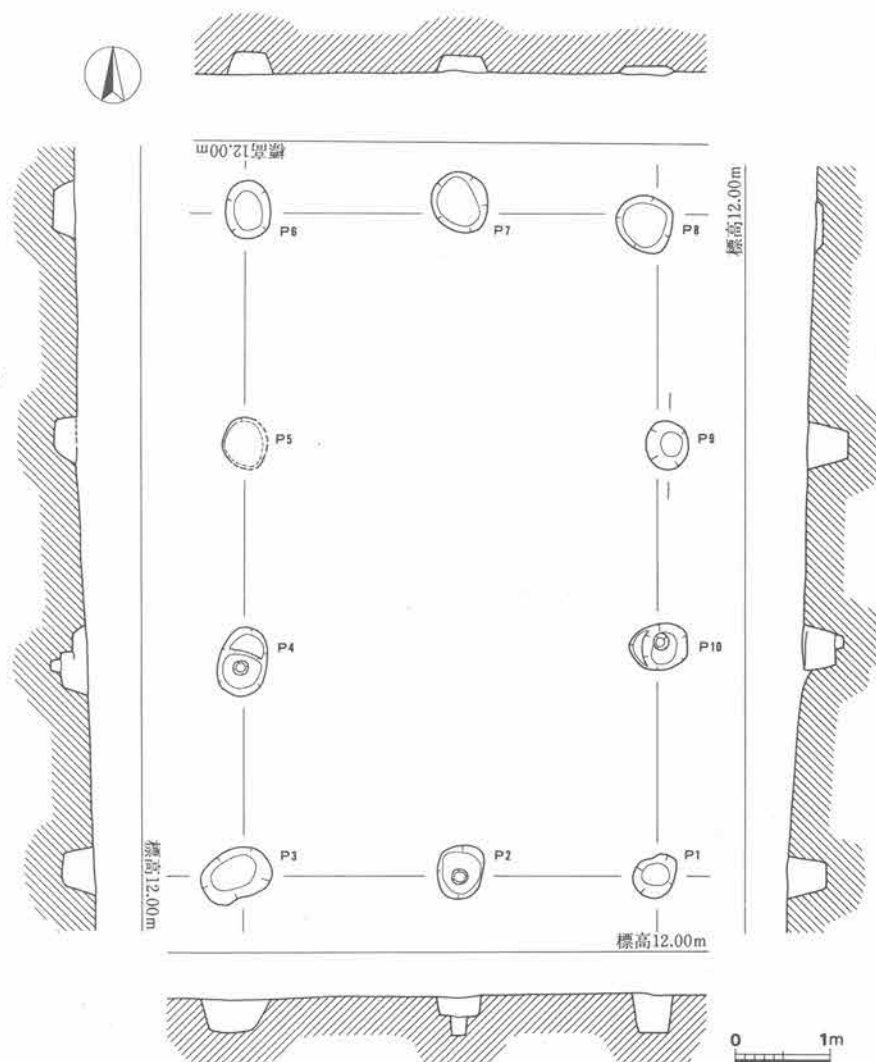
P5からは赤色顔料を塗布した土師器の小坏が1点、P9から手持ちヘラケズリの底部を有する土師器の坏と須恵器の蓋が出土した。

SB96 (第50・51図)

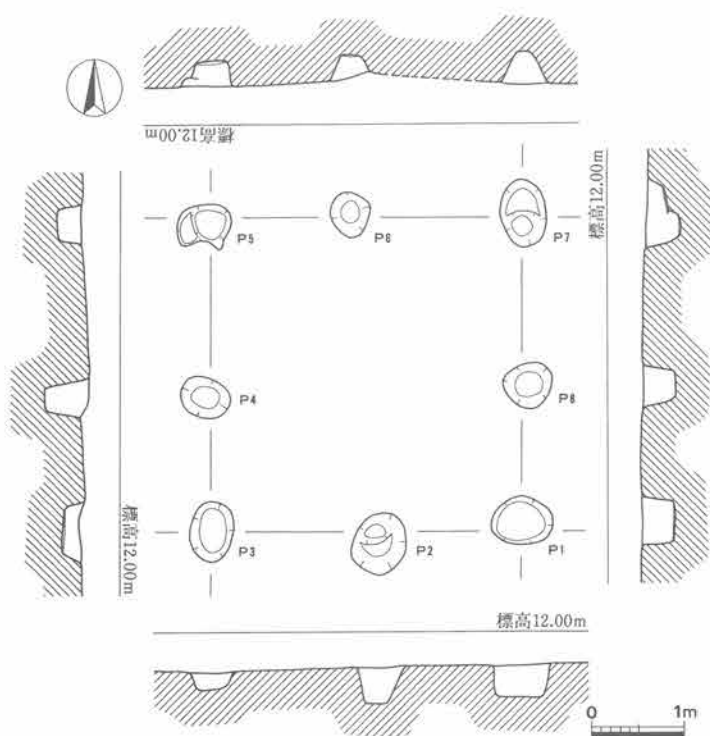
調査区の中央南寄りで、S I 227をP6・7が切った状態で検出された。2間×2間で一辺が3.3mの正方形を呈する。中央に柱掘形は見られず、総柱建物とは言えない。東西の側柱を見ると、P4-P5、P7-P8が185cm・175cmであるのに対して、P3-P4、P8-P1は145cm・155cmと若干狭くしている。また、南北側柱は、P2-P3、P6-P7の筋交いに柱間を広くしている。柱掘形は



第48図 SB13 (南から)



第49図 SB13実測図 (1/80)



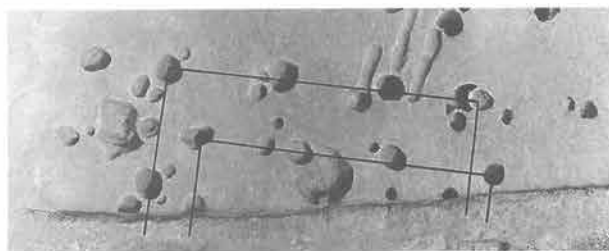
第50図 SB96実測図 (1/80)



第51図 SB96 (南から)

は桁行に180・195cmの間隔を示し、梁行は125cmであった。暗文を有する坏が出土したSK115を切る。

P2・P5からは回転ヘラケズリ調整を行った土師器の坏・皿が出土している。またP3からは土師器の坏・甕が出土した。時期はSK115の廃絶後を上限とできよう。



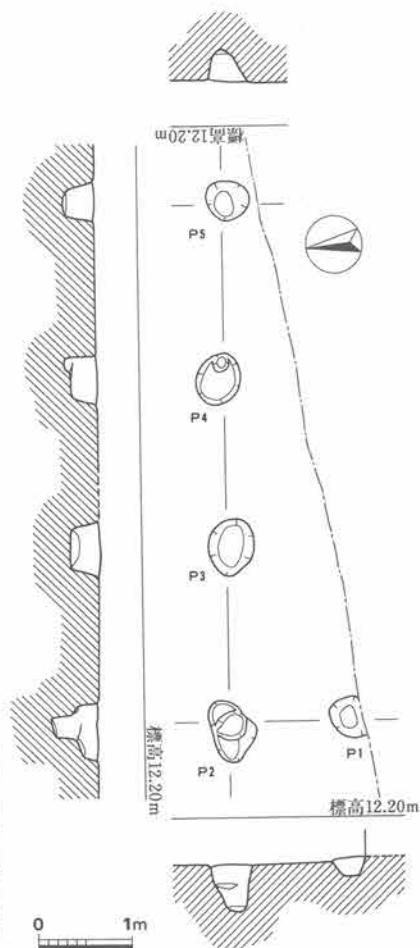
第52図 SB103・111 (南上空から)

楕円形を呈し、長軸の規模は43～71cmを示す。また、残存する深さは18～37cmを測るが、P3・P5を除くと34～37cmで収まる。

遺物はP2の掘形から土師器の坏・皿が出土した。いずれも底部を回転ヘラケズリ調整を施している。

SB103 (第52・53図)

調査区のほぼ中央南端で検出した。東・南側柱は調査区外にあり、その全容を確認し得なかった。東西棟の建物と考えられる。残存する桁行長は5mである。計画方位は座標東から7度30分程南に傾く。柱掘形は円・楕円形を呈し、規模は45～67cmの径を有し、残存する深さは20～42cmとばらつきが認められる。柱間



第53図 SB103実測図 (1/80)

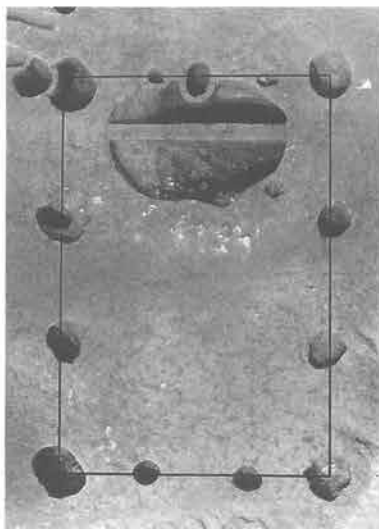
SB111 (第52・54図)

S B103を切る掘立柱建物である。これも全容は把握できなかったが、北側の柱筋が3間であると判断でき、東西棟の建物が推定できる。計画方位は座標東から6度50分程南に振る。桁行長は3.2mを測り、柱間は均一さを欠き、180・195・225cmであった。梁間は225cmを測る。柱穴の掘形は略方形の円形で、50～65cmで、深さ16～52cmである。

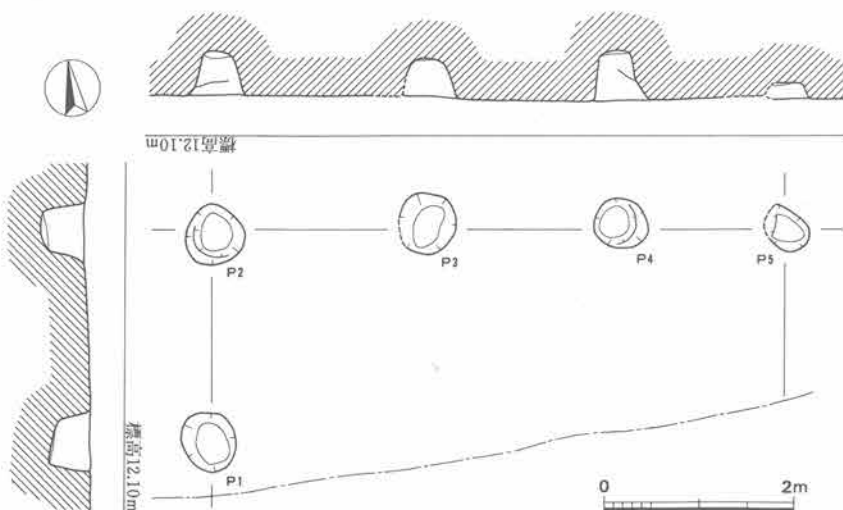
遺物はP1・P2・P4・P5から出土している。土師器には手持ちヘラケズリ・回転ヘラケズリ調整を持つものと持たないものが見られる。

SB105 (第55・56図)

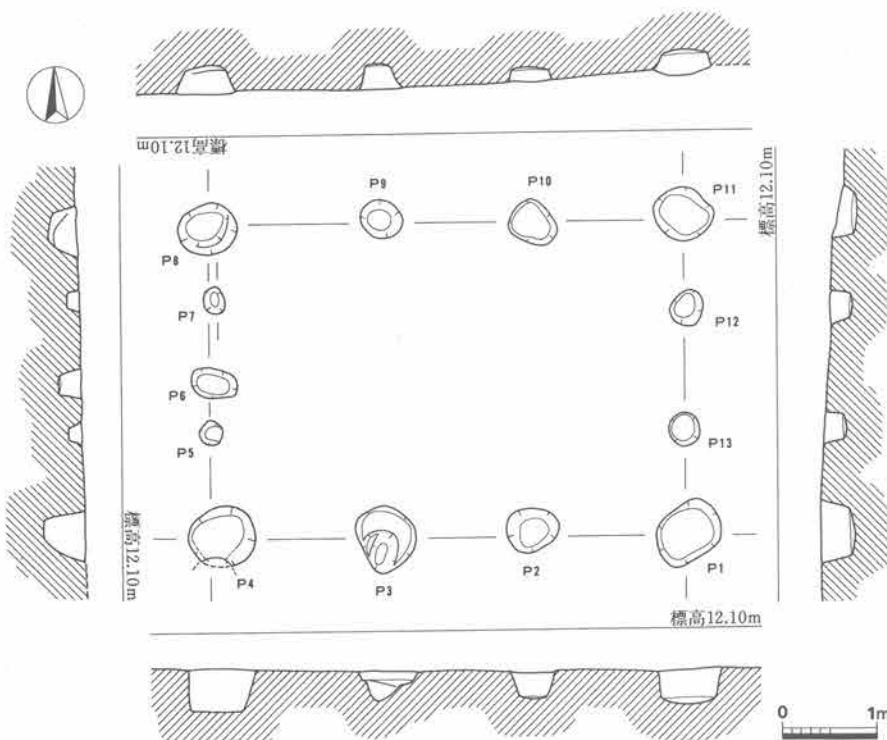
調査区の東側南寄りで検出した3間×3間の東西棟建物である。桁行5m、梁行3.3mを測る。桁行の柱間は160・180cmで、梁間は90・110・130cmにしている。



第56図 SB105 (東上空から)



第54図 SB111実測図 (1/80)



第55図 SB105実測図 (1/80)

計画方位は座標東から3度南に振れる。柱穴は方形気味の円形を呈し、四方の柱掘形は62～73cmと大きくしている。P5～P7はS K135を切る。

P4・6・8から土師器小皿・坏・甕、P9では高台を付す須恵器环が出土した。

SB142 (第57・58図)

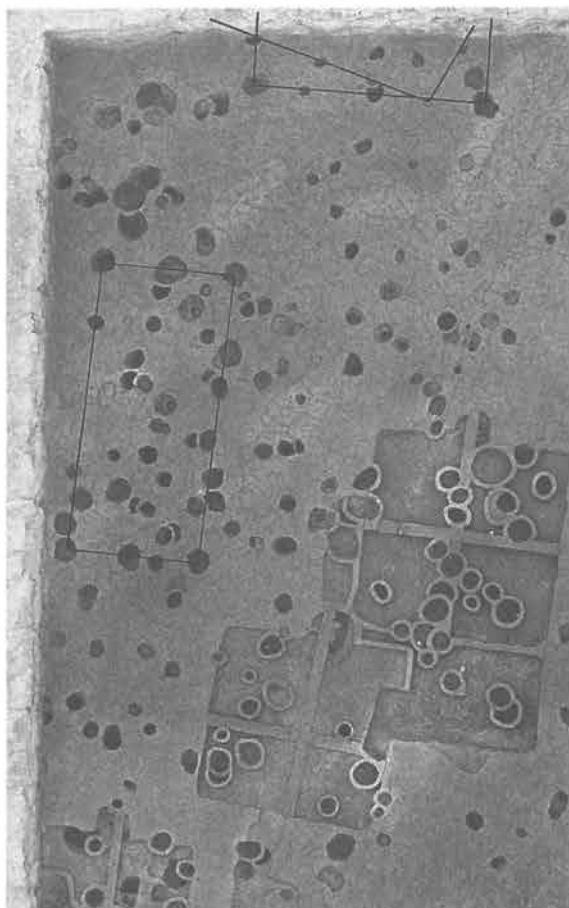
調査区の西側北端で検出した。検出した2間分の柱筋は南側柱列で南北棟建物と考えられる。計画方位はほぼ座標北を示す。柱掘形は楕円形を呈し、長軸は45～55cm、残存深さは30～32cmである。柱間は205・225cmである。P2はS B143のP3に切られる。

柱掘形からの遺物はほとんど出土していない。

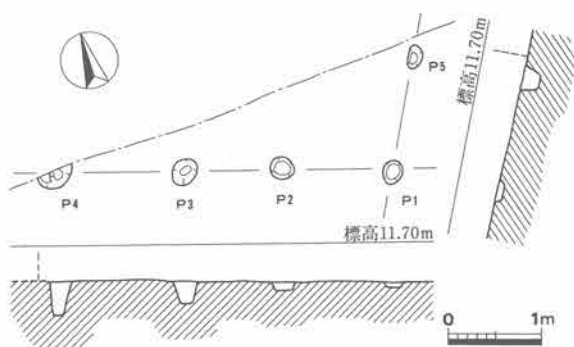
SB143 (第58・60図)

S B142と同地点で検出した。南側柱列と東側柱列は鈍角を示す。柱間は105～135cmで、円形の掘形を呈する。大きさは15～37cmで深さ5～34cmを測る。

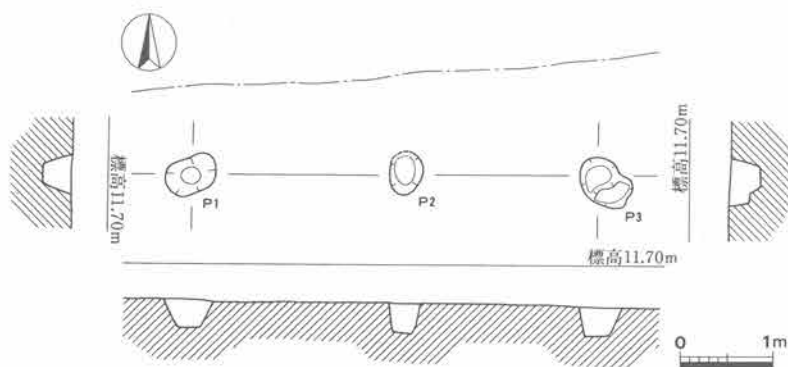
P5から煤が付着した土師器の



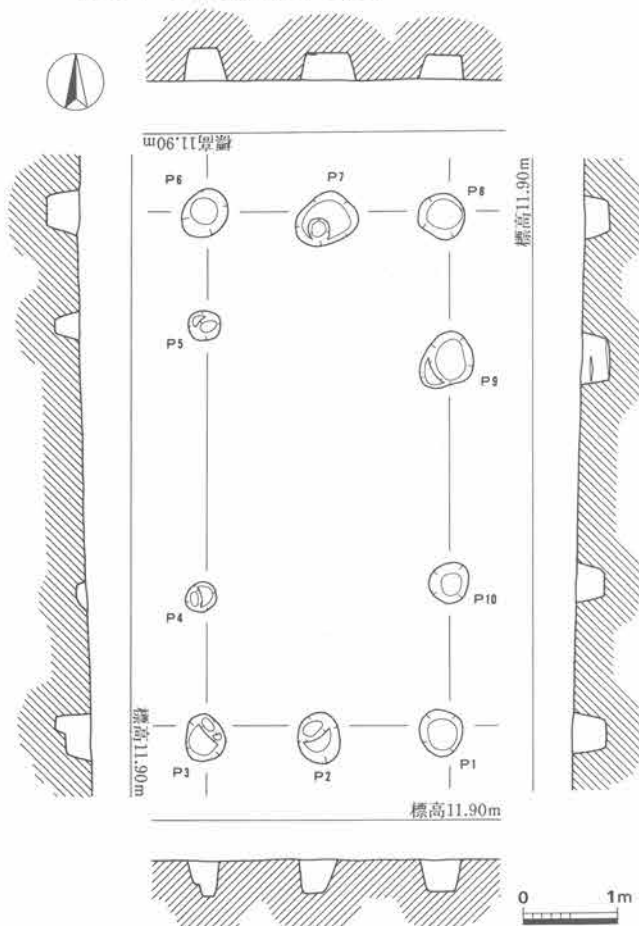
第58図 S B142・143・155 (南上空から)



第60図 S B143実測図 (1/80)



第57図 S B142実測図 (1/80)

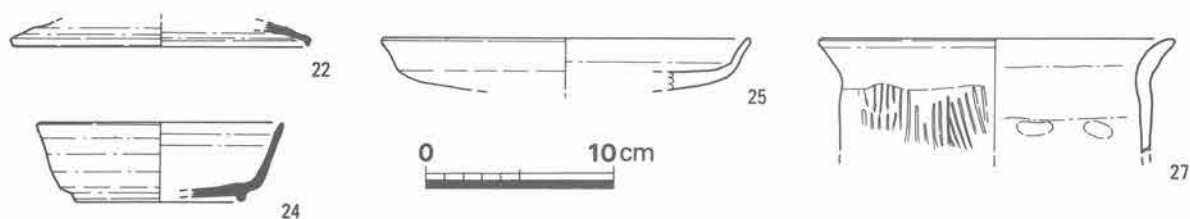


第59図 S B155実測図 (1/80)

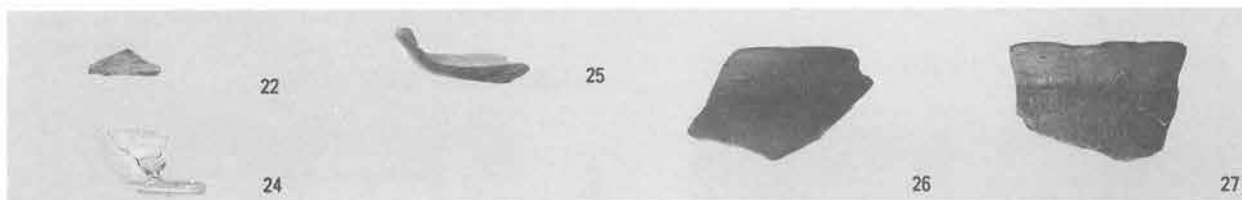
瓦片が出土している。

SB155 (第58・59図)

調査区の西端中央で検出した3間×2間の南北棟建物である。桁行5.5m、梁間2.5mの規模を有する。南北の柱筋は210・225cmの柱間を示し、西側柱筋は中央柱間を280cmと広くし、両側を120・155cmと狭めている。計画方位は座標北から1度東を向く。柱掘形は30～50cm、深さは約30cmである。



第61図 掘立柱建物柱穴出土遺物実測図 (1/4)



第62図 掘立柱建物柱穴出土遺物

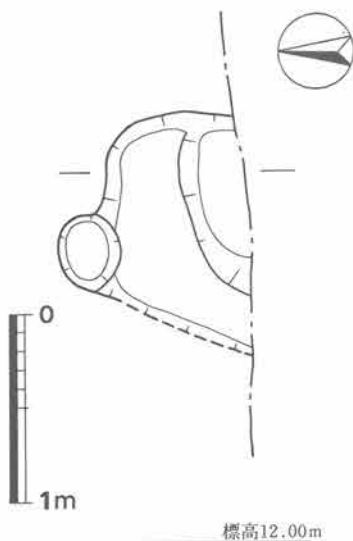
溝

本調査で4条の溝を検出したが、内3条は区画整理以前の畦畔の方位と合致するため、近世～近代の溝と判明した。

SD1125 (第63～66図)

調査区の西側南端で検出した。第11次調査で南北走向する溝の延長で、ここで終息することを認めた。第11次調査の報文によると、規模は幅120～140cm、深さ30～40cmと報告されている。

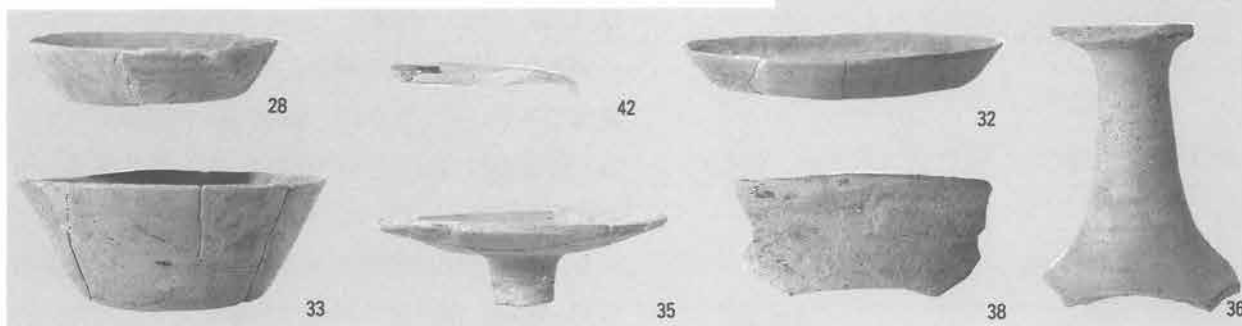
遺物は多数出土し、相対的には8世紀後半の時期が与えられる。



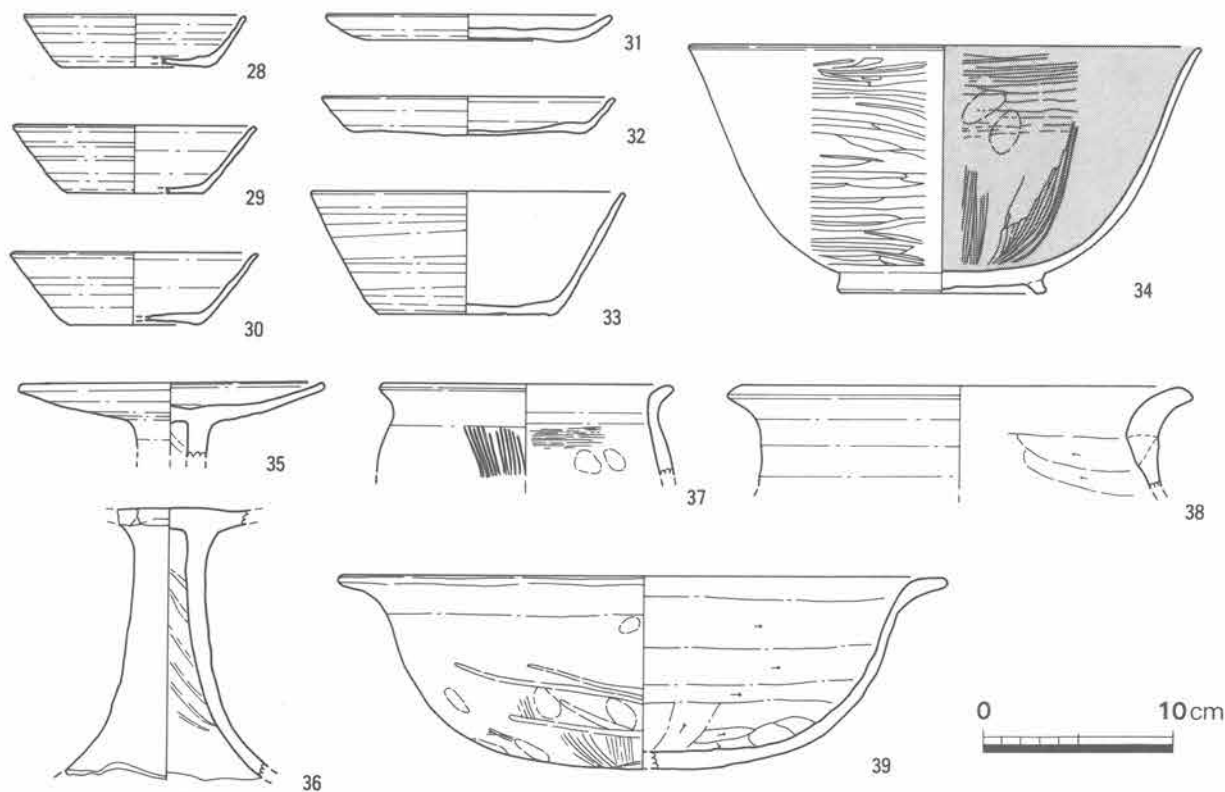
第63図 SD1125実測図 (1/40)



第64図 SD1125 (北から)



第65図 SD1125出土遺物



第66図 SD1125出土遺物実測図(1/4)

土 坑

今回5基の土坑を検出した。他の遺構と重複し、かつ、時期判断の参考になる資料も出土している。

SK26

調査区の東側北寄りで検出した土坑で、埋土の大半は焼土であった。長軸120cm、短軸73cmの隅丸長方形である。SB13のP7に切られる。

遺物は手持ちへラケズリの土師器皿が出土した。

SK115

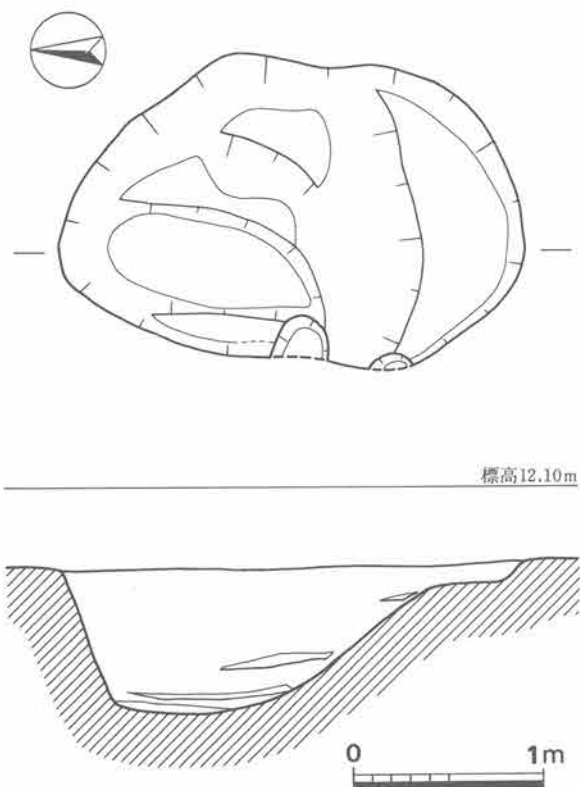
SB103のP3に切られた土坑で、長軸118cm、短軸110cm、深さは38cmを測る。略円形をなす。

手持ちへラケズリの調整を持つ坏は、内面に暗文が施され、7世紀後半の所産と言えよう。

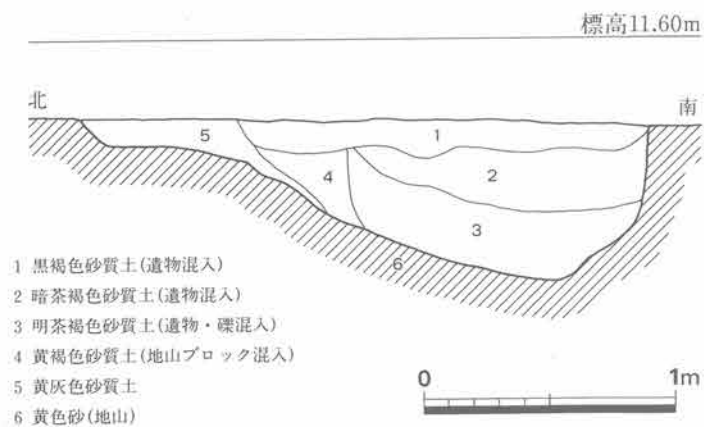
SK135 (第67~69図)

SB105に切られる。楕円形を呈し、長軸243cm、短軸157cm、深さ66cmである。①~③層に遺物が包含される。⑤層は掘削時に意図的に埋め戻された層であろう。底面は擋鉢状を呈する。

土師器の甕片が多く出土している。



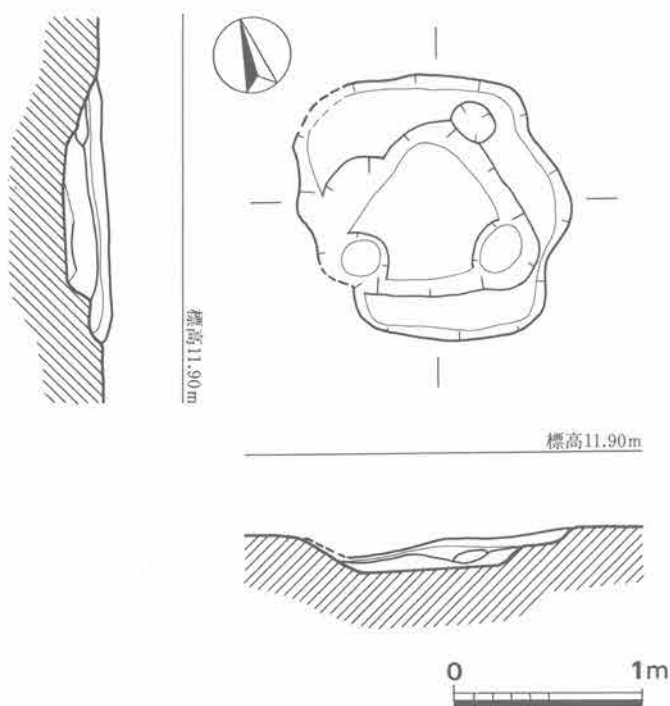
第67図 SK135実測図(1/40)



第68図 SK135土層実測図 (1/30)



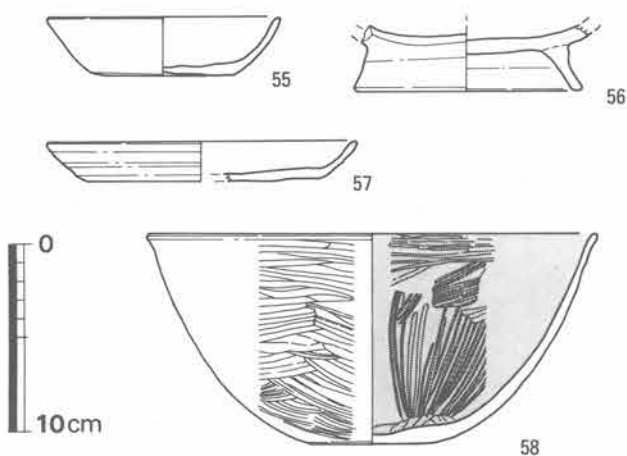
第69図 SK135 (西から)



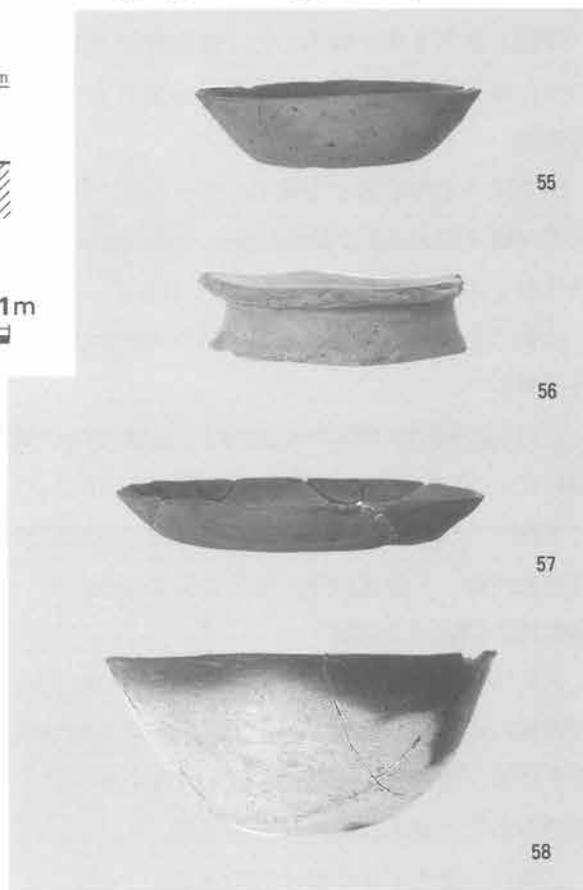
第70図 SK190実測図 (1/40)



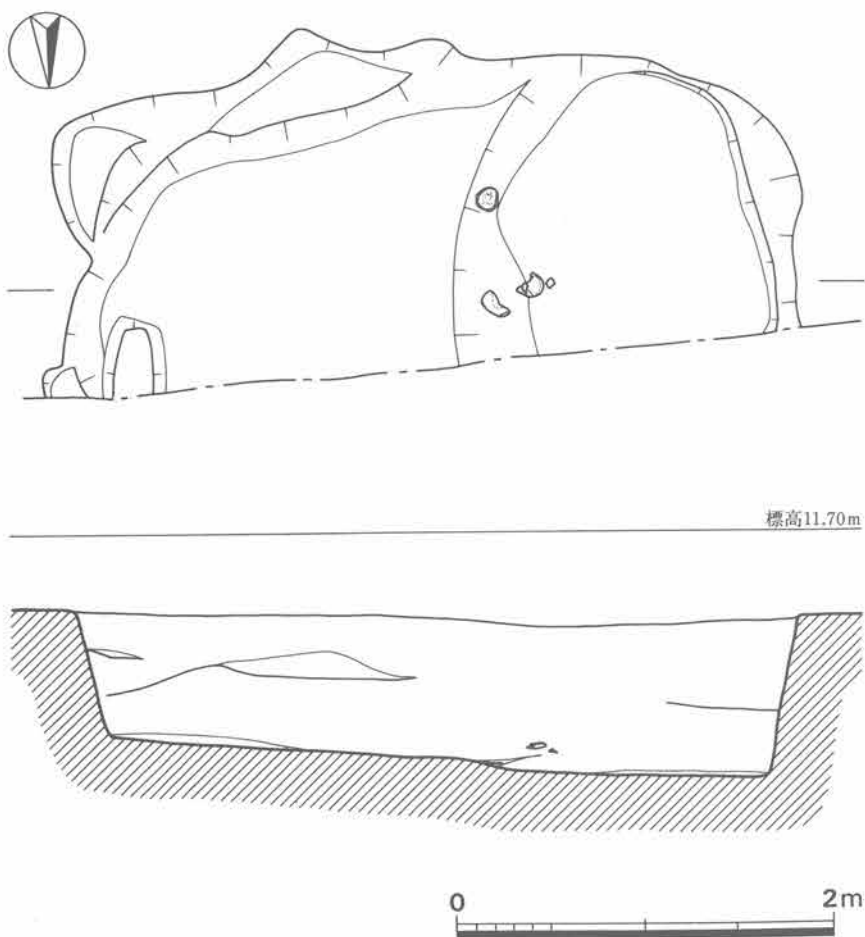
第71図 SK190遺物出土状態 (南から)



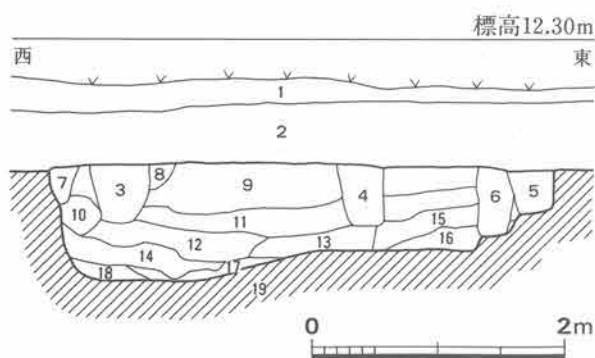
第72図 SK190出土遺物実測図 (1/4)



第73図 SK190出土遺物



第74図 SK230実測図 (1/40)



- | | |
|--------------------|-----------------------|
| 1 耕作土 | 11 明茶褐色砂質土 (木炭・遺物混入) |
| 2 床土・旧耕作土 | 12 淡茶褐色砂質土 (5cm大礫混入) |
| 3 黒褐色砂質土 (ビット埋土) | 13 暗黄茶色砂質土 (遺物多量混入) |
| 4 明黒褐色砂質土 (ビット埋土) | 14 明黄茶色砂質土 (地山ブロック混入) |
| 5 黒茶色砂質土 (ビット埋土) | 15 灰茶色砂質土 (地山ブロック混入) |
| 6 暗黒茶色砂質土 (ビット埋土) | 16 暗灰茶色砂質土 (地山ブロック混入) |
| 7 黄茶色砂質土 (ビット埋土) | 17 黄灰色砂質土 (地山ブロック混入) |
| 8 暗黒褐色砂質土 (ビット埋土) | 18 暗黄灰色砂 |
| 9 茶褐色砂質土 (土師器混入) | 19 黄色粘質土 (地山) |
| 10 濃茶褐色砂質土 (土師器混入) | |

第75図 SK230土層実測図 (1/60)



第76図 SK230 (南から)



第77図 SK230遺物出土状態 (北から)

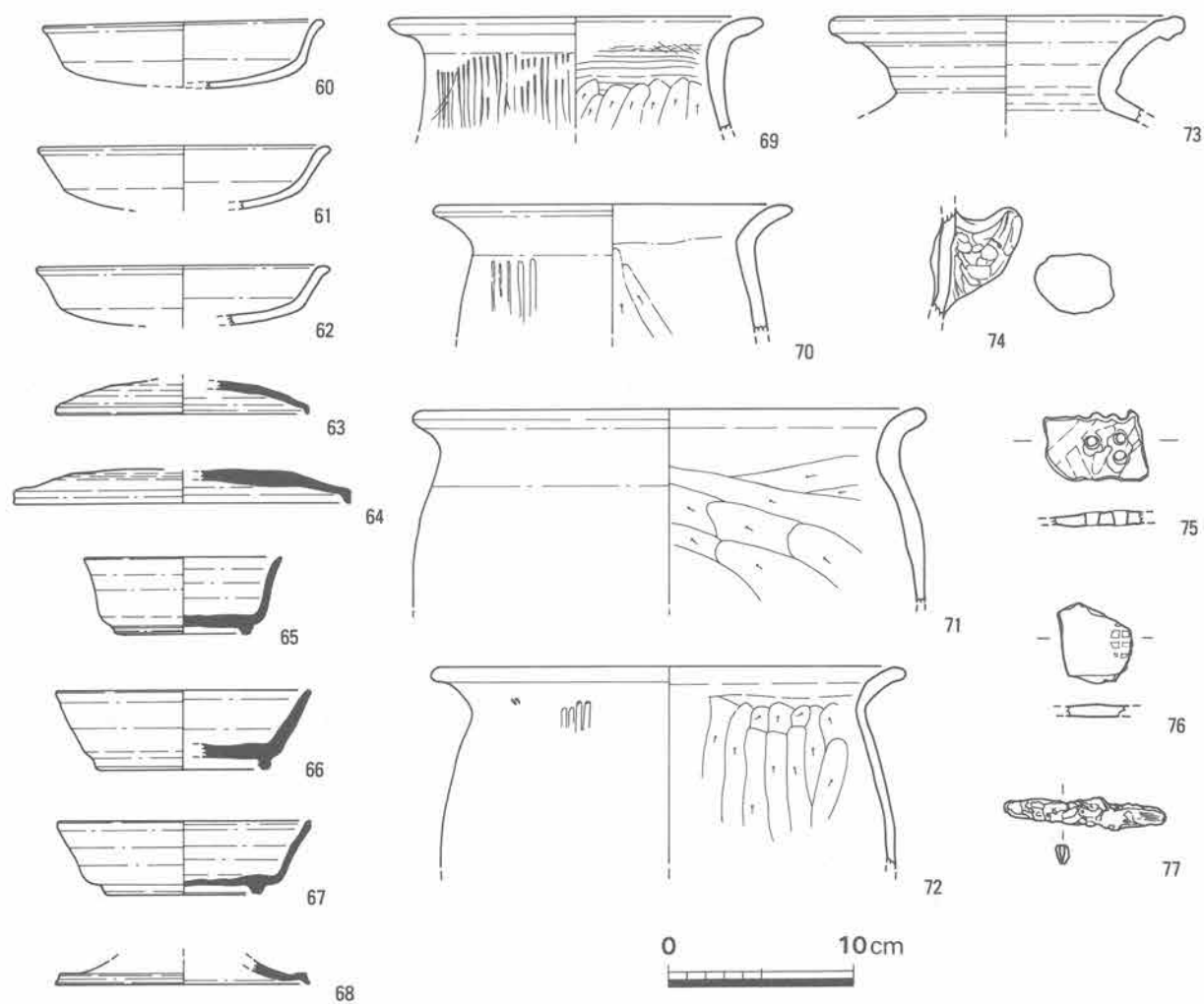
SK190 (第70~73図)

SI223の東側で検出した。略方形を呈し、一辺は約140cm、深さは25cmを測る。

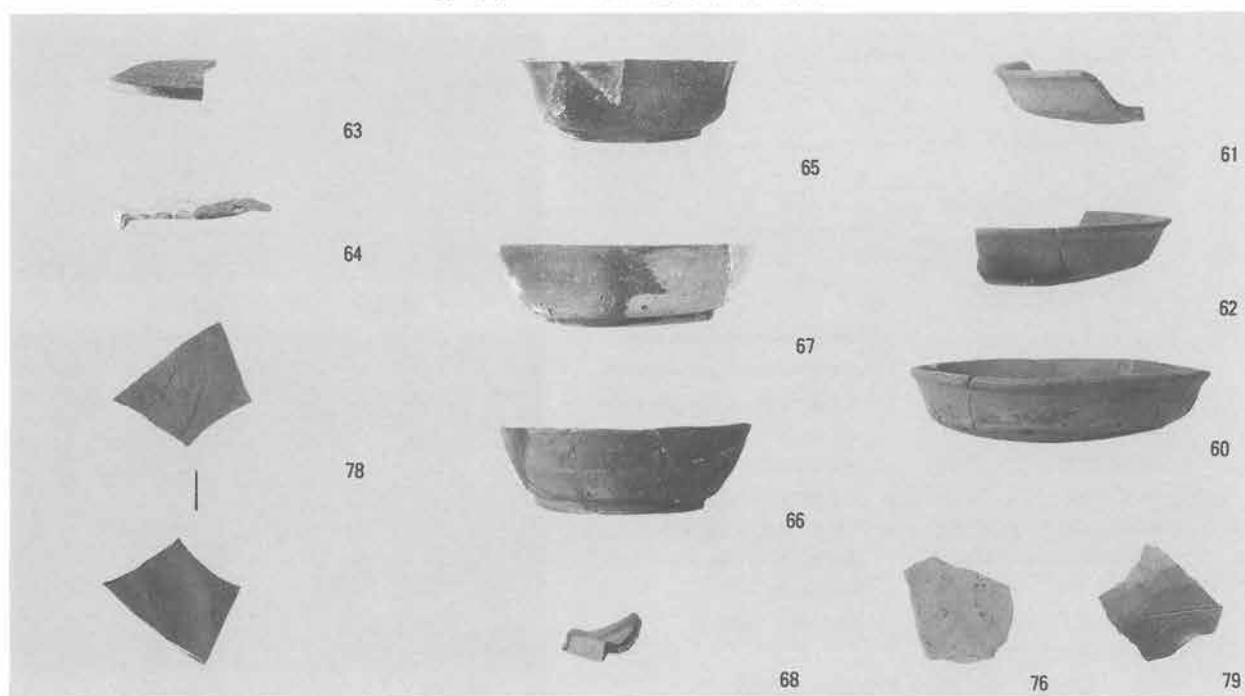
底面から回転ヘラケズリ・面取り調整した土師器の皿や坏、黒色土器Aの鉢が一括に出土した。SD1125と同時期であるSK230 (第74~77図)

調査区の北端で検出した土坑でプランは不明。最深部は88cmを測る。一部の壁面はオーバーハング気味である。

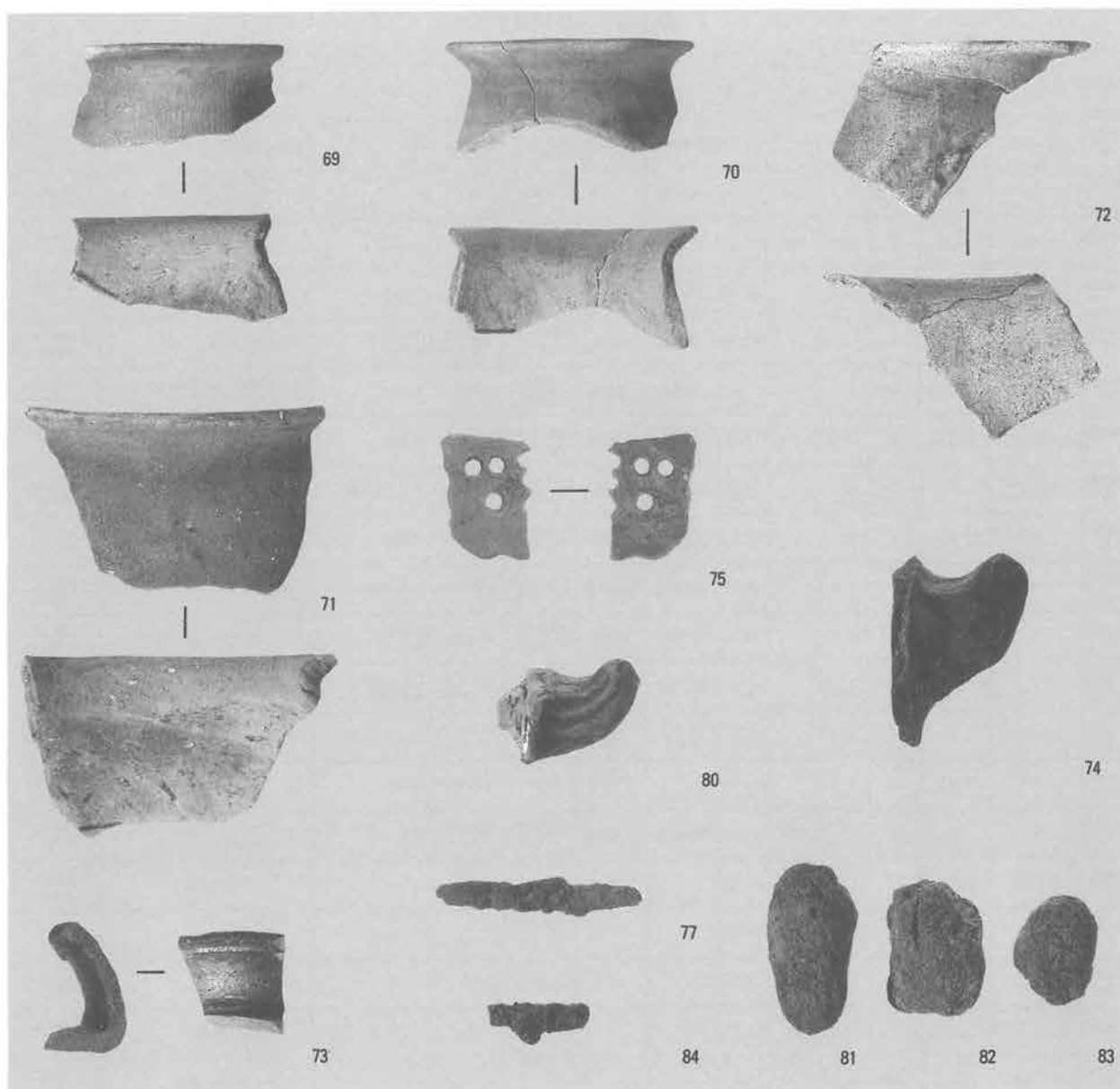
遺物は他の土坑と異なり、須恵器の量が多い。転用硯や刀子が出土している。8世紀後半代の遺物が主である。



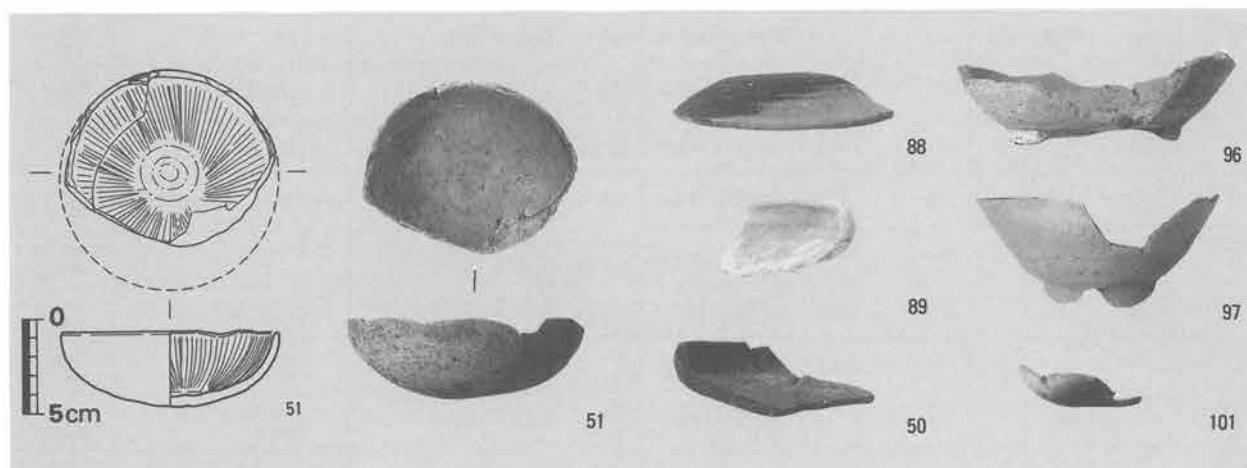
第78図 S K230出土遺物実測図 (1/4)



第79図 S K230出土遺物①



第80図 S K230出土遺物②



第81図 その他の遺構出土遺物

第3表 遺物観察表①

遺物No.	出土遺構	材質	器種	法 量			色 調		調整		胎 土	焼成	備 考	登録番号
				口 径 (長)	底 径 (幅)	器 高 (厚)	外面	内面	外面	内面				
第46・47図 1	S I 221	須恵器	蓋	14.8		1.7	淡青灰色	淡青灰色	回転ケズリ 回転ナデ	回転ナデ	精良	良好	転用碗	199613 00081
第46・47図 2	"	滑石	紡錘車	3.2	2.8	3.4	緑青色		ケズリ				広端部に線刻文様 孔径0.6cm	199613 00082
第46・47図 3	S I 222	土師器	環	15.2	12.7	3.4	赤橙色	乳褐色	回転ナデ	回転ナデ	長石粒	良好	回転ヘラケズリ底 面取り	199613 00084
第46・47図 4	"	"	甕	15.3		(11.5)	黄灰色 黒灰色	黄橙色 茶褐色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	石英粒 赤色粒子	"	器面の磨減が著しい	199613 00083
第46・47図 5	S I 224	"	"			(12.6)	黄褐色	赤褐色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ヘラケズリ	2mm大長石 石英粒	"	把手欠損	199613 00086
第47図 6	"	縄文土器	鉢				黄茶色	黒茶色	刺突文 凹線文	ナデ	滑石	"	外面に炭化物付着 阿高式	199613 00085
第46・47図 7	S I 225	須恵器	蓋	12.5		(1.9)	灰黒色 暗青灰色	暗青灰色	回転ケズリ 回転ナデ	回転ナデ	長石粒	"		199613 00087
第46・47図 8	S I 227	"	"	11.2		(2.2)	暗青灰色	暗青灰色	回転ケズリ 回転ナデ	回転ナデ	長石・石英粒	"		199613 00093
第46・47図 9	"	"	"	15.1		2.4	黒灰色 暗青灰色	紫青色	回転ケズリ 回転ナデ	回転ナデ	長石粒	"	転用碗か	199613 00092
第47図 10	"	"	"	14.0		(1.8)	暗青灰色	暗茶灰色	回転ケズリ 回転ナデ	回転ナデ	3mm大長石片	"	窯変	199613 00096
第46・47図 11	"	土師器	環	16.3		(2.8)	黄褐色	黄橙色	回転ナデ ミガキ	回転ナデ	赤色粒子 精良	"	外面に赤色顔料塗布	199613 00091
第46・47図 12	"	"	甕	26.5		(5.0)	淡黄褐色	灰茶色	回転ナデ 縦刷毛目	回転ナデ ヘラケズリ	石英・長石・ 角閃石粒	"		199613 00097
第46・47図 13	"	"	"	24.9		(7.1)	茶褐色 黒茶色	黒茶色 茶褐色	回転ナデ 斜刷毛目	回転ナデ ヘラケズリ	角閃石・砂粒	"		199613 00094
第46・47図 14	"	須恵器	"	21.8		(5.3)	青灰色 暗青灰色	青灰色 暗青灰色	回転ナデ	回転ナデ	長石粒	"		199613 00095
第46・47図 15	"	"	壺		11.1	(7.9)	明青灰色	暗青灰色	回転ナデ カキ目	回転ナデ ヘラ	精良	"	ヘラケズリ底 長頸壺か	199613 00090
第47図 16	S I 226	鉄製品	釘	(7.18)	(0.62)	(0.45)							L字に折れ曲る	199613 00088
第47図 17	"	"	柄頭?	(3.32)	(2.78)	(0.51)								199613 00089
第47図 18	"	安山岩	磨石	16.3	10.7	8.4							被熱	199613 00051
第47図 19	"	"	"	16.5	7.4	6.1							表面が磨減	199613 00052
第46・47図 20	S I 229	頁岩	石剣	(5.0)	3.3	0.6							丁寧な磨き痕	199613 00098
第 図 21	S B13 P5掘形	土師器	環			(2.9)	赤褐色	茶褐色	回転ナデ	回転ナデ	石英粒 精良	"	外面に赤色顔料塗布 面取り	199613 00016
第61・62図 22	" P9掘形	須恵器	蓋	15.9		(1.3)	淡青灰色	淡青灰色	回転ナデ	回転ナデ	精良	"		199613 00013
第 図 23	S B103 P2掘形	"	"	15.2		2.4	青灰色	青灰色	回転ケズリ 回転ナデ	ナデ 回転ナデ	長石粒	"	転用碗	199613 00024
第61・62図 24	S B105 P7掘形	"	環	13.0		4.2	緑灰色	緑灰色	回転ナデ 回転ケズリ	回転ナデ	長石・石英粒	やや 良好	高台付	199613 00020
第61・62図 25	S B111 P5掘形	土師器	皿	19.5		(2.7)	黄橙色	黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	精良	良好	手持ヘラケズリ底	199613 00021
第62図 26	"	"	甕	26.0		(5.4)	茶褐色 黒茶色	黄褐色	回転ナデ 縦刷毛目	回転ナデ 指頭押え	角閃石・石英 長石粒	"		199613 00022
第61・62図 27	S B155 P7掘形	"	"	18.8		(6.0)	淡灰褐色	黄灰色	回転ナデ 縦刷毛目	回転ナデ ヘラケズリ	2mm大石英・長石片 雲母・角閃石粒	"	刷毛目単位 7本	199613 00030
第65・66図 28	S D1125	"	環	11.7	8.7	2.8	茶灰色	茶灰色	回転ナデ 回転ケズリ	回転ナデ	赤色粒子 精良	"	回転ヘラケズリ底 面取り	199613 00045
第66図 29	"	"	"	12.9	7.7	3.6	黄橙色	黄橙色	回転ナデ 回転ケズリ	回転ナデ	精良		回転ヘラケズリ底 面取り	199613 00044
第66図 30	"	"	"	13.1	6.9	3.9	黄灰色	黄灰色	回転ナデ	回転ナデ	赤色粒子	"	ヘラ切り底	199613 00043

第4表 遺物観察表②

遺物No	出土遺構	材質	器種	法 量			色 調		調 整		胎 土	焼成	備 考	登録番号
				口 径 (長)	底 径 (幅)	器 高 (厚)	外面	内面	外面	内面				
第66図 31	S D1125	土師器	皿	15.0	10.8	1.4	茶褐色	茶黒色	回転ナデ	回転ナデ ナデ	赤色粒子	やや 良好		199613 00040
第65-66図 32	"	"	"	15.4	12.2	2.1	赤褐色 黄灰色	灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	細砂粒 赤色粒子	"		199613 00042
第65-66図 33	"	"	柄	16.5	9.7	6.5	黄褐色 灰黄色	黄褐色 灰黄色	回転ナデ 回転ナズリ	回転ナデ	赤色粒子	良好	回転ヘラケズリ底 削り出し高台	199613 00047
第65-66図 34	"	黒色A	鉢	26.9	11.0	13.1	黄灰色	黒色	横ミガキ 縦ミガキ	横ミガキ 縦ミガキ	1~3mm大長石・石英 角閃石・赤色粒子	"	高台付	199613 00050
第65-66図 35	"	土師器	高杯	16.2		(4.0)	黄褐色 灰黄色	黄褐色	回転ナデ 回転ナズリ	回転ナデ	赤色粒子 精良	"	杯内底に氷裂	199613 00046
第65-66図 36	"	"	"			(14.4)	黄褐色	黄灰色	回転ナデ	回転ナズリ 回転ナデ	赤色粒子 精良	"	脚部	199613 00048
第66図 37	"	"	甕	15.4		(4.8)	赤褐色	黒茶色 茶褐色	回転ナデ 縦刷毛目	回転ナデ 指圧痕	多量の角閃石・長石 赤色粒子	"	二次焼成か	199613 00054
第65-66図 38	"	"	"	24.5		(5.5)	黄灰色 黄色	黄褐色	回転ナデ	回転ナデ ナデ	長石・石英粒 赤色粒子	"		199613 00053
第65-66図 39	"	"	鍋	32.1	25.0	10.3	灰茶色 黒茶色	黄灰色 赤褐色	回転ナデ ヘラケズリ 刷毛目	回転ナデ ナデ	角閃石・長石・石英粒 赤色粒子	"		199613 00049
第 図 40	"	"	皿	16.4	11.8	1.7	黄褐色	黄灰色	回転ナデ	回転ナデ	石英粒 赤色粒子	"	内面に刀痕	199613 00041
第 図 41	"	"	甕			(3.9)	茶褐色 黄褐色	明茶褐色	回転ナデ ナデ	回転ナデ	雲母・石英粒 赤色粒子	"	外面にスス付着	199613 00055
第65図 42	"	須恵器	蓋			1.2	暗青灰色	緑灰色	回転ナズリ 回転ナデ	回転ナデ	精良	"	転用硯	199613 00026
第 図 43	S D1	土師器	甕			(4.8)	黄灰色	黄灰色	回転ナデ 縦刷毛目	回転ナデ ヘラケズリ	雲母・石英・角閃石 長石粒	"		199613 00001
第 図 44	"	"	"	12.1		(4.8)	茶褐色 黒茶色	淡灰茶色	回転ナデ 縦刷毛目	回転ナデ	石英・角閃石・ 雲母粒	"		199613 00002
第 図 45	"	"	"	23.0		(6.6)	黄灰色 黒茶色	黄灰色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ヘラケズリ	石英・角閃石・長石粒 赤色粒子	"		199613 00003
第 図 46	"	"	蓋	19.6		(1.6)	黄褐色	明黄褐色	回転ナズリ 回転ナデ	回転ナデ	金雲母粒 赤色粒子	"		199613 00004
第 図 47	"	黒曜石	石鏃	2.53	1.75	0.37								199613 00005
第 図 48	S D220	土師器	甕	17.2		(8.9)	赤褐色 灰茶色	黄灰色	回転ナデ 縦刷毛目	回転ナデ ナデ	石英・角閃石粒	良好		199613 00039
第 図 49	S D246	須恵器	杯	13.0	7.9	3.8	緑灰色	明青灰色	回転ナデ	回転ナデ	長石粒	"	ヘラ切り底 高台付	199613 00056
第81図 50	S K26	土師器	皿	23.2	21.4	(2.0)	茶褐色	黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	長石・角閃石・ 雲母粒	"	手持ヘラケズリ底	199613 00015
第 図 51	S K115	"	柄	11.6		4.0	黄灰色	赤褐色	手持 ヘラケズリ	縦ミガキ	長石粒 赤色粒子	"	繊細な暗文	199613 00023
第 図 52	S K135	"	こしき				黄茶色	茶褐色	ナデ ヘラケズリ 刷毛目	ヘラケズリ	長石・細砂粒	"	径4mmの穿孔 8個	199613 00025
第 図 53	"	須恵器	蓋	16.0		1.9	暗青灰色 灰黒色	暗青灰色	回転ナズリ 回転ナデ	回転ナデ	長石・石英粒	"		199613 00027
第 図 54	"	"	杯			4.1	淡青灰色	淡青灰色	回転ナデ 回転ナズリ	回転ナデ	細砂粒	"	高台付	199613 00028
第72-73図 55	S K190	土師器	"	12.3	7.6	3.2	黄灰色 黄褐色	黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	赤色粒子 精良	"	ヘラ切り底	199613 00034
第72-73図 56	"	"	鉢		12.1	(3.6)	茶褐色	茶褐色	回転ナデ	ミガキ	赤色粒子 精良	"	高台付	199613 00036
第72-73図 57	"	"	皿	16.3	12.2	2.1	黄灰色 黄褐色	黄灰色 黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	赤色粒子 精良	"	回転ヘラケズリ底 面取り	199613 00037
第72-73図 58	"	黒色A	鉢	23.7	9.5	11.1	黒色 黄灰色	黒色	横ミガキ 縦ミガキ	横ミガキ 縦ミガキ	長石・石英・角閃石 赤色粒子	"	外底部ミガキ	199613 00035
第 図 59	"	土師器	皿	15.0	10.6	1.6	赤褐色	乳褐色	回転ナデ	回転ナデ	赤色粒子 精良	"	ヘラ切り底	199613 00038
第78-79図 60	S K230	"	杯	15.1	13.1	(3.5)	黄褐色 黄灰色	赤褐色	回転ナデ	回転ナデ ナデ	長石・角閃石粒	"	手持ヘラケズリ底 ヘラ記号	199613 00057

第5表 遺物観察表③

遺物No	出土遺構	材 質	器種	法 量			色 調		調整		胎 土	焼成	備 考	登録番号
				口 径 (長)	底 径 (幅)	器 高 (厚)	外面	内面	外面	内面				
第78-79図 61	S K230	土師器	坏	15.8	13.0	(3.4)	赤橙色 黄橙色	赤橙色	回転ナデ	回転ナデ	石英・角閃石粒	良好	手持ヘラケズリ底	199613 00059
第78-79図 62	"	"	"	16.0	13.0	(3.2)	赤橙色 黄灰色	黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	石英・角閃石粒	"	"	199613 00058
第78-79図 63	"	須恵器	蓋	13.7		(1.9)	黒灰色	灰黒色	回転ケズリ 回転ナデ	回転ナデ	精良	"	転用硯	199613 00069
第78-79図 64	"	"	"	18.2		(1.8)	乳灰色	乳灰色	回転ケズリ 回転ナデ	不定方向ナデ 回転ナデ	若干の長石粒	"	"	199613 00071
第78-79図 65	"	"	坏	10.6	7.2	4.2	黒灰色	青灰色	回転ナデ	回転ナデ	黒色粒子 精良	"	高台付 ヘラ切り底	199613 00066
第78-79図 66	"	"	"	13.8	9.5	4.3	灰茶色 黒茶色	青灰色	回転ナデ 回転ケズリ	回転ナデ	5mm大石英片 長石粒	"	高台付 回転ヘラケズリ底	199613 00068
第78-79図 67	"	"	"	13.5	8.4	4.0	灰色 青灰色	灰色	回転ナデ 回転ケズリ	回転ナデ	精良	"	高台付 ヘラ切り後ナデ底	199613 00067
第78-79図 68	"	"	高坏		13.8	(1.2)	黄灰色 灰色	青灰色	回転ナデ	回転ナデ	長石粒	"	脚一椀部片	199613 00073
第78-80図 69	"	土師器	甕	20.1		(6.2)	茶灰色	灰褐色	回転ナデ 縦刷毛目	回転ナデ 横刷毛目 ヘラケズリ	石英・角閃石粒	"	スス付着	199613 00064
第78-80図 70	"	"	"	19.2		(6.9)	茶褐色	茶褐色	回転ナデ 縦刷毛目 ナデ消し	回転ナデ ヘラケズリ ナデ	多量の角閃石	"		199613 00063
第78-80図 71	"	"	"	27.4		(10.4)	赤褐色	黄灰色 赤褐色	回転ナデ 縦刷毛目 ナデ消し	回転ナデ ヘラケズリ	1~5mm大長石 石英粒	"		199613 00062
第78-80図 72	"	"	"	25.5		(10.9)	黄灰色	茶灰色	回転ナデ 縦刷毛目 ナデ消し	回転ナデ ヘラケズリ	長石・角閃石	"		199613 00061
第78-80図 73	"	須恵器	"	19.0		(5.7)	黒色 黒灰色	黒灰色	回転ナデ	回転ナデ	長石	"		199613 00074
第78-80図 74	"	土師器	把手	5.0	4.3	3.1	黄灰色	赤褐色	指頭圧痕	ヘラケズリ	石英・角閃石粒	"	赤色顔料塗布	199613 00076
第78-80図 75	"	"	こしき				黄橙色	黄茶色	ナデ	不定方向 ヘラケズリ	2mm大長石片	"	底部片・径6.5mmの穿孔	199613 00065
第78-80図 76	"	"	坏				黄褐色	黄褐色	ナデ		赤色粒子 精良	"	回転ヘラケズリ底 内底部に刻印	199613 00060
第78-80図 77	"	鉄製品	刀子	(8.62)	1.03	0.42								199613 00075
第79図 78	"	須恵器	蓋				淡青灰色	淡青灰色	回転ケズリ 回転ナデ	回転ナデ	精良	良好	転用硯 黒痕有	199613 00070
第79図 79	"	"	"				暗青灰色	暗青灰色	回転ケズリ 回転ナデ	回転ナデ	精良	"	「キ」ヘラ記号(天井部)	199613 00072
第80図 80	"	土師器	把手	(5.5)	3.3	2.7	茶褐色	黄灰色	指頭圧痕 ヘラケズリ		精良	"	ソケット型	199613 00077
第80図 81	"	軽石		10.8	5.8	3.0	黄茶色							199613 00079
第80図 82	"	"		8.9	6.6	6.4	黄茶色							199613 00078
第80図 83	"	"		7.0	5.4	3.1	黄茶色							199613 00080
第80図 84	"	鉄製品	刀子	(4.24)	1.05	0.52							木質付着	199613 00105
第 図 85	S X11	土師器	甕			(6.9)	黄灰色	黄灰色	回転ナデ 刷毛目	回転ナデ ヘラケズリ	長石粒	良好		199613 00007
第 図 86	"	"	皿			(2.5)	茶褐色	黄灰色	回転ナデ ミガキ	回転ナデ	石英粒	"	手持ヘラケズリ底	199613 00008
第 図 87	"	須恵器	蓋			(1.3)	青灰色	青灰色	回転ケズリ 回転ナデ	回転ナデ	精良	"		199613 00009
第81図 88	"	"	"	14.2		(2.5)	黒灰色	青灰色	回転ケズリ 回転ナデ	回転ナデ ナデ	2mm大長石	"	転用硯か	199613 00010
第81図 89	"	土師器	皿	14.6	14.0	(3.1)	黄褐色	黄灰色	回転ナデ	回転ナデ	1mm大長石	"	手持ヘラケズリ底	199613 00011
第 図 90	"	"	甕			(6.7)	茶灰色	灰褐色	回転ナデ 刷毛目	回転ナデ ナデ	角閃石	"		199613 00012

第6表 遺物観察表④

遺物No	出土遺構	材質	器種	法 量			色 調		調 整		胎 土	焼成	備 考	登録番号
				口 径 (長)	底 径 (幅)	器 高 (厚)	外面	内面	外面	内面				
第 図 91	S P 9	土師器	甕			(3.6)	茶色	灰茶色	回転ナデ	回転ナデ	長石・金雲母粒	良好		199613 00006
第 図 92	S P 16	須恵器	高坏			(4.1)	茶灰色	淡青灰色	回転ナデ	ナデ	精良	"		199613 00014
第 図 93	S P 53	土師器	坏	15.6	10.4	3.3	黄灰色	灰茶色	回転ナデ	回転ナデ	石英・角閃石細粒	"	回転ヘラケズリ底 面取り	199613 00017
第 図 94	S P 77	"	皿	17.4	13.6	2.0	黄橙色	黄灰色 黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	長石粒・赤色粒子	"	ヘラ切り底	199613 00018
第 図 95	S P 80	"	"	16.0	12.2	(1.9)	灰橙色	黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	赤色粒子 精良	"	面取り	199613 00019
第81図 96	S P 148	"	鉢		(9.6)	(4.7)	灰黄色 黄橙色	黄褐色	回転ナデ 回転ケズリ	回転ナデ	長石粒 赤色粒子	"	高台付	199613 00029
第81図 97	S P 160	"	碗	14.4	5.7	(6.5)	赤褐色	赤褐色	回転ナデ 回転ケズリ	回転ナデ	石英・角閃石粒 赤色粒子	"	高台付	199613 00031
第 図 98	S P 176	"	把手	4.9	3.4	2.4	黄橙色	黄褐色	指頭圧痕	ヘラケズリ	長石・角閃石粒 赤色粒子	"	ソケット型	199613 00032
第 図 99	S P 181	"	蓋	19.6		(1.0)	黄茶色	黄茶色	回転ケズリ 回転ナデ	回転ナデ	赤色粒子 精良	"		199613 00033
第 図 100	S P 291	"	甕	25.4		(6.3)	乳褐色	黄橙色	回転ナデ 刷毛目 ナデ消し	回転ナデ ヘラケズリ	長石・角閃石粒 赤色粒子	"		199613 00099
第81図 101	S P 300	"	皿	15.0	12.9	(2.0)	黄灰色 灰黒色	黄灰色	回転ナデ	回転ナデ	赤色粒子 精良	"	手持ヘラケズリ底	199613 00100
第 図 102	S P 307	須恵器	坏		9.8	(1.6)	暗青灰色	暗青灰色	回転ナデ	ナデ	精良	"	高台部片	199613 00101
第 図 103	S P 315	土師器	皿			(2.4)	黄橙色	黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	長石粒 赤色粒子	"	回転ヘラケズリ底 面取り	199613 00102
第 図 104	S P 325	"	甕			(3.9)	茶褐色	黒茶色 茶褐色	回転ナデ 縦刷毛目	回転ナデ ヘラケズリ	多量の砂粒	"		199613 00103
第 図 105	包含層	"	"			(8.0)	茶褐色 灰黒色	茶褐色	回転ナデ 縦刷毛目	回転ナデ ヘラケズリ	長石・角閃石粒 赤色粒子	"	外面に黒斑	199613 00104

3. 小 結

第60次調査は、北地区を構成する遺構を画する北限の溝を確認すると共に、竪穴住居・掘立柱建物の広がり状態を把握することを調査の目的として実施した。その結果、竪穴住居10軒、掘立柱建物8棟、溝4条、土坑5基を検出することができ、当初の目的を達し得たと同時に、新たな問題を提起した調査であった。以下、調査についての所見を記す。

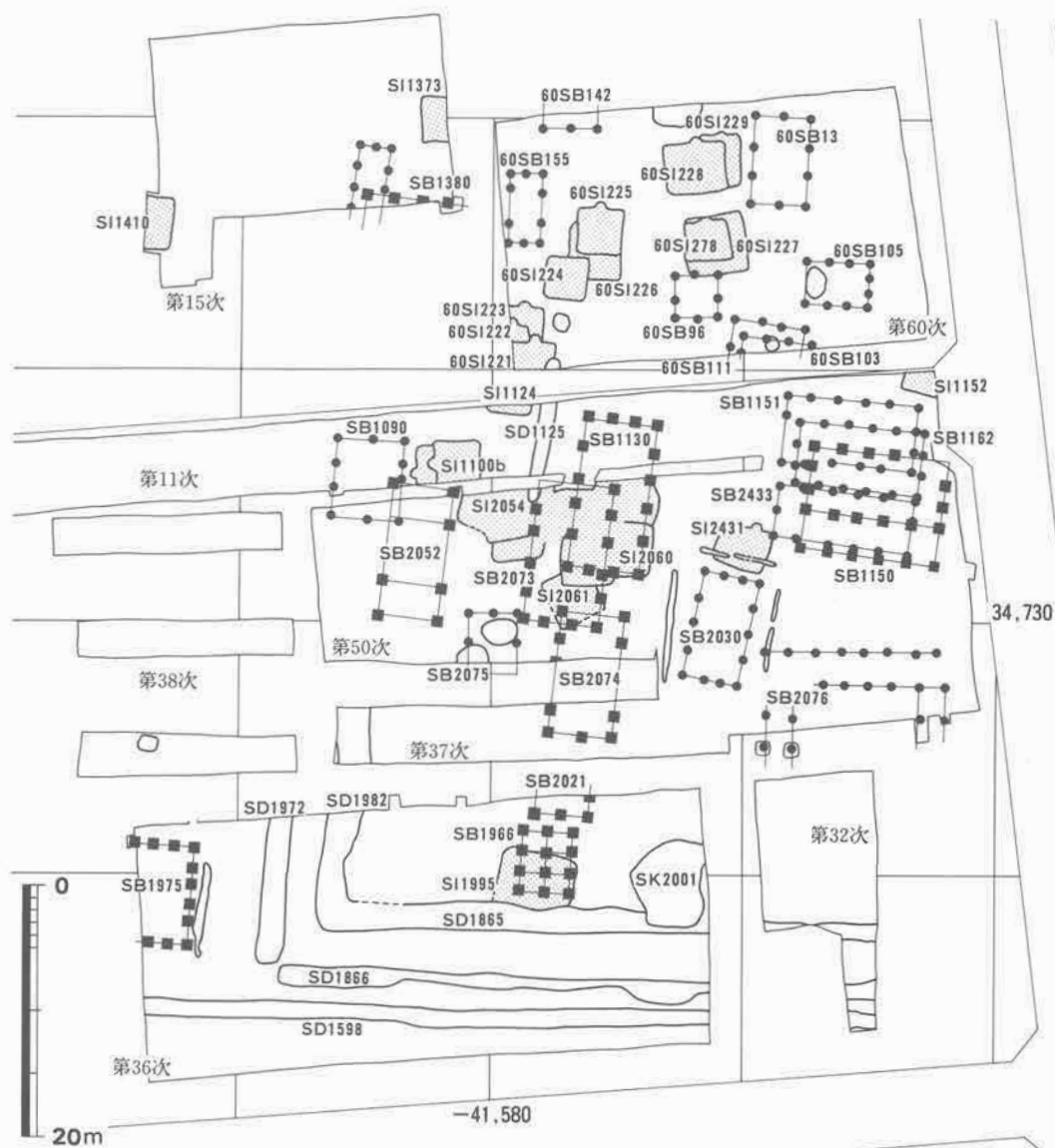
北地区の北限となる溝は検出できなかった。第11次調査の際に設けた確認トレンチの形跡を今回の調査で確認した。溝と推測された部分はS I 224とS I 227の壁面の一部に相当しており、これまでS D 1121とされてきた溝はここで訂正したい。

竪穴住居は先に説明を加えたように、本調査区よりさらに北へ広がりを持つと考えられる。存続する時期は従来どおり、7世紀後半～8世紀中頃と思われる。今回、検出した10軒の時期は次のとおりである。

- 1) 7世紀後半～8世紀前半： S I 223・226・278・229
- 2) 8世紀前半： S I 222・227・228
- 3) 8世紀前半～中頃： S I 221・224・225

S I 221～223, S I 224～226, S I 227・278, S I 228・229の4地点で重複した様相を示す。

このように重複した竪穴住居は北地区には多く見られる。このことは居住地の範囲に関する制限が設けられていたのであろうか。改築や増築をその場で行ったと思える様相である。



第82図 北地区主要遺構配置模式図 (1/600)

次に、北地区の掘立柱建物の計画方位は、すべて座標北から東に傾く。大別すると2度前後(a群)・6度前後(b群)・10度以上(c群)を示す。大規模な建物はb群に含まれ、3間×2間の総柱建物等はa群に入る。c群の棟数は少ないが、北地区では極端な傾きと見られる。

今回の検出建物は a 群に S B13・96・105・142・155、b 群に S B103・111をあてることができる。柱掘形出土の遺物から判断すると、b 群の 2 棟は 8 世紀中頃以降、a 群の S B96 は 8 世紀後半が与えられる。

計画方位から時期決定をするのは困難であろうが、一つのチャートとして、分析の要素とはなり得るであろう。北地区の特徴は、ヘボノ木遺跡を横断して中央地区と北地区を分割する溝（S D1598）と、二重の溝（S D1866・1982, 1867・1972）に囲まれた中に建物群が存在する点である。所謂、建物が区画された域内に収まる様相を示すことで、計画的な配置が考えられる。竪穴住居が7世紀後半を上限とし、8世紀中頃を下限に姿を消し、取って代わり掘立柱建物が盛行し、9世紀前半に大規模な廃棄土坑が出現する。短期間の中で目まぐるしく景観を変える要因があったことは言及するまでもない。

Ⅳ 第61次調査

1. 調査の概要

東部区画整理事業に伴う昭和53年の発掘調査を開始したヘボノ木遺跡は、平成7年度末段階で58地点の調査を実施してきた。平成8年5月15日、久留米市東合川三丁目19-1番地（開発面積627㎡）に係る埋蔵文化財包蔵有無の確認依頼書が提出された。当該地は遺跡の南西部に当たり、過去の周辺の調査によって奈良～平安時代の遺構が多く残存し、その延長が予測できるため、調査要の回答を通知した。将来、分筆する予定になっている専用住居部分200㎡を対象として、地権者と協議を行い、事前に緊急調査することで協議がまとまった。

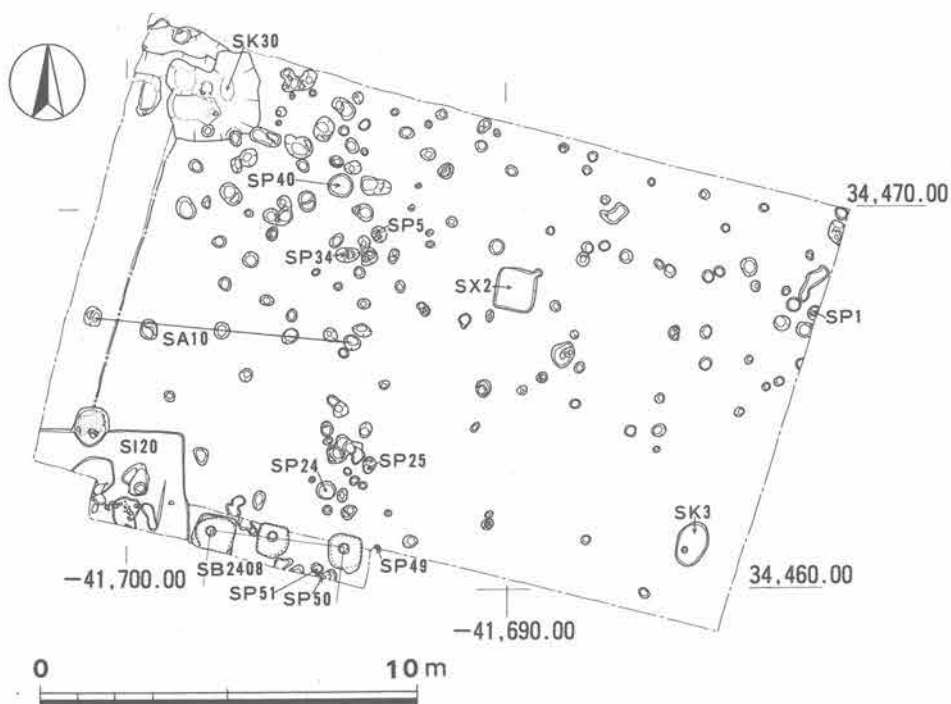
7月29日、調査の依頼書が提出されたので、必要な法手続きを行い、8月19日から現地の調査を開始した。将来に備え、調査区をやや広め（19×12m）に設定した。アカホヤ火山灰の二次堆積土に当たる地山（明茶褐色土）面で遺構を検出した。調査区東側の遺構は少なく、西半分は密度が大きい。地山面に食い込んで完形の縄文土器が検出されたため、歴史時代の遺構掘下げを終え、全体の写真撮影後に東半の地山の掘下げを実施した。しかし、遺物は殆どなく、遺構？が幾つか検出されたに過ぎなかったため、-30cmまで掘下げた。現地の調査は9月11日に無事終了することができた。



第83図 第61次調査区上層全景（北上空から）



第84図 調査風景集成



第85図 第61次調査区上層遺構配置図（1/200）

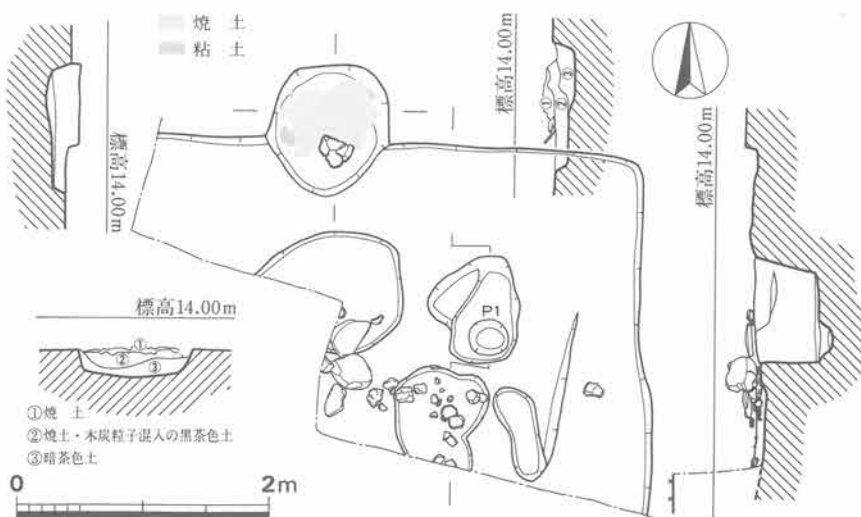
2. 遺構と遺物の概要

調査の結果、飛鳥時代の土坑1基、奈良時代の竪穴住居1軒・掘立柱建物1棟・不明遺構1基、平安時代の柵列1条・土坑1基、柱穴・ピット群の他、縄文時代晩期?の竪穴2基・不明遺構2基を検出した。遺物は、縄文時代早期の押型文土器、晩期の土器、飛鳥～平安時代の須恵器・土師器・瓦・白磁である。

竪穴住居

S I 20 (第86～94図)

調査区の南西隅に位置する。一部拡張したが、全体の大きさは把握できなかった。北壁に接してカマドの張出しが付き、本体は残存しない。床面迄の深さは8～15cmを測るが、硬化面の検出には至らなかった。カマド部を北辺の中央とすれば、住居の東西長約5mに復元できるが、南北は不明である。床面中央付近に安山岩・片岩の人頭大礫が幾つか認められた。8世紀前半の須恵器の高台付坏・長頸壺・甕、土師器の蓋・坏・皿・甕、石錘・砥石が床面に接して出土した。主柱穴は4本と考えられ、北東の柱痕跡のみ検出した。壊されたカマドには、土師器の甕底部(第93図15)が残されていた。埋土は黒茶色である。



第86図 S I 20実測図 (1/60)



第87図 S I 20床面検出状況(北上空から)



第88図 S I 20完掘全景(北から)



第89図 S I 20完掘全景(東から)



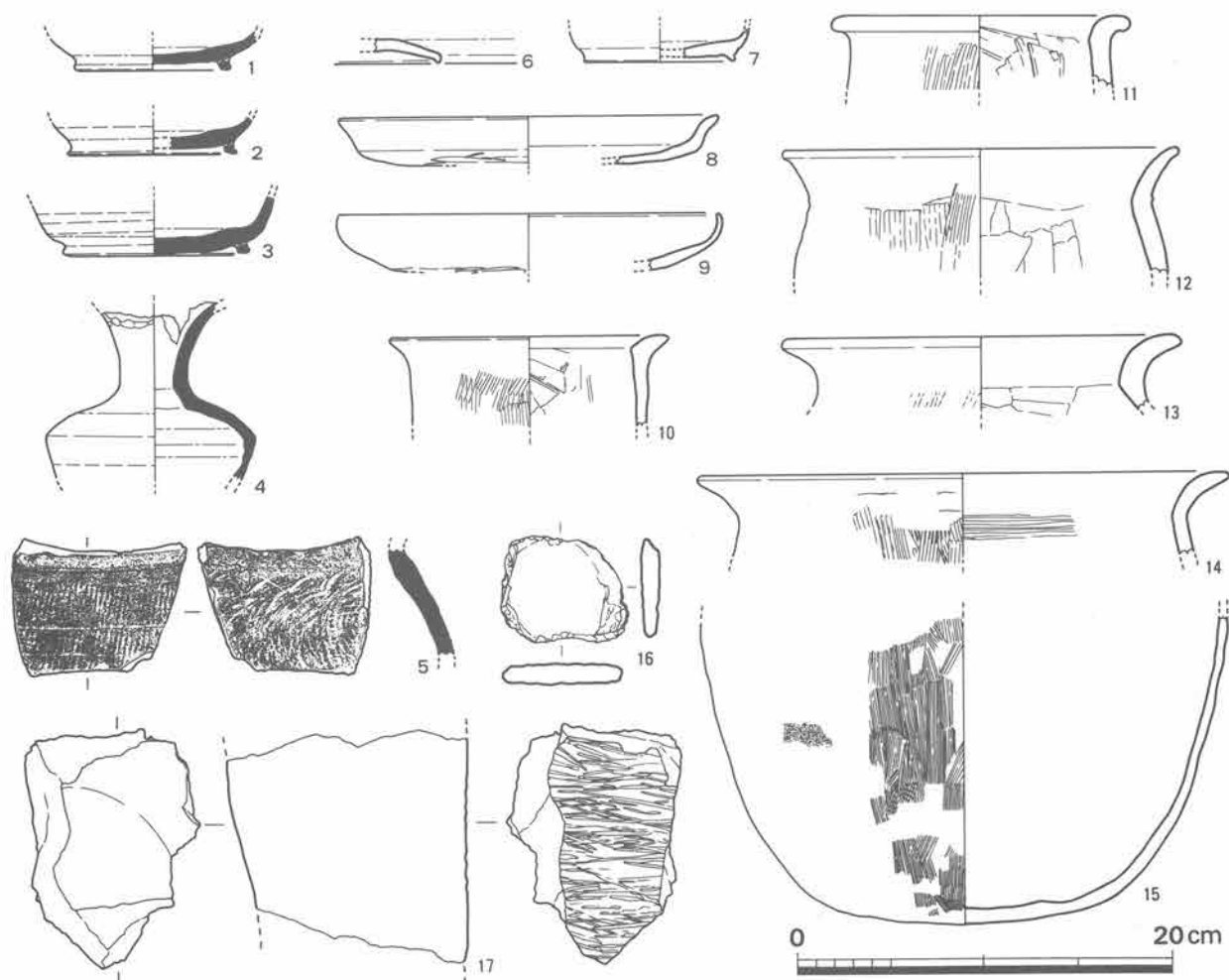
第90図 S I 20カマド検出状況(北から)



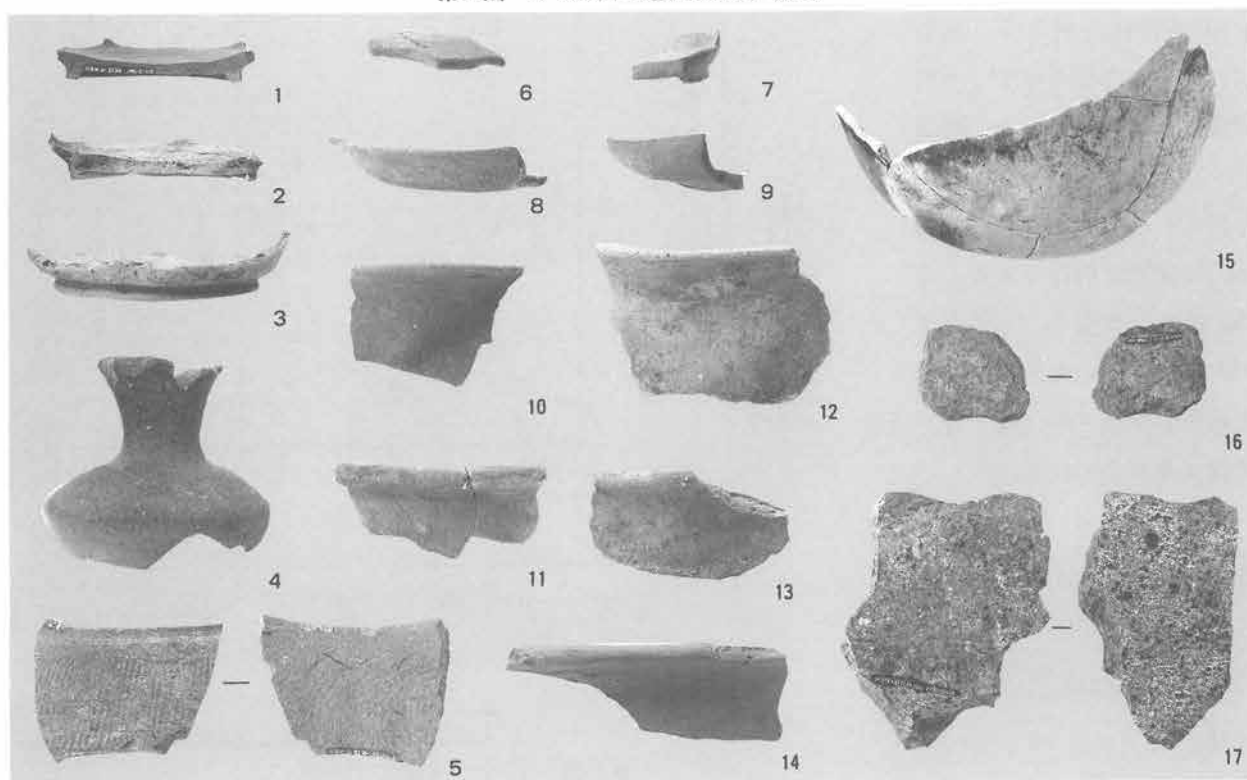
第91図 S I 20カマド半截状況(南東から)



第92図 S I 20カマド完掘全景(北から)



第93図 S I 20出土遺物実測図 (1/4)



第94図 S I 20出土遺物

柵 列

SA10(第95図)

調査区西半の中央に位置する東西方向の柵で、4間分(約7m)を検出した。埋土は黒茶色土である。掘形は円・楕円形を呈する。P4から土師器の坏・皿片が少量したのみで、時期は不詳である。

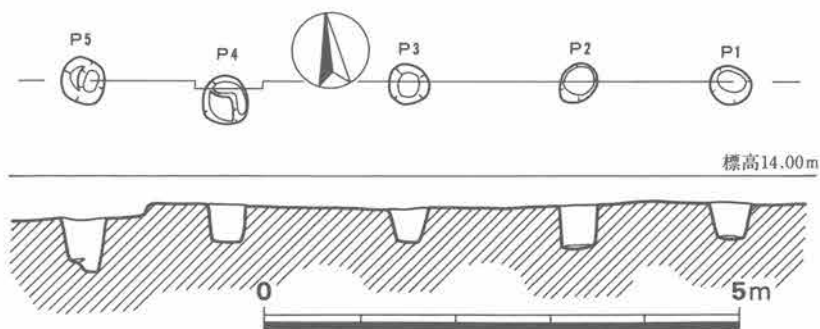
掘立柱建物

SB2408 (第96～101図)

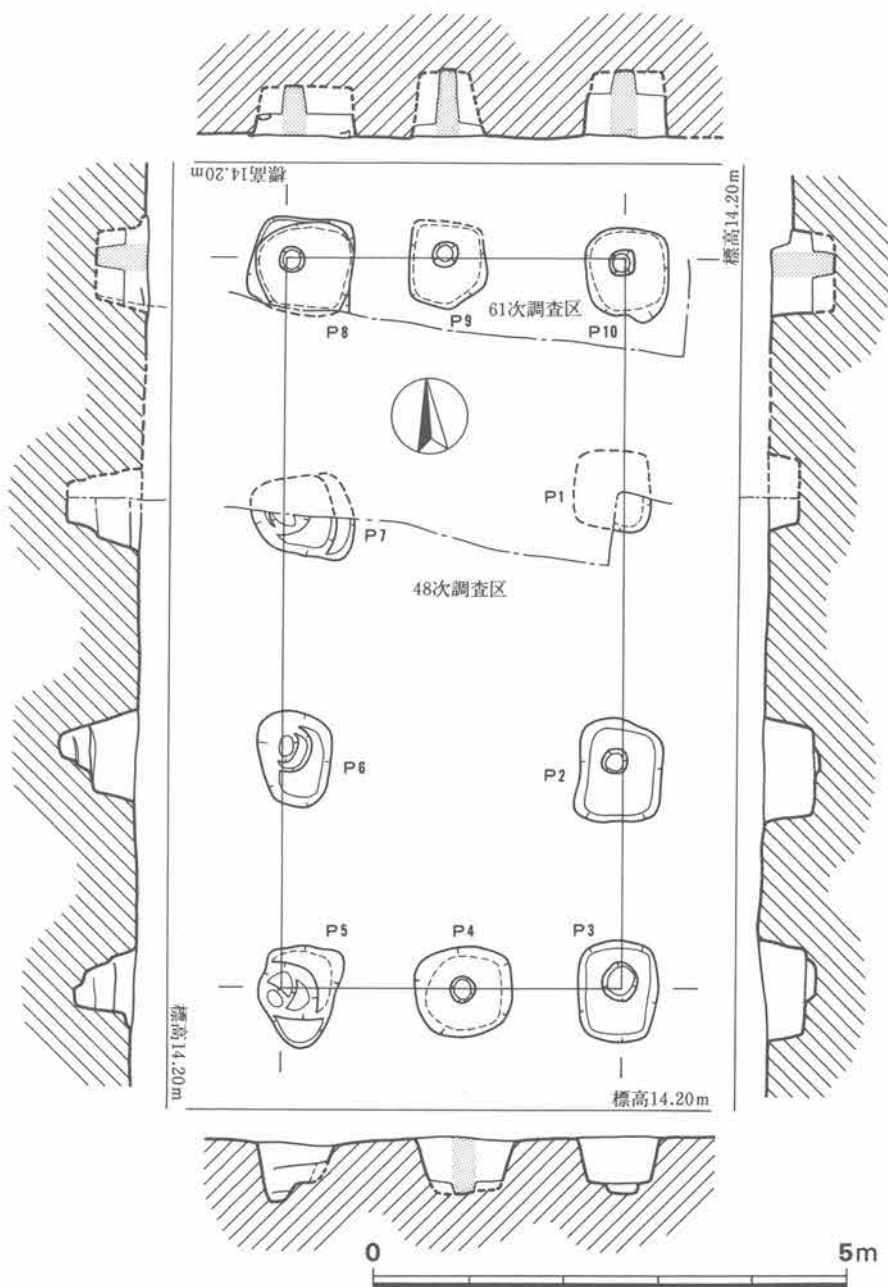
調査区の南西壁際にて検出した柱掘形3基で、第48次調査で検出されていたSB2408の北妻掘形に相当することが判明した。3間×2間の南北棟建物で、計画方位はN-7度30分-Eを示す。第48次調査の報告では、N-5度50分-Eの方位とされていたが、全体を検出したため、修正しておきたい。桁行長7.75m、梁行幅3.9mの規模を有する。掘形はほぼ隅丸方形を呈し、その規模は長辺100～120cm、短辺80～100cm、残存深さ45～75cmを測る。柱痕跡から径20～25cmの柱使用が想定できる。遺物の出土は少なく、8～9世紀代の須恵器の転用硯・甕、土師器の小皿・坏・碗・甕、無紋丸瓦が見られる。



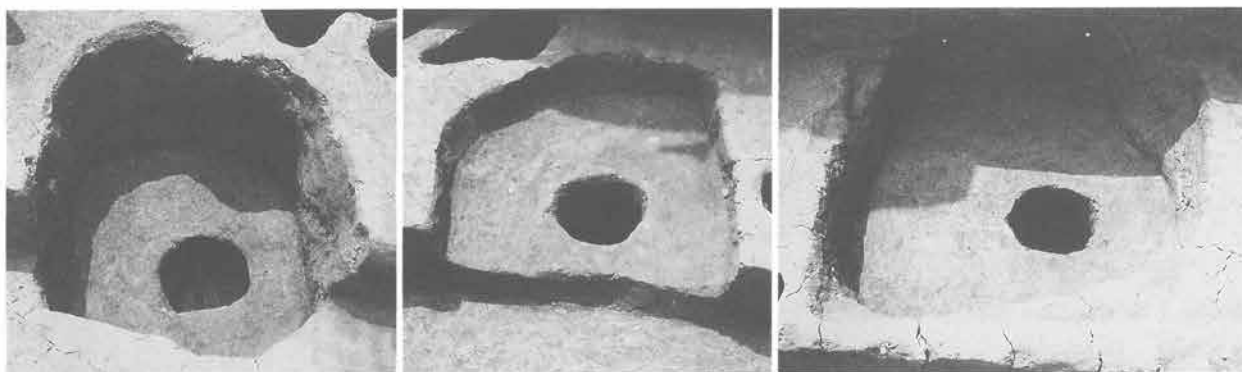
第96図 SB2408 (南上空から)



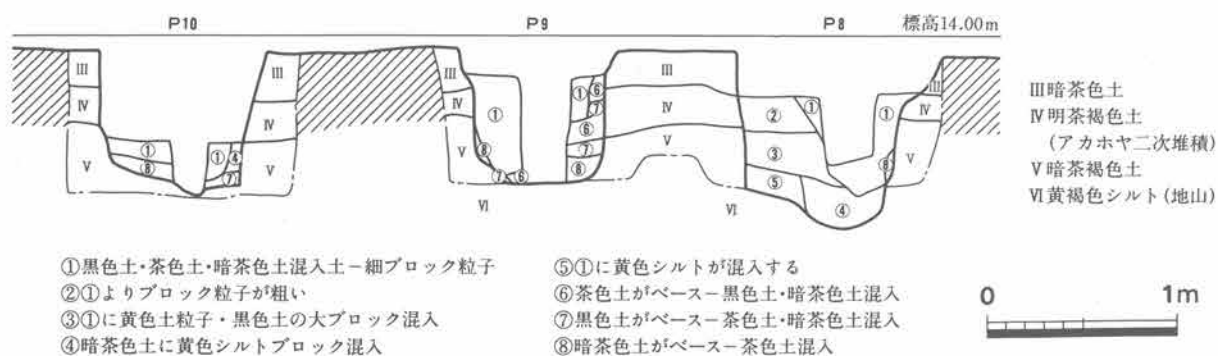
第95図 SA10実測図 (1/80)



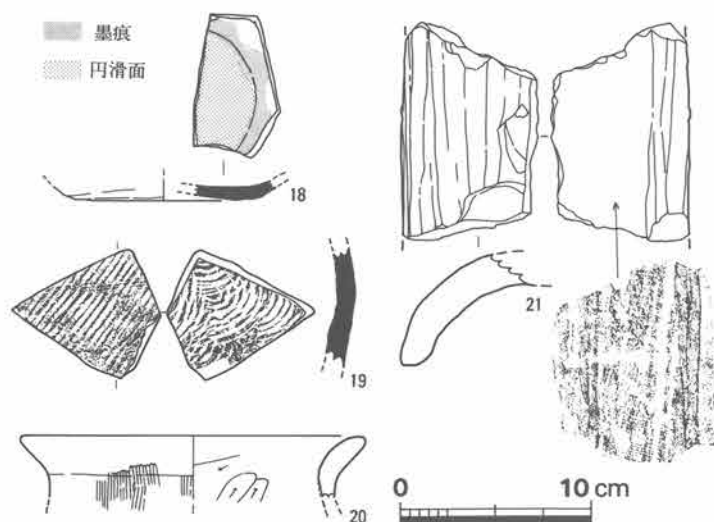
第97図 SB2408実測図 (1/80)



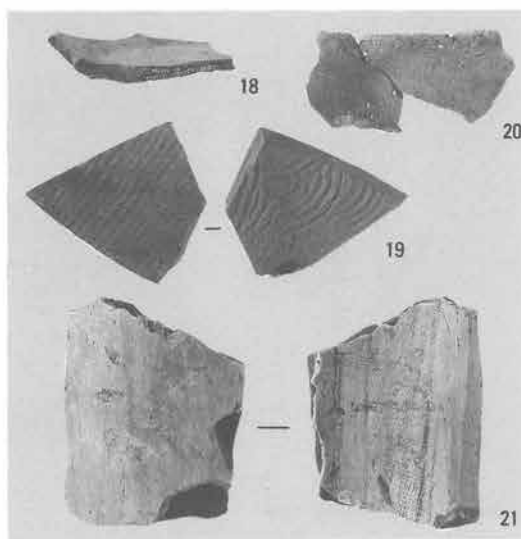
第98図 S B2408P10・P9・P8掘形（北から）



第99図 S B2408P10・P9・P8掘形土層図(1/40)・断面(北から)



第100図 S B2408出土遺物実測図(1/4)

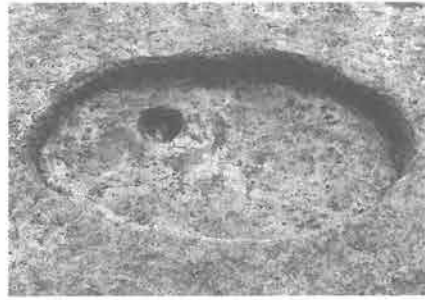


第101図 S B2408出土遺物

土 坑

SK 3 (第102・103図)

調査区の東南隅付近から検出した浅い楕円形状の土坑である。規模は、長軸2.45m×短軸1.65mを測る。残存深さは28cmで、底面は平坦である。直径32cm・深さ13cmのピットが1個認められた。

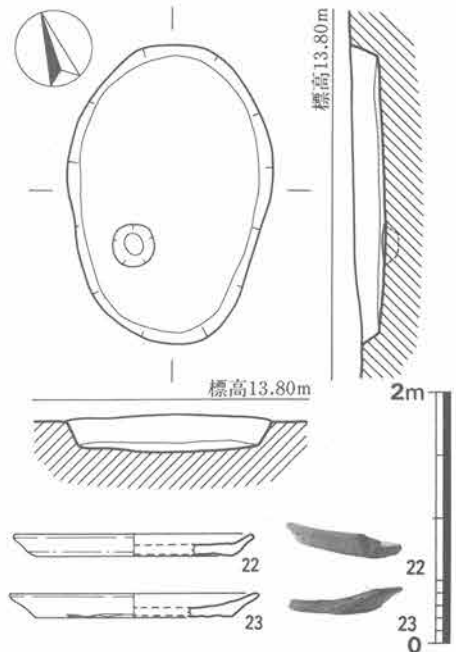


第102図 SK 3 (東から)

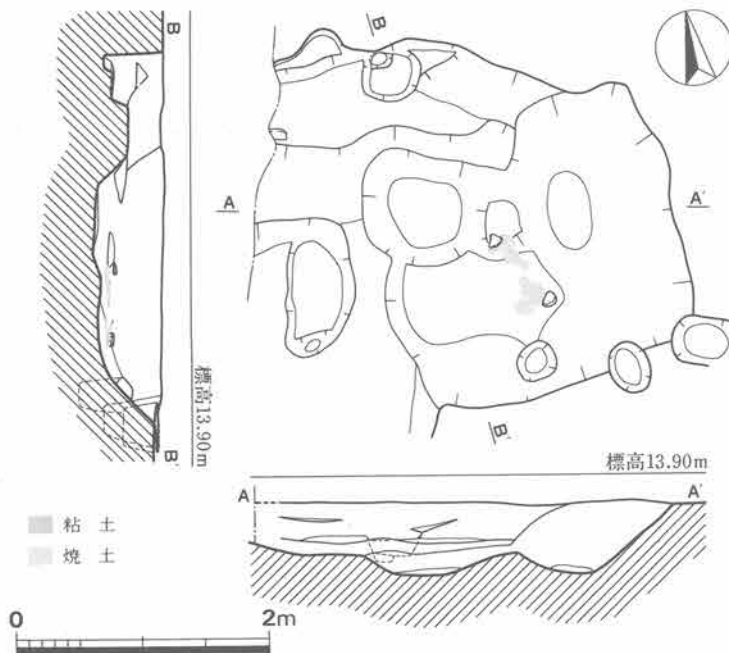
黒茶色土の埋土から、11世紀代の土師器の坏・皿・甕、黒色土器Bの碗が少量出土した。

SK30 (第104~108図)

調査区の北西隅に位置する不定形の土坑である。遺構の南西部分は、重機による表土剥ぎの際、不注意にも掘り過ぎたために、遺構ラインが不明となった。周辺にある幾つかのピットから切られており、ピット群より古い。底面は平坦でなく、幾つかの浅い掘り込みが認められる。遺構の西側は更に広がる。遺構の規模は東西の長さ3.5m以上、南北約2.9mを測る。東南部分がテラス状になっているが、その面に接した状態で黄灰色シルトや焼土を含む茶褐色土がブロック状に検出された。恰かも竪穴住居の造り出しカマドの壊したものを廃棄した状況に類似する。一緒に廃棄された遺物にも焼土が付着するものが認められる。今のところ、ヘボノ木遺跡では最古の須恵器を含み、7世紀後半の土師器・須恵器が出土した。



第103図 SK 3 (1/60)・出土遺物実測図(1/3)



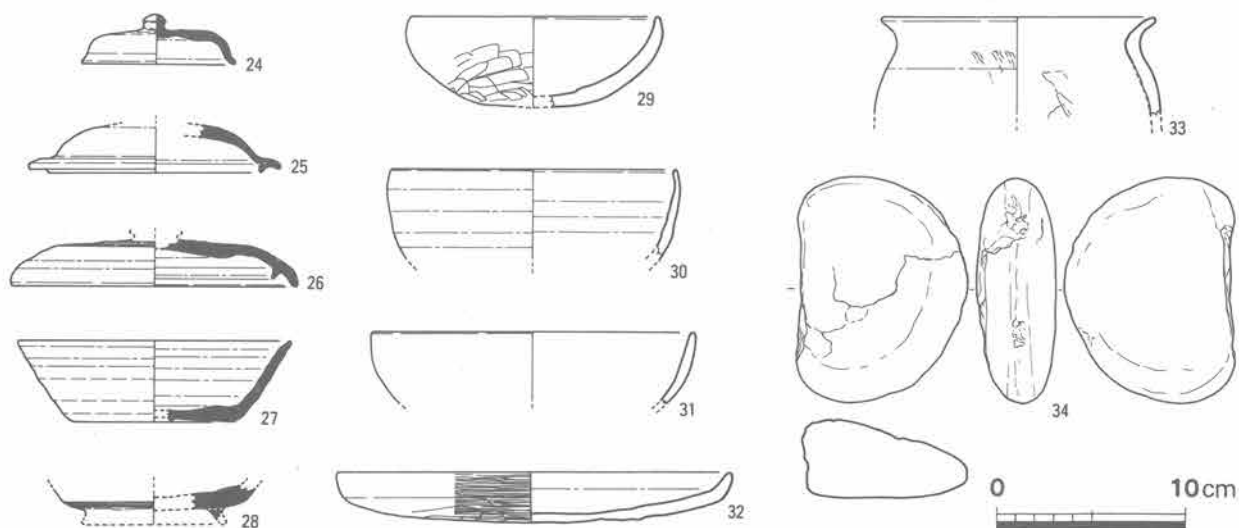
第104図 SK 30実測図 (1/60)



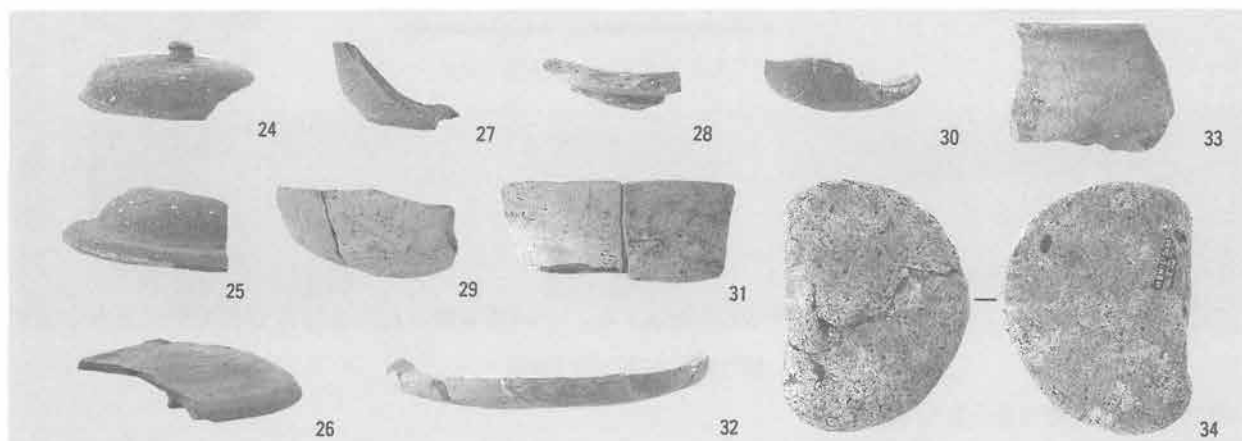
第105図 SK 30 (南上空から)



第106図 SK 30 (東から)



第107図 SK30出土遺物実測図 (1/4)



第108図 SK30出土遺物

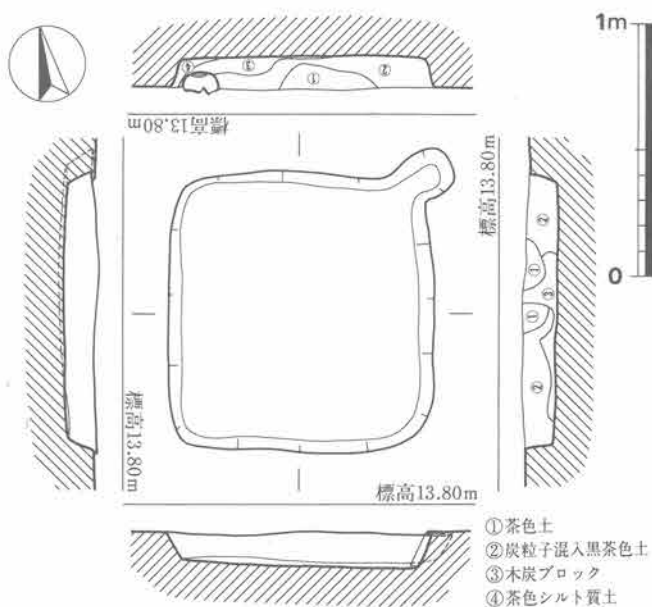
不明遺構

SX 2 (第109~115図)

調査区の中央に位置する方形状の浅い遺構である。埋土は中央部が茶色土で、周囲が黒茶色土となり、西半部の底面に接して木炭層が多く認められた。北東コーナーは突出しており、いかなる機能を果たしたものか判断できない。遺物は8世紀後半の土師器皿・高坏・碗・甕が少量見られる。



第109図 SX 2 土層断面状況 (南から)



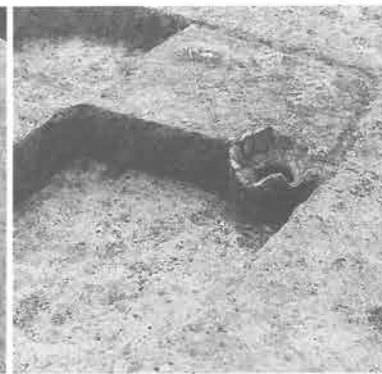
第110図 SX 2 実測図 (1/30)



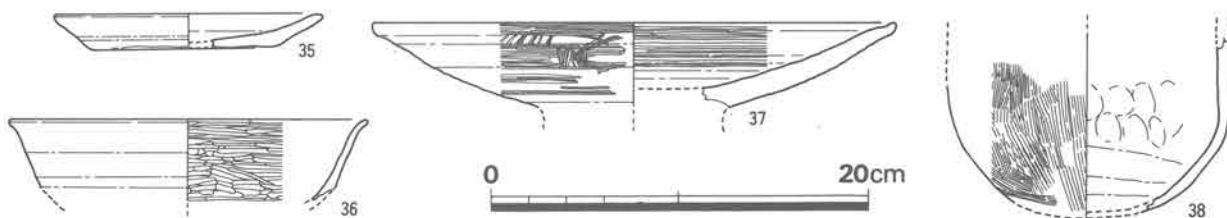
第111図 SX 2 (北から)



第112図 SX 2 (東から)



第113図 SI 2 遺物出土状況 (北から)



第114図 SX 2 出土遺物実測図 (1/4)



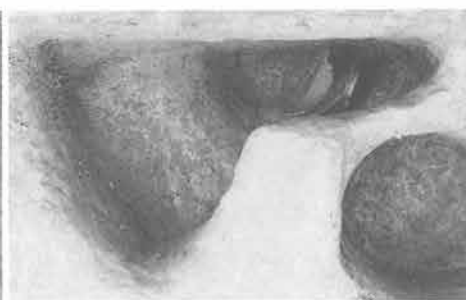
第115図 SX 2 出土遺物

柱穴・ピット群 (第116～119図)

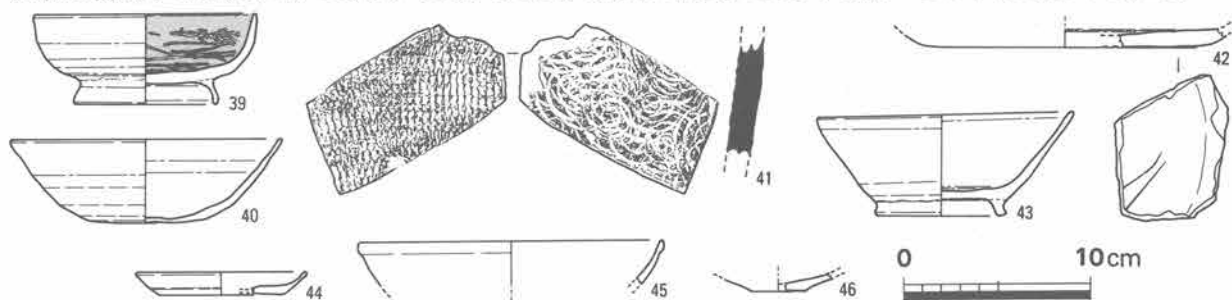
調査区全体で、大小様々なピットを約160個を検出した。少ない東半は小さくて浅いピットが多く、密な西半は大きくて深いものが多い傾向にある。中には、SP 1・5・50のように、完形に近い土師器の碗や坏が出土するものも含まれ、時期が判定できるものの、建物を構成する柱穴には至らなかった。SA10の東端の柱穴に直交する深いピット群も認められる。



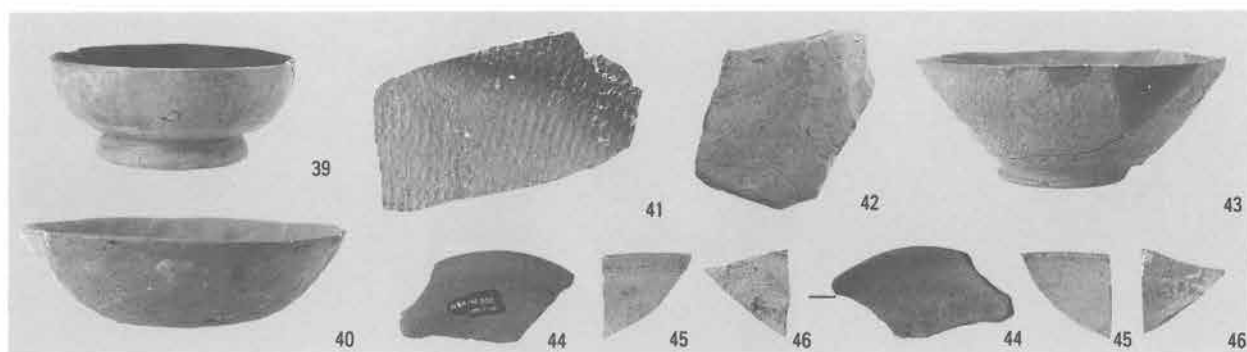
第116図 SP 1 (西から)



第117図 SP 50 (北から)



第118図 柱穴・ピット群・包含層出土遺物実測図 (1/4)



第119図 柱穴・ピット群・包含層出土遺物

下層遺構と遺物 (第120～130図)

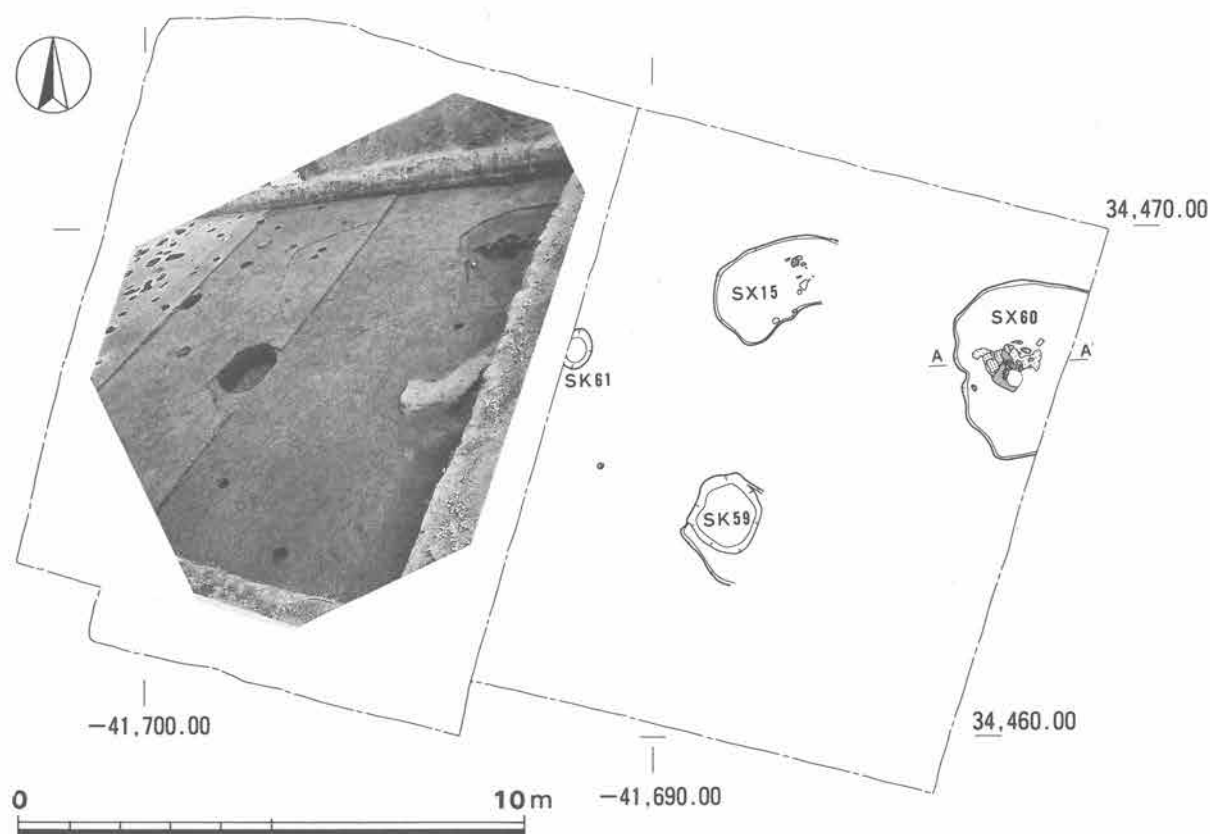
調査区の東半を約30cm掘下げ、暗茶色土の掘り込みを4箇所検出した。その内、縄文土器が1個体出土したものと多量の木炭・焼土が検出されたものは不明遺構とし、他の2基は、竪穴として報告する。

SX15 (第121・122図)

調査区の北側東寄りに検出した不定形状をなす深さ6cmの浅い遺構で、底は平坦である。東端の遺構ラインは不明瞭であるが、長さ2.8m以上×幅1.6mの規模を有する。縄文晩期の夜臼式浅鉢1個体のほか、粗製の甕片2点と片岩礫5個が検出された。竪穴住居か否か判然としない不明遺構である。

SK59 (第123図)

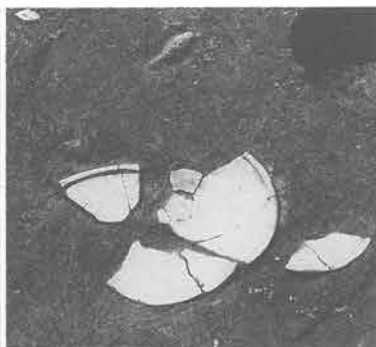
長軸1.6m×短軸1.3m、深さ54cmを測る略楕円形プランの竪穴遺構である。底はフラットを呈する。やや水分を含む暗茶色土の埋土からは、なんらの遺物も検出されなかった。



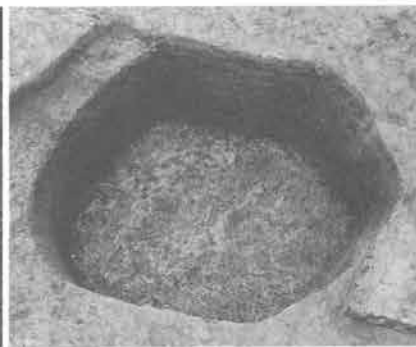
第120図 第61次調査区下層遺構配置図 (1/150)・下層全景 (南東から)



第121図 SX15 (北西から)



第122図 SX15縄文土器出土状況 (北から)



第123図 SK59 (東から)

SX60 (第124～127図)

調査区の東壁に接して検出した遺構で、中央に多量の木炭と焼土が認められた。木炭の塊は直径35cmもあり、恰かも樹木が燃えて倒れた状態を示すかのようである。一部トレンチ状に深く掘下げて土層断面を観察したところ、樹木の根が土中を這った状態を示すように木炭の塊が大小認められた。土層図の右端に



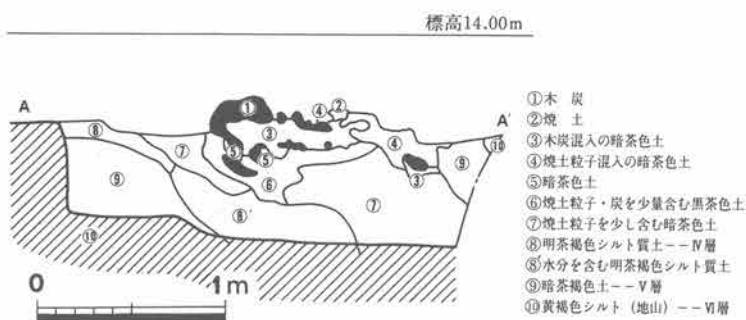
第124図 SX60 (西から)



第125図 SX60木炭出土状況 (北から)



第126図 SX60木炭出土状況 (東から)



第127図 SX60土層図(1/40)・土層状況 (南から)

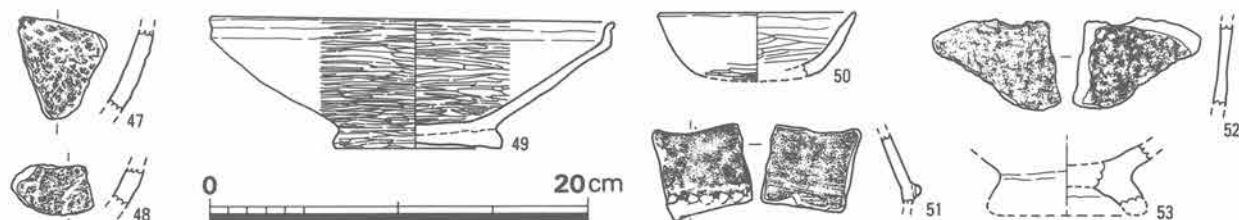
ある⑨・⑩層は、地山を形成するものが縦位置に介在するもので、倒木痕跡に認められる土層と同じ状態を示す。恐らく樹木が燃えて倒れたままを検出したものであろうか。土器の小片が1点出土したが、清掃中に紛失したため、残念ながら時期の判定はできなかった。

SK61 (第128図)

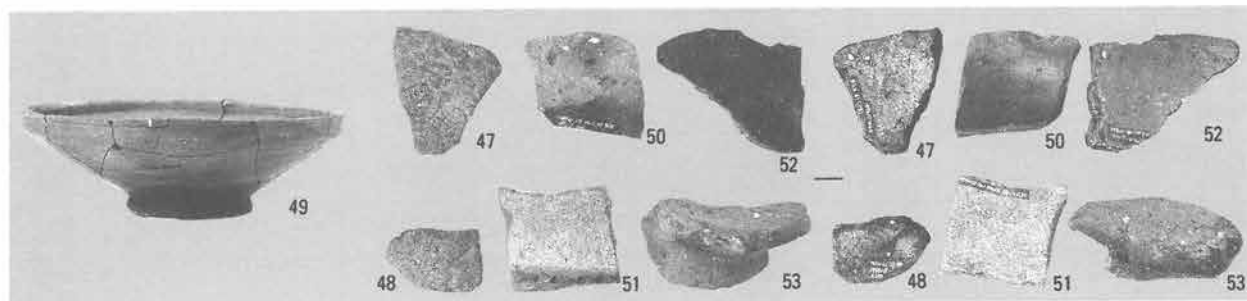
調査区中央に位置する楕円形を呈する竪穴遺構である。西側は完掘していないため幅が不明である。規模は長軸80cm×短軸45cm以上、深さ55cmを有する。埋土は幾分シルト質の暗茶色土で、遺物はなんら出土しなかった。時期不詳。



第128図 SK61 (東から)



第129図 第61次調査出土縄文土器実測図 (1/4)



第130図 第61次調査出土縄文土器

第7表 遺物観察表①

遺物No.	出土遺構	材質	器種	法量			色調		調整		胎土	焼成	備考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外面	内面	外面	内面				
第93図 1	S I 20	須恵器	坏		8.3	(2.1)	明灰色	明灰色	回転ナデ	回転ナデ 横ナデ	細砂粒	良好	高台付 ヘラ切り底	199618 00017
第93図 2	"	"	"		9.1	(2.0)	淡褐色	淡褐色	回転ケズリ	"	細砂粒	"	高台付 ヘラ切り底	199618 00024
第93図 3	"	"	"		10.0	(3.1)	淡灰褐色 茶灰色	明黄灰色	回転ナデ 回転ケズリ	"	砂粒	"	高台付 ヘラ切り底	199618 00023
第93図 4	"	"	長頸壺	胴部径 11.1	(9.5)		濃黄灰色 黒灰色	明灰色	"	回転ナデ	少量の砂粒	"	口縁打ち欠き	199618 00025
第93図 5	"	"	甕		(5.6)		明黄灰色	明灰色	平行タタキ 沈線文	青海波文 タタキ	微砂粒 4mm大の石英片	"	肩部片	199618 00018
第93図 6	"	土師器	蓋		(1.4)		橙褐色	橙褐色	回転ナデ	回転ナデ	微量の細砂粒	"		199618 00012
第93図 7	"	"	坏		8.0	(1.7)	淡橙褐色	淡橙褐色	回転ナデ	回転ナデ 横ナデ	精良 赤色粒子	やや 良好	高台付	199618 00019
第93図 8	"	"	皿	20.2	18.2	2.6	橙褐色 淡黄灰褐色	明橙褐色 淡黄灰褐色	回転ナデ 手持ちケズリ	回転ナデ 横ナデ	細砂粒	良好	外面丹塗り	199618 00010
第93図 9	"	"	"	20.2	14.6	(3.1)	黄橙褐色	赤味の 黄褐色	"	回転ナデ	精良	"		199618 00011
第93図 10	"	"	甕	14.8	(4.9)		暗茶褐色 暗灰褐色	暗灰褐色 暗褐色	回転ナデ 縦刷毛目	回転ナデ ヘラケズリ	細砂粒 3~4mm大の石英片	"	スス付着	199618 00016
第93図 11	"	"	"	15.8	(3.9)		赤茶褐色	茶褐色 暗灰褐色	回転ナデ 縦刷毛目	回転ナデ ヘラケズリ	細砂粒 5~6mm大の石英片	"		199618 00013
第93図 12	"	"	"	21.0	(6.8)		茶褐色	淡褐色	"	"	細砂粒 5~6mm大の石英片	"	スス付着	199618 00022
第93図 13	"	"	"	21.2	(4.0)		黄灰褐色 茶灰色	濃橙褐色 茶灰色	"	"	細砂粒 4~5mm大の石英片	"		199618 00015
第93図 14	"	"	"	28.2	(4.5)		橙褐色	黄橙褐色 橙褐色	"	回転ナデ 横刷毛目	砂粒	"		199618 00014
第93図 15	"	"	"		14.5	(16.3)	淡褐色 暗黒褐色	淡黄褐色	縦刷毛目	ヘラケズリ	砂粒 赤色粒子	"	スス付着	199618 00021
第93図 16	"	片岩	石錘	5.7	6.7	1.1							扁平礫素材	199618 00020
第93図 17	"	安山岩	砥石	(12.8)	(9.3)	12.8								199618 00026
第100図 18	S B 2408 P 9柱痕跡	須恵器	坏?		9.2	(1.1)	黄灰色	明黄灰色	回転ナデ	回転ナデ 横ナデ	細砂粒	良好	転用碗、墨痕有り	199618 00046
第100図 19	P 9掘形	"	甕		(6.4)		黒灰色	暗赤茶色	平行タタキ 櫛目文	青波波文 タタキ	精良	"		199618 00047
第100図 20	" P 10掘形	土師器	"	18.1	(3.3)		橙褐色 暗灰色	暗褐色 茶褐色	回転ナデ 縦刷毛目	回転ナデ ヘラケズリ	砂粒	"	内面スス付着	199618 00049

第8表 遺物観察表②

遺物No	出土遺構	材 質	器種	法 量			色 調		調 整		胎 土	焼 成	備 考	登録番号
				口 径 (長)	底 径 (幅)	器 高 (厚)	外面	内面	外面	内面				
第100図 21	S B2408 P10掘形	瓦	丸瓦	(11.5)	(7.2)	2.0	黄灰褐色	黄灰褐色	ヘラケズリ ナデ消し	布目痕	微量の砂粒	良好		199618 00050
第103図 22	S K3	土師器	皿	9.6	7.8	1.9	淡橙灰褐色 茶灰褐色	淡橙灰褐色 茶灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	僅かな細砂粒	"	ヘラ切り底	199618 00006
第103図 23	"	"	"	9.9	7.9	2.0	明茶褐色	明灰 茶褐色	"	"	少量の微砂粒	"	ヘラ切り底	199618 00007
第107図 24	S K30	須恵器	蓋	8.2	つまみ径 1.2	2.7	暗茶灰色	黒灰色	回転ナデ 回転ケズリ	回転ナデ	砂粒	"		199618 00034
第107図 25	"	"	"	11.3 13.3		(2.5)	黒茶灰色	黒黄灰色	回転ナデ	"	細砂粒 3~4mm大の石英片	"		199618 00036
第107図 26	"	"	"	12.4 15.1		(2.5)	黒灰色 明灰色	黒灰色 明灰色	回転ナデ カキ目	回転ナデ 横ナデ	微量の砂粒	"	つまみ欠損	199618 00035
第107図 27	"	"	坏	14.4	8.5	4.3	くすんだ 明灰色	黒灰色 濃赤灰色	回転ナデ 回転ケズリ	回転ナデ	微量の細砂粒 ほぼ精良	"	ヘラ切り底	199618 00039
第107図 28	"	"	"			(1.8)	明黄灰色	明黄灰色	回転ナデ カキ目	回転ナデ	少量の細砂粒 ほぼ精良	"		199618 00037
第107図 29	"	土師器	碗	13.0		4.9	暗灰色 茶褐色	橙褐色	回転ナデ 手持ちケズリ	回転ナデ	多量の赤色粒子	"		199618 00031
第107図 30	"	"	鉢	15.1		(4.8)	濃橙褐色	濃橙褐色	回転ナデ 回転ケズリ	回転ナデ	赤色粒子	"	鉄鉢タイプ	199618 00030
第107図 31	"	"	碗	17.1		(3.8)	淡橙褐色 淡黄褐色	淡橙褐色	?	?	微砂粒 赤色粒子	やや 不良	外面丹塗り	199618 00029
第107図 32	"	"	皿	20.8	20.1	2.7	明赤茶色 黒灰色	橙褐色 黄灰褐色	回転ナデ 手持ちケズリ ミガキ	回転ナデ	少量の細砂粒	良好	外面丹塗り	199618 00032
第107図 33	"	"	甕	14.4		(5.3)	暗橙褐色 茶褐色	暗褐色 赤茶褐色	回転ナデ 縦刷毛目	回転ナデ ヘラケズリ	細砂粒	"	スス付着	199618 00033
第107図 34	"	安山岩	磨石	11.9	9.1	4.2							一部敲石にも利用	199618 00038
第114図 35	S X2	土師器	皿	14.2	9.6	1.8~ 2.0	橙褐色 黄灰褐色	橙褐色 黄灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	ほぼ精良	良好	ヘラ切り底	199618 00005
第114図 36	"	"	碗	19.0		(4.3)	くすんだ 茶灰褐色	くすんだ 茶褐色	回転ナデ	ミガキ	ほぼ精良 赤色粒子	"	体部中位にて屈曲する	199618 00004
第114図 37	"	"	高坏	27.6		(4.6)	橙褐色 淡茶褐色	黒色 茶灰褐色	回転ケズリ ミガキ	ミガキ	精良 微量の赤色粒子	"	皿部のみ	199618 00002
第114図 38	"	"	甕			(9.5)	ベージュ色 灰褐色	茶灰褐色 淡褐色	縦刷毛目	指ナデ	砂粒 5mm大の石英片	"	底打ち欠き、スス付着	199618 00003
第118図 39	S P1	黒色A	碗	11.8	7.6	4.8	橙褐色 淡茶褐色	灰黒色	回転ナデ	回転ナデ ミガキ	精良 少量の赤色粒子	"	高台付 ヘラ切り底	199618 00001
第118図 40	S P5	土師器	坏	14.3	5.9	4.4	橙褐色 淡茶褐色	暗橙褐色 橙褐色	回転ナデ 回転ケズリ	回転ナデ	ほぼ精良	"	回転ヘラケズリ底?	199618 00043
第118図 41	S P25	須恵器	甕			(6.0)	明灰色 黒灰色	明灰色	正格子文 タタキ	青海波文 タタキ	細砂粒 4mm大の石英片	"		199618 00028
第118図 42	S P49	土師器	皿		14.4	(1.0)	明橙褐色	明橙褐色	回転ナデ	回転ナデ	ほぼ精良	"	ヘラ切り底 底に刻線2本有り	199618 00042
第118図 43	S P50	"	碗	13.6	7.0	5.2 ~5.5	茶灰褐色 橙褐色	橙褐色	回転ナデ 回転ケズリ	回転ナデ	少量の細砂粒	"	回転ヘラケズリ底 高台付	199618 00008
第118図 44	包含層	"	皿	9.0	6.5	1.3	黄灰褐色 橙褐色	淡灰褐色 橙褐色	回転ナデ	回転ナデ	少量の細砂粒	"	糸切り底	199618 00051
第118図 45	"	白磁	碗	16.1		(2.4)	黄灰緑色	黄灰緑色	"	"	淡灰色 精良	"	玉縁、氷裂有り 碗Ⅱ1類	199618 00052
第118図 46	"	"	皿		2.9	(2.0)	黄灰緑色	黄灰緑色	"	"	淡灰色 精良	"	体部下半露胎 皿Ⅵ1a類	199618 00053
第129図 47	S P51	縄文土器	鉢			(4.5)	茶褐色 暗赤褐色	くすんだ 黄褐色	斜走の 横円 押型文	横ナデ	細砂粒 4mm大の石英片	"	胴部片	199618 00044
第129図 48	S P24	"	"			(2.1)	明茶褐色	灰褐色 暗灰褐色	横円 押型文	横ナデ	細砂粒 3~4mm大の石英片	"	底部付近の胴部	199618 00027
第129図 49	S X15	"	浅鉢	21.4	9.0	6.7~ 7.0	黄茶褐色 灰褐色・ 黒灰色	茶褐色・ 赤褐色 暗黄灰褐色	ミガキ	ミガキ	細砂粒 4~5mm大の石英片	"	内面一部に丹塗り跡有り 夜臼式	199618 00009
第129図 50	S B2408 P9掘形	"	碗	10.5	5.9	(3.4)	茶褐色・ 暗灰色 暗灰褐色	暗灰褐色 明褐色	"	"	"	"	山ノ寺式~夜臼式	199618 00048
第129図 51	S P40	"	深鉢			(3.7)	淡茶褐色	赤味のある 淡茶褐色	刻目 突帯文 横ナデ	横ナデ 条痕文	多量の細砂粒	"	スス付着 山ノ寺式	199618 00040
第129図 52	"	"	"			(4.3)	暗黒褐色	茶褐色	ヘラケズリ 縦ミガキ	横ナデ 縦ミガキ	細砂粒 3~4mm大の石英片	"	スス付着 山ノ寺式?	199618 00041
第129図 53	S P54	"	"			(3.3)	橙褐色 暗灰色	茶褐色	横ナデ	横ナデ	多量の砂粒 5~6mm大の石英片	"	脚付き部分	199618 00045

3. 小 結

今回の調査は、ヘボノ木遺跡における61次目となり、遺跡の南地区の様相がより具体的になってきた。後で調査した同地番の第63次調査の成果を合わせると、第131図に示す配置図のようになる。遺構の内訳は、7世紀後半～8c前半の竪穴住居1軒・土坑2基・不明遺構1基、8世紀末～9世紀前半の掘立柱建物2棟、10～11世紀の掘立柱建物2棟・柵列2条・土坑6基・溝3条ほか、ピット群が検出された。この他に、下層から縄文時代の竪穴遺構2基・不明遺構2基と、縄文早期・晩期の土器が見られた。

南地区の歴史時代遺構について

今年度の第61～63次調査の実施によって、ヘボノ木遺跡の南地区の様子が更に具体的になってきつつある。7世紀後半以降から12世紀までの様相を垣間見て小結としたい。

現時点において、最も古い遺構は今回検出した61次SK30土坑で、カキ目を残す返しのある須恵器蓋やカキ目を残す高台付坏から、7世紀3四半期に位置付けできよう。次が、48次SK2371土坑で、須恵器や暗文のある土師器碗などから、7世紀4四半期に比定できる。初期段階の遺構は廃棄土坑に限られ、明確な生活遺構（住居）が未検出である。南側一帯に包蔵されている可能性が強く、将来に期待したい。

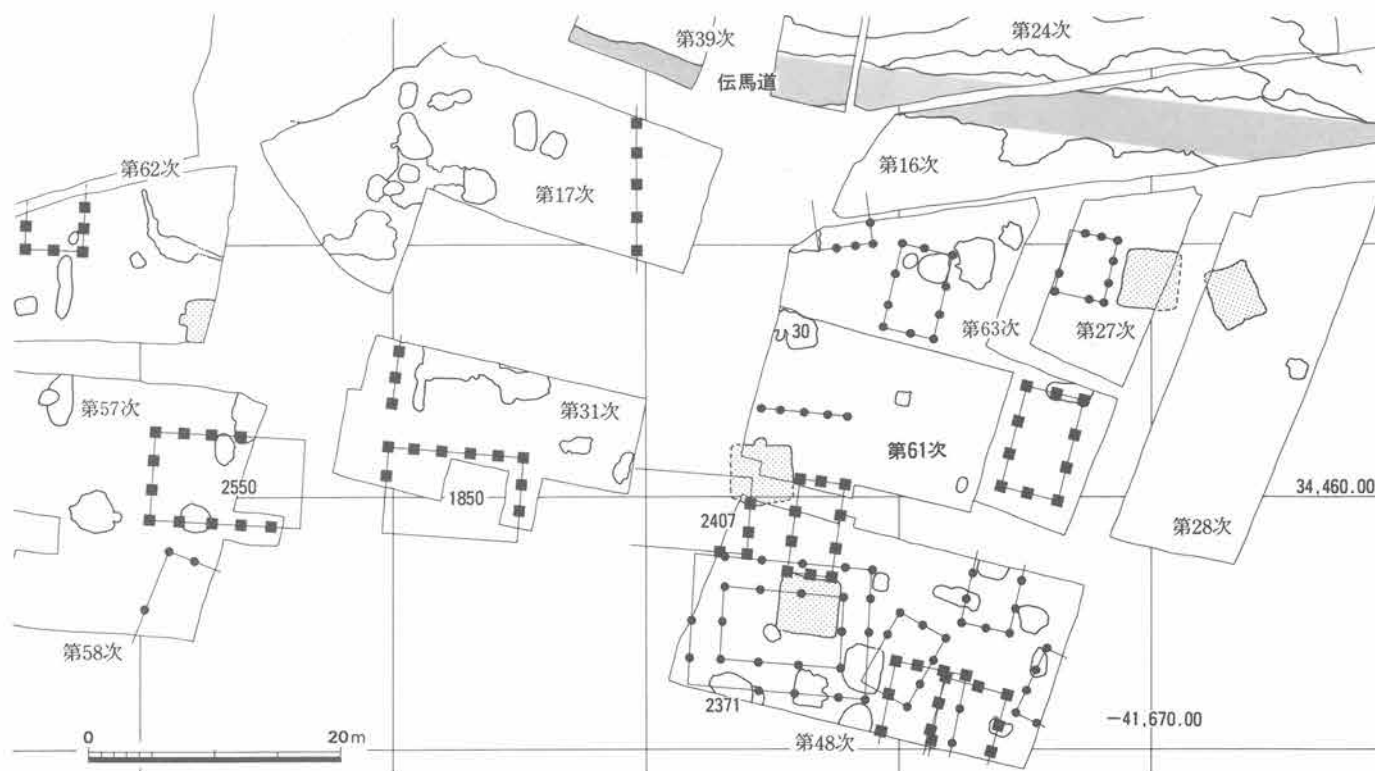


第131図 第61・63次調査区遺構配置図 (1/200)

8世紀になると、竪穴住居や廃棄土坑群が営まれはじめ、8世紀中頃まで存続して集落が認められる。南地区の重要な遺構である西海道が西方約600mにある国庁から東進し、この付近で北に向きを変える。そのコーナーから分岐した伝馬路が、63次調査のすぐ北を東進し、山本郡・浮羽郡を經由して豊後国日田郡に至る。奈良時代から使用された律令官道・古道は引き続き平安時代も踏襲されたと見え、付近の奈良時代後半～平安時代の掘立柱建物群は、これらの道路や方向に規制されて建てられている。8世紀後半以降になると、突然、大型の掘立柱建物群が営まれ始める。柱掘形や柱穴出土の遺物が少なく、時期比定の正確さを欠く恨みを持つものの、建物群のメインは東西向きに並ぶ大型建物3棟であろう。西から、57次S B2550、31次S B1850、48次S B2407で、いずれも5間×3間の規模を有する。ヘボノ木遺跡でも重要な機能を具有した建物群と見なせようが、性格については想像の域を脱しえないので言及しない。他の建物群は全て南北棟で構成される。中には、先の東西棟建物群と直交し、柱筋や間隔を計画的に配置したと考えられるものもある。廃棄土坑出土のヘラ書き土器・墨書土器・転用硯は、こうした建物群で供されて廃棄されたものであろう。円形柱穴を持つ建物群は、付近の廃棄土坑出土の一括遺物から、平安時代の所産と見なせる。48次の四面庇東西建物がこの時期のメイン施設の一つに挙げられよう。出土土師器から11世紀代に下る建物も存在するようである。

南地区の最終段階は、一部の廃棄土坑や土壌墓から出土する土師器の糸切り底の小皿・坏、瓦器碗・小皿より、12世紀中頃を下限とするものである。これらの遺構は南地区の西側に多く認められる傾向が指摘できる。11世紀末には官道が廃絶しており、ルートの変更がなされている。この事象と歩を合わせるかのように、土坑群や墓が営まれ、小規模な集落の片鱗を残すのみに過ぎなくなった。

以上、南地区の歴史時代の様相を垣間見たが、ヘボノ木遺跡にはその前史（縄文・弥生）もあり、断続的ながら生活の営みが良好に重複して残っている貴重な遺跡であることを強調して終りたい。



第132図 南地区主要遺構配置模式図 (1/600)

V まとめ

平成8年度のへボノ木遺跡における調査は、補助事業3件(59・60・61次)と受託事業3件(62・63・64次)で、都合6件の調査を実施した。本書で報告を行った調査は、補助事業関連の調査であるが、この項では、受託事業3件の調査分を加えてまとめとしたい。

調査地点の位置は、北地区で1調査(60次)、東地区で1調査(59次)、中央地区で1調査(64次)、南地区で3調査(61・62・63次)である。6件の調査ともに新たな知見を得、新たな課題を提起した。4地区ごとに検出遺構・出土遺物を検討してみたい。

まず、北地区では7世紀後半を初現とする竪穴住居と、9世紀前半を下限とする掘立柱建物の過渡期を8世紀中頃における。掘立柱建物出現と同時に竪穴住居は消滅する様相を明示している。これは、8世紀中頃に、北地区を舞台とした施設の建築が大規模に行われたことを示唆する。竪穴住居の重複関係を見ると3～4期に細別できる。建て替え毎に敷地を変えたのか、同一地点で再構築したのか不明であるが、限られた居住地区の範囲で建て替えを行ったことは遺構の状態から判断できよう。また、計画方位を3方向に分類できる掘立柱建物は、8世紀中頃～9世紀前半にわたって創建され、かつ建て替えが行われている。中心となるS B1150付近では、他に3棟の建物が重複しており、8世紀後半代に数回の手直しをしていると考えられる。8世紀中頃に比定されるS D1598と、その後に出現する二重の溝に伴う建物を検討すれば、北地区の輪郭が浮かび上がってくるであろう。さらに、北地区の性格が居館的色彩が強いという推定を裏付けることができると考える。

次に、東地区で検出されている総柱建物群は、東に中谷川を控えた高燥の地に立地する。報文の中で単位的倉庫と単独倉庫の性格が異質なものと提起した。個々の倉庫の性格を追う前に、これらの倉庫群が中央地区の建物関連の施設であるのか、北地区もしくは南地区に関連するものなのか検討する余地がある。これまでは最も近い位置に当たる中央地区の建物に関連すると推定していたが、北・南地区の調査が進展するにつれて、建物群から若干離れた地点に倉庫を設置した可能性も考えられる。北地区から約150m、南地区から約200mである。各単位的倉庫の時期および単独倉庫の時期と、各地区の建物の時期をそれぞれ照合していく作業が求められる。

南地区の土坑から7世紀第3四半期の遺物が出土しているが、歴史時代の竪穴住居は8世紀前半に上限を与えられる。北地区と比べると若干遅く出現するようである。竪穴住居と掘立柱建物の時期関係は、北地区のように一時期を過渡期として見られる資料をこれまでのところ得ていない。掘立柱建物への移行時期が8世紀のどの時期に当たるものか、または、竪穴住居と併存時期を有するものか判然としないのが現状である。S B2550(第57次)、S B1850(第31次)、S B2407(第48次)は中央地区・北地区の大規模な建物に次ぐ規模を有する。3棟とも同様の規模になれば、5間×3間の東西棟建物が、桁行の柱筋を合わせて3棟東西に並んだ様相を呈することを新たに認識した。これらが同一時期の建物になる資料は得られていないが、南地区を構成する中心的な建物であることは間違いないと思われる。さらに南方の未調査部分に調査の焦点が注がれる。

中央地区は回廊・外郭の溝に囲まれた地区を指していたが、今年度を実施した回廊南東隅の外側の調査(第64次)をも便宜上、中央地区の一部として記す。土師器の火舎、須恵器の鉄鉢形土器、その他、丸瓦などが出土した溝(S D1339)は約20mの長さで終息することが確認できた。また、遺物は単弁素弁五弁

の軒丸瓦や平瓦・丸瓦片が出土し、その出土分布状態に新たなデータを取り込むことができた。

最後に、第59次調査において出土した単弁重弁六弁の軒丸瓦について触れておきたい。これは中房に1+6の蓮子を配し、6葉の蓮弁が上下に重なり、素文の外区を持った瓦当を有する軒丸瓦である。福岡県小郡市井上に所在する井上廃寺跡遺跡で出土して以来、同市上岩田所在の上岩田遺跡でも出土している。共に畿内山田寺系の極先瓦が出土した遺跡である。この軒丸瓦は上岩田遺跡に存した寺院で葺かれ、寺院が廃絶した後に井上廃寺で第Ⅰ期の軒丸瓦として再度葺かれたと考えられている。

ヘボノ木遺跡に移入された時期については、先述のとおり2時期を柱にそのスパンの時期が考えられよう。しかし、出土個体は1点のみであるが、ヘボノ木遺跡で使用された単弁素弁五弁の軒丸瓦の製作において、影響を与えたとも考えられる。中央地区に位置する2回の建て替えの痕跡を持つ大規模な建物の第Ⅰ期は、瓦葺であることが推測される。このことは、第Ⅱ期の建物に付設すると考えられる回廊の柱掘形内から根固めに入れ込まれた再利用瓦、回廊の外側を巡る溝から平瓦・丸瓦が出土していることから推測することができる。第Ⅰ期建物の上限と上記の軒丸瓦との関連が、ヘボノ木遺跡の性格に影響を及ぼすと考ええる。

井上廃寺の創建までの時期に移入されたすると、7世紀後半～末にはヘボノ木遺跡に瓦葺き建物が建立された可能性が出てくる。また、井上廃寺で第Ⅱ期の百済系単弁七弁軒丸瓦（古）に移行する時期と仮定すれば8世紀初頭～前半に第Ⅰ期建物を比定することになるだろう。

ヘボノ木遺跡の調査成果を振り返って上記の時期に該当する遺構を挙げると、北地区・南地区の竪穴住居と土坑である。中央地区においては僅かな資料が紹介されたにすぎない。遺跡を鳥瞰すると中央地区を避けるように竪穴住居の分布が窺える。7世紀後半～8世紀前半に、瓦葺き建物が存在したと考えれば、このような状況を呈することもうなずけよう。また、この時期に瓦を葺く大規模な建物は、寺院としての性格を持つと言えよう。

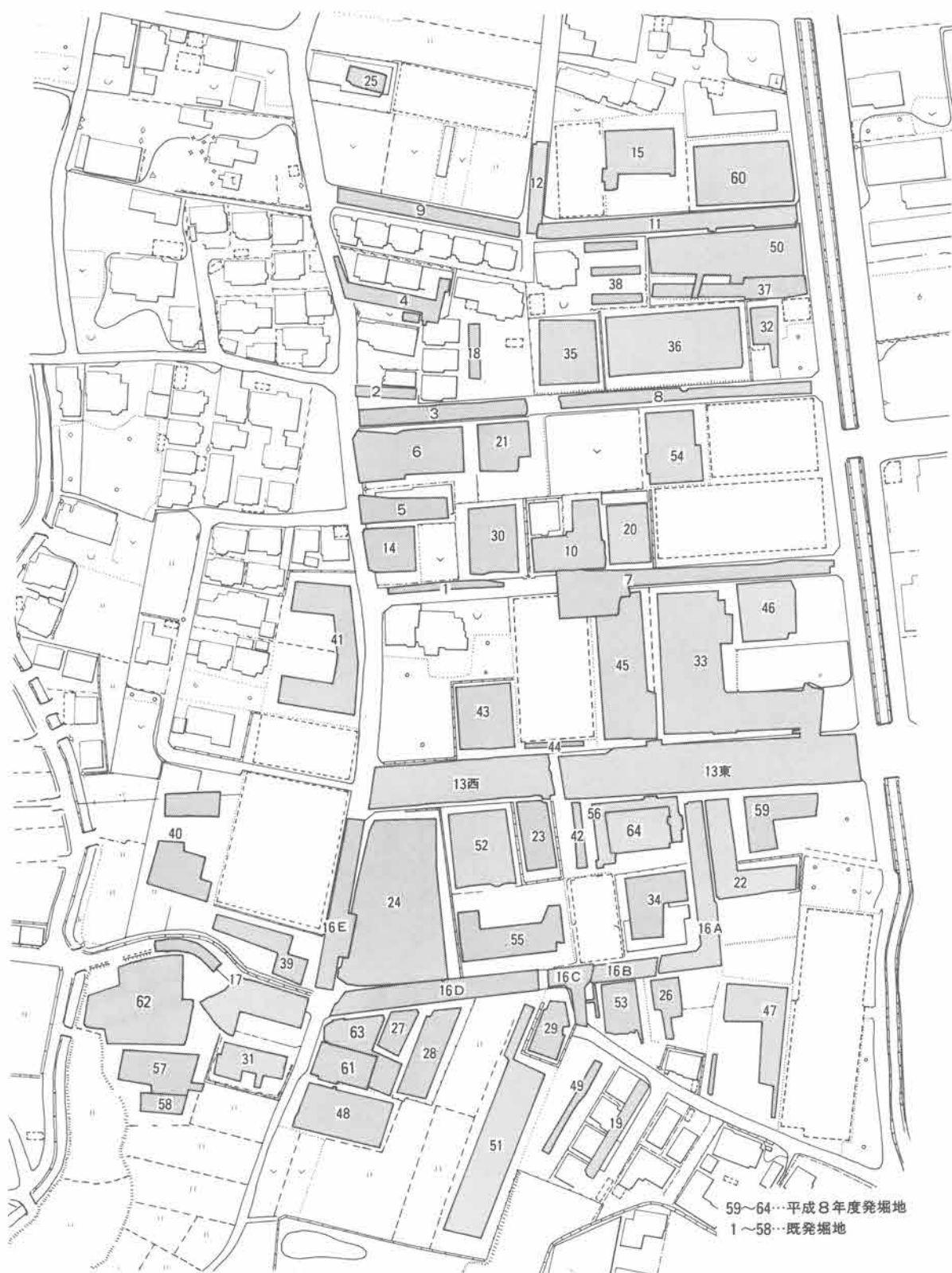
1点の瓦の出土によって遺跡の一時期の再考の試みを行ってみたが、現在、ヘボノ木遺跡の出土遺物を再度分析・検討を行っている。第1次から第64次まで、ヘボノ木遺跡の6割程の面積を調査しているにもかかわらず、いまひとつ性格・時期の決め手を欠いている。これまでに得た莫大な資料を再検討することは、今回出土した軒丸瓦が過去の調査で出土していたかもしれないという疑心を取り除く手立てにもなろう。換言すれば、見逃していた資料の発見や整理、分析をあらゆる角度で行うことである。かなりの時間を費やすと思われるが、これを行なわないとヘボノ木遺跡が筑後国府・御井郡衙関連の官衙なのか、寺院か、またはそれらが移行した性格を持つのか、全体像を捉えることはできない。

参考文献

1. 『小郡市史』 第1巻 通史編 小郡市 1996
2. 『九州古瓦図録』 九州歴史資料館編 1981
3. 小田富士雄『九州考古学研究』 歴史時代篇 学生社 1977
4. 『久留米市史』 第12巻 資料編 考古 久留米市 1994
5. ヘボノ木遺跡掲載報告書

久留米市文化財調査報告書（第21・25・29・39・43・45・50・53・58・61・66・71・83・90・98・115・121・122集）

久留米市教育委員会 1979～1996



第134図 ヘボノ木遺跡発掘調査地域図 (1/2,000)

報告書抄録

ふりがな		へぼのきいせき						
書名		平成8年度　へ　ボ　ノ　木　遺　跡　　発掘調査概要						
副書名								
巻次								
シリーズ名		久留米市文化財調査報告書						
シリーズ番号		第　１２５　集						
編著者名		園井正隆・富永直樹						
編集機関		久留米市教育委員会						
所在地		〒830　福岡県久留米市城南町15－3　☎0942－30－9225						
発行年月日		西暦　1997年　3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村　遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査の原因
へぼのきいせき へボノ木遺跡	ふくおかけんく　るめし 福岡県久留米市 ひがしあいかわさんちょうめ 東合川三丁目	40203	9534	33度 18分 40秒	130度 33分 9秒	第59次 1996年7月8日 ～1996年8月7日 第60次 1996年8月1日 ～1996年10月23日 第61次 1996年8月19日 ～1996年9月10日	270 650 228	専用住宅建設に伴う事前調査 専用住宅建設に伴う事前調査 専用住宅建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主　な　遺　構		主　な　遺　物		特　記　事　項	
へボノ木遺跡 第59次調査	官衙	奈良～ 平安時代	掘立柱建物　…… 5棟 土坑　…… 6基 溝　…… 2条		土師器・須恵器・軒丸瓦 平瓦・丸瓦・白磁・青磁 石器・縄文土器・近世磁器		東地区の倉庫群に伴う 2間×3間の総柱建物 を検出。	
第60次調査	官衙	奈良～ 平安時代	竪穴住居　…… 10軒 掘立柱建物　…… 8棟 土坑　…… 5基 溝　…… 4条		土師器・須恵器・鉄製品 縄文土器・石器・近世磁器		北地区の中心建物の北 側の調査。重複した竪穴 住居から掘立柱建物に 移行する。	
第61次調査	官衙	縄文晩期 奈良～ 平安時代	竪穴住居　…… 1軒 掘立柱建物　…… 1棟 柵　…… 1列 土坑　…… 2基		土師器・須恵器・縄文土器 白磁・丸瓦		南地区の北部の調査。 縄文晩期の鉢が完形で 出土	

平成8年度

へボノ木遺跡

久留米市文化財調査報告書 第125 集

平成9年3月31日

発行：久留米市教育委員会

〒830 久留米市城南町15-3

印刷：福岡市中央区天神5-4-16

瞬報社写真印刷株式会社